北原本郷遺跡 1

－1～3・6区の調査－

尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7

2005年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

北原本郷遺跡 1

－1～3・6区の調査－

尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7

2005年3月

国土交通省中国地方整備局
島 根 県 教 育 委 員 会

北原本郷遺跡全景（南上から）

巻頭図版 2

1　SI06（焼失住居）

2　旧河道 1 出土縄文土器

序

斐伊川・神戸川総合開発事務所では、いわゆる斐伊川・神戸川治水計画３点セットの一翼を担う事業として、斐伊川の上流において尾原ダムの建設事業を進めています。

ダム建設事業の実施に際しては、埋蔵文化財の保護にも充分に留意すべく必要な調査の実施、記録の保存につとめるものとし、島根県教育委員会をはじめ関係各位のご協力をいただき、平成11年度から計画的に発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成14・15年度に実施した北原本郷遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。本報告書が郷土の歴史教育等のために広く活用されることを期待します。

最後に、今回の発掘調査並びに報告書のとりまとめにあたり、ご指導ご協力いただきました関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成17年３月

国土交通省中国地方整備局
斐伊川・神戸川総合開発工事事務所
所長　則松秀晴

序

島根県教育委員会では、国土交通省中国地方整備局の委託を受け、平成11年度から尾原ダム建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりました。本書は、このうち平成14・15年度に発掘調査を実施しました雲南市北原本郷遺跡の調査成果をまとめたものです。

尾原ダムが建設される斐伊川は中国山地に源を発し、日本海に向け北流しています。流域には埋蔵文化財を含めて数多くの歴史的文化遺産が残されており、特に砂鉄や木炭などの豊富な資源を利用したたたら製鉄が最近まで行われ、重要な産業として栄えました。

本書に掲載した北原本郷遺跡では、縄文時代の土器や石器、祭祀に用いられたと考えられる土製品などが出土しました。また、弥生時代中期から古墳時代初頭の集落跡も確認されるなど、当時の人々の営みを考える上で貴重な資料が得られました。本書が、地域の歴史と文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

終わりにあたり、発掘調査及び本書の作成につきまして、地元の皆様をはじめ、国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所、雲南市教育委員会など関係者各位より御指導・御協力を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

平成17年３月

島根県教育委員会

教育長　広　沢　卓　嗣

例　　言

1．本書は国土交通省中国地方整備局から委託を受けて、島根県教育委員会が平成14・15年度に実施した尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘地は下記のとおりである。

北原本郷遺跡　１～３区：島根県雲南市木次町（平成16年10月31日まで大原郡木次町）
北原261-1ほか
６区：島根県雲南市木次町北原305、306-1

3．調査主体　島根県教育委員会
調査に関する経費は国土交通省中国地方整備局が負担した。
調査組織は本文中に記した。

4．挿図中の方位は測量法による第Ⅲ系座標Ｘ軸の方向を指す。また、平面直角座標系ＸＹ軸は日本測地系による。レベルは海抜高を示す。

5．現地調査及び報告書作成に当たって下記の方々から御指導、御助言、御協力を頂いた。（五十音順。敬称略）
穴澤義功（たたら研究会委員）　五十川伸矢（京都橘女子大学教授）　坂本諭司（雲南市教育委員会）　杉原清一（島根県文化財保護指導委員）　田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）　千葉　豊（京都大学埋蔵文化財センター）　中村唯史（島根県立三瓶自然館）　野津　旭（仁多町教育委員会）　蓮岡法暲（島根県文化財保護審議会委員）　濵田竜彦（鳥取県教育委員会）　矢野健一（立命館大学助教授）　山田康弘（島根大学助教授）

6．第５図は国土地理院発行の1/25,000図「湯村」（平成14年）を使用した。

7．巻頭図版１・図版１・３の写真は株式会社ワールドが撮影した。図版３の写真は国際航業株式会社が撮影した。図版２の写真は国際航業株式会社と株式会社ワールドが撮影した写真を合成したものである。

8．現地の実測図は調査員、調査補助員が作成した。本書に掲載した遺物の実測は東山、中川、山根、福間、伊藤、稲田、舟木ほかが行った。本書に掲載した写真は東山、中川が撮影した。

9．本報告書の執筆は第６～10章を除き各調査員が分担して行ない、その文責を目次に記した。また、第６章は若月利之氏・三浦聡子氏（島根大学生物資源科学部）に、第７章は株式会社古環境研究所に、第８章はパリノ・サーヴェイ株式会社に、第９章は大澤正己氏・鈴木瑞穂氏（九州テクノリサーチ・ＴＡＣセンター）に、第10章は藁科哲男氏（京都大学原子炉実験所）に御執筆いただいた。

10．本書の編集は東山、中川が行った。

11．本書掲載の遺跡出土遺物、実測図、写真などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（島根県松江市打出町33）で保管している。

凡　例

1．本報告書における実測図は下記の縮尺で掲載した。

（1）遺構図　1/10・1/20・1/40・1/60・1/80

（2）遺物実測図　土器：1/3・1/4・1/6　土製品：1/2・1/3

石器・石製品：1/1・1/2・1/3・1/4・1/6　金属器：1/2

鉄生産関連遺物：1/2・1/3・1/4

2．遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗りにし、陶器は断面にスクリーントーンを貼った。石器、石製品には断面に斜線を入れた。

3．挿図中に用いたスクリーントーンはそれぞれ以下のものを表す。

：地山および遺構の底面　　：焼土

：撹乱・盛土・表土　　：赤塗範囲

4．本文中、挿図中、写真図版中の遺物番号は一致する。

5．遺構の呼称は、下記のとおりである。なお、発掘調査時における遺構名・番号は報告書作成時に変更した。

SI：竪穴住居跡　SB：掘立柱建物跡　SK：土坑　SD：溝　SA：柵列

SX：不明遺構

6．遺物観察表の色調は『標準土色帖』を参考にした。

7．本報告書で用いた土器の分類および編年観は基本的に下記の各論文・報告書を参考にした。

（1）縄文土器

小林達雄編『縄文土器大観』第1巻　小学館　1989

小林達雄編『縄文土器大観』第3巻　小学館　1989

小林達雄編『縄文土器大観』第4巻　小学館　1989

柳浦俊一「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年」『島根考古学会誌』第17集　島根県考古学会　2000　pp.169～196

濵田竜彦「因幡・伯耆地域の突帯文土器と遠賀川式土器」『突帯文と遠賀川』　土器持寄会論文集刊行会　2000　pp.349～380

千葉　豊「沖丈遺跡出土縄文後期土器の編年的意義」『沖丈遺跡』　島根県邑智町教育委員会　2001　pp.306～318

（2）弥生土器

松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』　木耳社　1992　pp.414～482

（3）土師器・須恵器

島根県鹿島町教育委員会『南講武草田遺跡』　1992

大谷晃司「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　1994　pp.39～82

（4）瓷器系陶器

広江耕史「島根県における中世土器について」『松江考古』第8号　松江考古談話会　1992　pp.9～21

山陰考古学研究集会「山陰における中世前半の貿易陶磁」『第26回山陰考古学研究集会』　1998

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯と調査の経過（東山信治）…… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査組織 …… 5
　第３節　調査の経過 …… 5
第２章　周辺の遺跡（東山信治） …… 7
第３章　１～３区の調査（東山信治） …… 11
　第１節　調査の概要 …… 11
　第２節　調査区の層序 …… 11
　第３節　黒色砂４～黄色砂４上面の調査 …… 16
　第４節　黒色砂３～黄色砂３上面の調査 …… 17
　第５節　黒色砂２～黄色砂２上面の調査 …… 34
　第６節　黒色砂１～黄色砂１上面の調査
　　１　縄文時代の遺構・遺物 …… 39
　　２　弥生時代～古墳時代初頭の遺構・遺物 …… 54
　　３　石器（稲田陽介） …… 87
　第７節　古墳時代～中世の遺構・遺物 …… 93
　第８節　鉄生産関連の遺構・遺物 …… 102
　第９節　製鉄関連遺物（分析資料）の考古学的観察 …… 118
　第10節　小結 …… 135
第４章　６区の調査（中川　寧） …… 141
　第１節　縄文時代の遺構 …… 146
　第２節　弥生時代の遺構 …… 150
　第３節　古代～中世の遺構 …… 150
　第４節　遺物
　　１　縄文土器 …… 154
　　２　弥生土器 …… 155
　　３　土師器・須恵器・瓷器系陶器 …… 156
　　４　石器（稲田陽介） …… 156
　第５節　小　結 …… 158
第５章　総　括（東山信治） …… 177
第６章　土器埋設遺構の土壌分析結果（若月利之・三浦聡子） …… 181
第７章　放射性炭素年代測定（株式会社　古環境研究所） …… 182
第８章　焼失住居の炭化材樹種同定（パリノ・サーヴェイ株式会社） …… 184
第９章　１～３区出土鍛冶関連遺物の金属学的調査（大澤正己・鈴木瑞穂） …… 191
第10章　６区出土の黒曜石、安山岩製遺物の原材産地分析（藁科哲男） …… 238

挿図目次

第１図　北原本郷遺跡の位置　1
第２図　北原本郷遺跡調査区配置図　2
第３図　北原本郷遺跡グリッド設定図　3
第４図　範囲確認調査トレンチ土層図　4
第５図　北原本郷遺跡とその周辺の遺跡　8
第６図　１区北壁土層図　12
第７図　１区南壁土層図　13
第８図　３区中央ベルト土層図　14
第９図　３区南壁土層図　15
第10図　１・２区　黄色砂４上面地形図　16
第11図　１・２区　黒色砂４出土遺物　17
第12図　１～３区　黄色砂３上面遺構配置図　18
第13図　土器埋設遺構１、埋設土器　19
第14図　旧河道１・２土層図　19
第15図　１～３区　黒色砂３遺物分布状況　21～22
第16図　旧河道１出土縄文土器（１）　24
第17図　旧河道１出土縄文土器（２）　25
第18図　旧河道１出土縄文土器（３）　26
第19図　旧河道１出土縄文土器（４）　27
第20図　旧河道１出土縄文土器（５）　28
第21図　旧河道１出土縄文土器（６）　29
第22図　旧河道１出土縄文土器（７）　30
第23図　旧河道１出土縄文土器（８）　31
第24図　旧河道１出土縄文土器（９）・石器　32
第25図　旧河道２出土遺物　33
第26図　１～３区　黒色砂３出土遺物　33
第27図　１～３区　黄色砂２上面遺構配置図　36
第28図　平地式建物跡１　37
第29図　SX01、出土遺物　37
第30図　SK01～06　38
第31図　１～３区　黒色砂２出土遺物　39
第32図　１～３区　黒色砂１～黄色砂１上面遺構配置図　41～42
第33図　SX02・SK07　43
第34図　SK08・09、出土遺物　44
第35図　SK10～12、出土遺物　45
第36図　SK13～18、出土遺物　46
第37図　旧河道３・出土遺物　48
第38図　不明土製品出土状態　49
第39図　不明土製品・磨石　49
第40図　１～３区　表土～黒色砂１出土縄文土器（１）　50
第41図　１～３区　表土～黒色砂１出土縄文土器（２）　51
第42図　１～３区　表土～黒色砂１出土縄文土器（３）　52
第43図　１～３区　表土～黒色砂１出土縄文土器（４）　53
第44図　SI01、出土遺物　55
第45図　SI02、出土遺物　56
第46図　SI03　56
第47図　SI03出土遺物　57
第48図　SI04・13　58
第49図　SI04・13出土遺物　59
第50図　SI05　60
第51図　SI05出土遺物　61
第52図　SI06炭化材検出状態　62
第53図　SI06　63
第54図　SI06出土遺物　65
第55図　SI07・08　66
第56図　SI07・08出土遺物　67
第57図　SI09　68
第58図　SI10　68
第59図　SI11・出土遺物　69
第60図　SI12　70
第61図　SB01～04，SA01　71
第62図　加工段１　73
第63図　加工段１出土遺物（１）　74
第64図　加工段１出土遺物（２）　75
第65図　SD01～04、出土遺物　76
第66図　SK19～24、出土遺物　77
第67図　SK25～32　78
第68図　１～３区　弥生土器（１）　81
第69図　１～３区　弥生土器（２）　82
第70図　１～３区　弥生土器（３）　83
第71図　１～３区　弥生土器（４）　84
第72図　１～３区　弥生土器（５）　85
第73図　１～３区　弥生土器（６）・古式土師器・土製品　86
第74図　１～３区　表土～黒色砂１出土石器（１）　89
第75図　１～３区　表土～黒色砂１出土石器（２）　90
第76図　１～３区　表土～黒色砂１出土石器（３）　91
第77図　１～３区　表土～黒色砂１出土石器（４）　92
第78図　１～３区　古墳時代～中世の遺構　94
第79図　SB05　95
第80図　配石遺構1　95
第81図　SK33～35　95
第82図　SK36～39、出土遺物　96
第83図　SD05・06　96
第84図　SD07～09　97
第85図　SD10～13　98
第86図　土器群１、出土遺物　99
第87図　１～３区　土師器・須恵器・製塩土器　100
第88図　１～３区　中世の土器・陶磁器　101
第89図　鉄床石、鉄滓分布状況　103
第90図　１区鉄関連遺物構成図（１）　105
第91図　１区鉄関連遺物構成図（２）　106
第92図　１区鉄関連遺物実測図（１）　107
第93図　１区鉄関連遺物実測図（２）　108
第94図　１区鉄関連遺物実測図（３）　109
第95図　１区鉄関連遺物実測図（４）　110
第96図　１区鉄関連遺物実測図（５）　111
第97図　１区鉄関連遺物実測図（６）　112
第98図　１区鉄関連遺物実測図（７）　113
第99図　I39鉄鍋破片出土状態　114
第100図　１区鉄関連遺物実測図（８）　114
第101図　２区鉄関連遺物構成図　115
第102図　３区鉄関連遺物構成図　115
第103図　２区鉄関連遺物実測図　116
第104図　３区鉄関連遺物実測図　117
第105図　１～３区鉄関連遺物分析資料切断位置　130
第106図　１～３区　出土遺物分布図（１）　138
第107図　１～３区　出土遺物分布図（２）　139
第108図　１～３区　出土遺物分布図（３）　140
第109図　６区調査区全体図　141
第110図　遺構配置図（縄文前期～後期）　142
第111図　遺構配置図（縄文晩期）　143
第112図　北壁土層図　144
第113図　南壁土層図・北壁土層図（２）　145
第114図　SK40　146
第115図　遺物分布図（１）　147
第116図　遺物分布図（２）　148
第117図　弥生時代・中世・近世以降の遺構　149
第118図　SK41・SD14　151
第119図　SB06・土器溜　152
第120図　SB07・SA02　153
第121図　出土遺物分布図　159
第122図　縄文土器（１）　160
第123図　縄文土器（２）　161
第124図　縄文土器（３）　162
第125図　縄文土器（４）　163
第126図　縄文土器（５）　164
第127図　縄文土器（６）　165
第128図　SK41・SD14・土器溜出土土器　166
第129図　弥生土器（１）　167
第130図　弥生土器（２）・土師器・須恵器・中世の土器・土製品　168
第131図　石器（１）　169
第132図　石器（２）　170
第133図　石器（３）　171
第134図　石器（４）　172
第135図　石器（５）　173
第136図　石器（６）　174
第137図　遺構配置図（１）　175
第138図　遺構配置図（２）　176

表　目　次

表1　周辺の遺跡一覧表 …… 9
表2　1～3区　鉄関連遺物分析資料一覧表 …… 119
表3　1～3区　鉄関連遺物分析資料詳細観察表 120
表4　1～3区　鉄関連遺構・遺物主要要素一覧表 137
表5　1～3区　竪穴住居跡一覧 …… 251
表6　1～3区　建物跡計測表 …… 251
表7　1～3区　土坑計測表 …… 255
表8　1～3区　土器観察表 …… 256
表9　1～3区　土製品観察表 …… 268
表10　1～3区　石器計測表 …… 269
表11　1～3区　剥片計測表 …… 272
表12　1～3区　鉄関連遺物観察表 …… 274
表13-1　黒色砂4出土縄文土器数量表 …… 278
表13-2　黒色砂3出土縄文土器数量表 …… 278
表13-3　黒色砂2出土縄文土器数量表 …… 279
表13-4　黒色砂1出土縄文土器数量表 …… 279
表13-5　弥生土器・古式土師器数量表 …… 282
表13-6　土師器・須恵器数量表 …… 285
表13-7　中世土器・陶磁器数量表 …… 286
表14　1～3区　鉄関連遺物重量表 …… 287
表15　6区　建物一覧表 …… 288
表16　6区　建物計測表 …… 288
表17　6区　土器・土製品観察表 …… 288
表18　6区　石器一覧表 …… 292
表19-1　6区　縄文土器数量表 …… 294
表19-2　6区　弥生土器数量表 …… 295
表19-3　6区　土師器・須恵器・陶磁器数量表 …… 295
表20-1　6区　黒曜石剥片計測表 …… 296
表20-2　6区　安山岩剥片計測表 …… 297
表20-3　6区　その他の石材剥片計測表 …… 298
表21　6区　ピット一覧表 …… 299
表22　6区　石錘計測表 …… 300
表23　6区　鉄滓一覧表 …… 300

巻頭図版目次

巻頭図版1　北原本郷遺跡全景（南上から）
2－1　SI06焼失住居
－2　旧河道1出土縄文土器

本文中写真目次

写真1　1～3区鉄関連遺物分析資料（1） …… 131
2　1～3区鉄関連遺物分析資料（2） …… 132
3　1～3区鉄関連遺物分析資料（3） …… 133
4　1～3区鉄関連遺物分析資料（4） …… 134

図版目次

図版1　北原本郷遺跡1～6区（真上から）
2　北原本郷遺跡1～3区空中撮影写真（合成）
3-1　北原本郷遺跡1区（真上から）
2　北原本郷遺跡1区南側竪穴住居跡群（真上から）
4-1　北原本郷遺跡2区完掘写真（真上から）
2　北原本郷遺跡3区完掘写真（真上から）
5-1　北原本郷遺跡調査前写真（北から）
2　北原本郷遺跡1区作業風景(北から)
3　1区南壁土層
6-1　3区中央ベルト土層(南から)
2　3区南壁土層
3　3区黄色砂3上面(南から)
7-1　旧河道1(北から)
2　土器埋設遺構1検出（北から）
3　土器埋設遺構1掘り方断面（北から）
8-1　土器埋設遺構1埋設土器内土層(北から)
2　土器埋設遺構1完掘(北から)
3　土器埋設遺構1土器取り上げ後（北から）
9-1　旧河道1土器出土状態（南から）
2　旧河道1土器出土状態（西から）
3　旧河道2土層断面（南から）
10-1　旧河道2遺物出土状態（南から）
2　平地式建物跡1（真上から）
3　平地式建物跡1（東から）
11-1　1区南壁SX01土層
2　SK01礫検出(南から)
3　SK01完掘(南から)
12-1　SK08土層断面（北から）
2　SK08礫検出（西から）
3　SK09遺物出土（東から）
13-1　SK10覆土上部の礫（北から）
2　SK10礫検出状態（北から）
3　旧河道3（南から）
14-1　不明土製品出土状態（東から）
2　SI01完掘（西から）
3　SI02土層断面（北から）
15-1　SI02完掘（西から）
2　SI03検出（西から）
3　SI03完掘(西から)
16-1　SI04土層・SI13検出（東から）
2　SI04・SI13完掘（東から）
3　SI13完掘(北から)
17-1　SI05検出（西から）
2　SI05遺物出土状態（西から）
3　SI05遺物出土状態（南から）
18-1　SI05新段階完掘（西から）
2　SI05古段階完掘（西から）
3　SI06検出（西から）
19-1　SI06炭化材検出(西から)
2　SI06完掘(西から)
20-1　SI06炭化材検出(北から)
2　SI06カヤ状の炭化材
3　SI06床面土器出土状態(南から)
21-1　SI06床面鉄斧出土状態
2　SI07～09検出(北から)
3　SI07～09完掘(北から)
22-1　SI07柱穴検出(西から)
2　SI07完掘（西から）
3　SI08柱穴検出(西から)
23-1　SI08完掘（西から）
2　SI09完掘（北から）
3　SI10炭化材検出（東から）
24-1　SI10完掘（東から）

2　SI11完掘（東から）
3　SI12完掘　（南から）
25-1　SB01・04（北から）
2　SB02・03（東から）
3　加工段１土層（南から）
26-1　加工段１（北から）
2　SD01（西から）
3　SD01土器出土状態(西から）
27-1　SB05（西から）
2　配石遺構１（東から）
3　配石遺構１（南から）
28-1　配石遺構１下部土坑土層（東から）
2　配石遺構１下部土坑（東から）
3　SK37鉄刀出土状態
29-1　SD11～13検出（南から）
2　土器群１(北から）
3　鉄床石・再結合滓検出（西から）
30-1　鉄床石（東から）
2　鉄床石上面（北東から）
3　I39鉄鍋破片出土状態（南から）
31-1　黒色砂４出土遺物
2　土器埋設遺構１　埋設土器
32　旧河道１出土縄文土器（１）
33　旧河道１出土縄文土器（２）
34　旧河道１出土縄文土器（３）
35　旧河道１出土縄文土器（４）
36　旧河道１出土縄文土器（５）
37　旧河道１出土縄文土器（６）
38　旧河道１出土縄文土器（７）
39　旧河道１出土縄文土器（８）
40　旧河道１出土縄文土器（９）
41　旧河道１出土縄文土器（10）
42　旧河道１出土縄文土器（11）
43-1　旧河道１出土縄文土器（12）
2　旧河道１出土石器
44　旧河道２出土遺物
45　黒色砂３出土遺物
46　SX01・黒色砂２出土遺物
47　SK08～10・13、旧河道３出土遺物
48　不明土製品・磨石
49　１～３区　表土～黒色砂１出土縄文土器（１）
50　１～３区　表土～黒色砂１出土縄文土器（２）
51　１～３区　表土～黒色砂１出土縄文土器（３）
52　１～３区　表土～黒色砂１出土縄文土器（４）
53　SI01・02出土遺物
54　SI03・04・13出土遺物
55　SI05出土遺物（１）
56-1　SI05出土遺物（２）
2　SI06床面出土土器
57　SI06～08・11出土遺物
58　加工段1出土遺物（１）
59　加工段1出土遺物（２）
60　加工段1・SD04出土遺物
61-1　SK21・23出土遺物
2　１～３区　弥生土器（１）
62　１～３区　弥生土器（２）
63　１～３区　弥生土器（３）
64　１～３区　弥生土器（４）
65　１～３区　弥生土器（５）
66　１～３区　弥生土器（６）
67　１～３区　弥生土器（７）
68-1　１～３区　弥生土器・古式土師器
2　１～３区　弥生土器底部・蓋
3　１～３区　土製品
69　１～３区　石器（１）
70　１～３区　石器（２）
71　１～３区　石器（３）
72　１～３区　石器（４）
73　SK38・土器群１出土遺物
74　１～３区　土師器・須恵器・製塩土器・黒色土器
75-1　１～３区　中世土師器
2　１～３区　中世須恵器・瓦質土器・陶磁器
3　１区　鉄製品
76　１～３区　鉄製品
77-1　６区調査風景
2　V22　石器975出土状態
3　SK40
78-1　北壁西隅　E－F土層
2　G－H土層
79-1　北壁土層
2　北壁土層
3　南壁土層
80-1　黒褐色土完掘状態（北西から）
2　黒褐色土完掘状態（南西から）
81-1　SK41検出
2　SK41断面
82-1　SK41　弥生土器出土状態
2　SK41　弥生土器出土状態
3　SK41P1断面
83-1　SK41完掘
2　SD14
84-1　SB06
2　SB07
85-1　土器溜検出
2　土器溜検出（拡大）
3　土器溜下層
86-1　６区完掘（南西から）
2　６区完掘（北東から）
87　縄文土器（１）
88　縄文土器（２）
89　縄文土器（３）
90　弥生土器（１）
91　SK41　弥生土器（１）
92　SK41　弥生土器（２）・土器溜
93　弥生土器（２）・須恵器・土師器・土製品
94　土師器・中世須恵器・瓷器系陶器・弥生土器の文様・調整
95　石器（１）
96　石器（２）

第１章　調査に至る経緯と調査の経過

第１節　調査に至る経緯

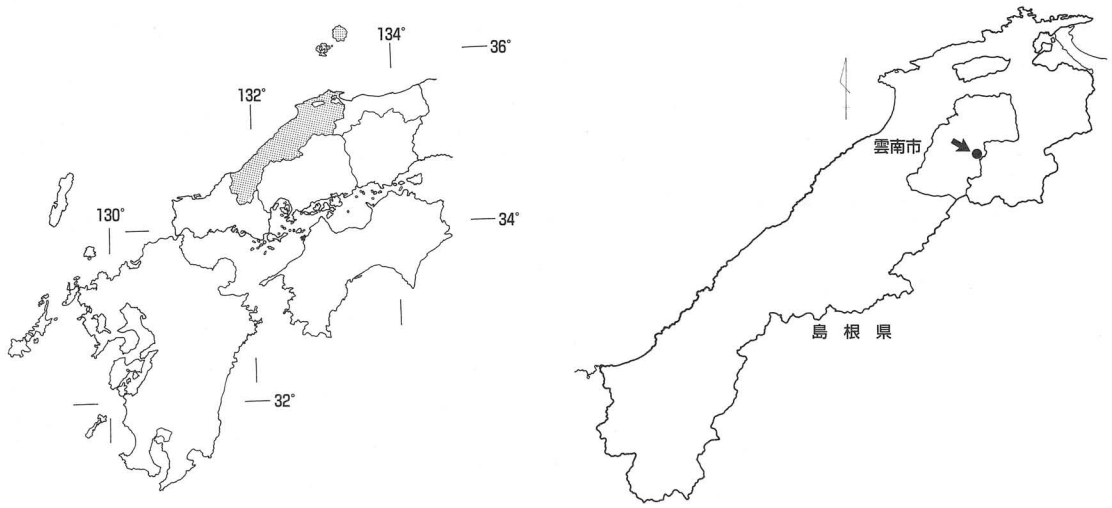
斐伊川は中国山地に源を発し、古くからその流域に広大で肥沃な土地を形成し、出雲地方の豊かな生活を育む一方で、幾度となく水害を及ぼしてきた。

斐伊川の治水事業は大正11年より国の事業として改修が行われたが、斐伊川中・下流域の住民は昭和18年、20年の洪水をはじめ、昭和39年、40年、47年など相次ぐ洪水の来襲に悩まされてきた。なかでも昭和47年７月の洪水では、斐伊川・神戸川とも破堤寸前の危険な状態におかれ、宍道湖の増水により松江市など約70㎢が一週間にわたり浸水した。

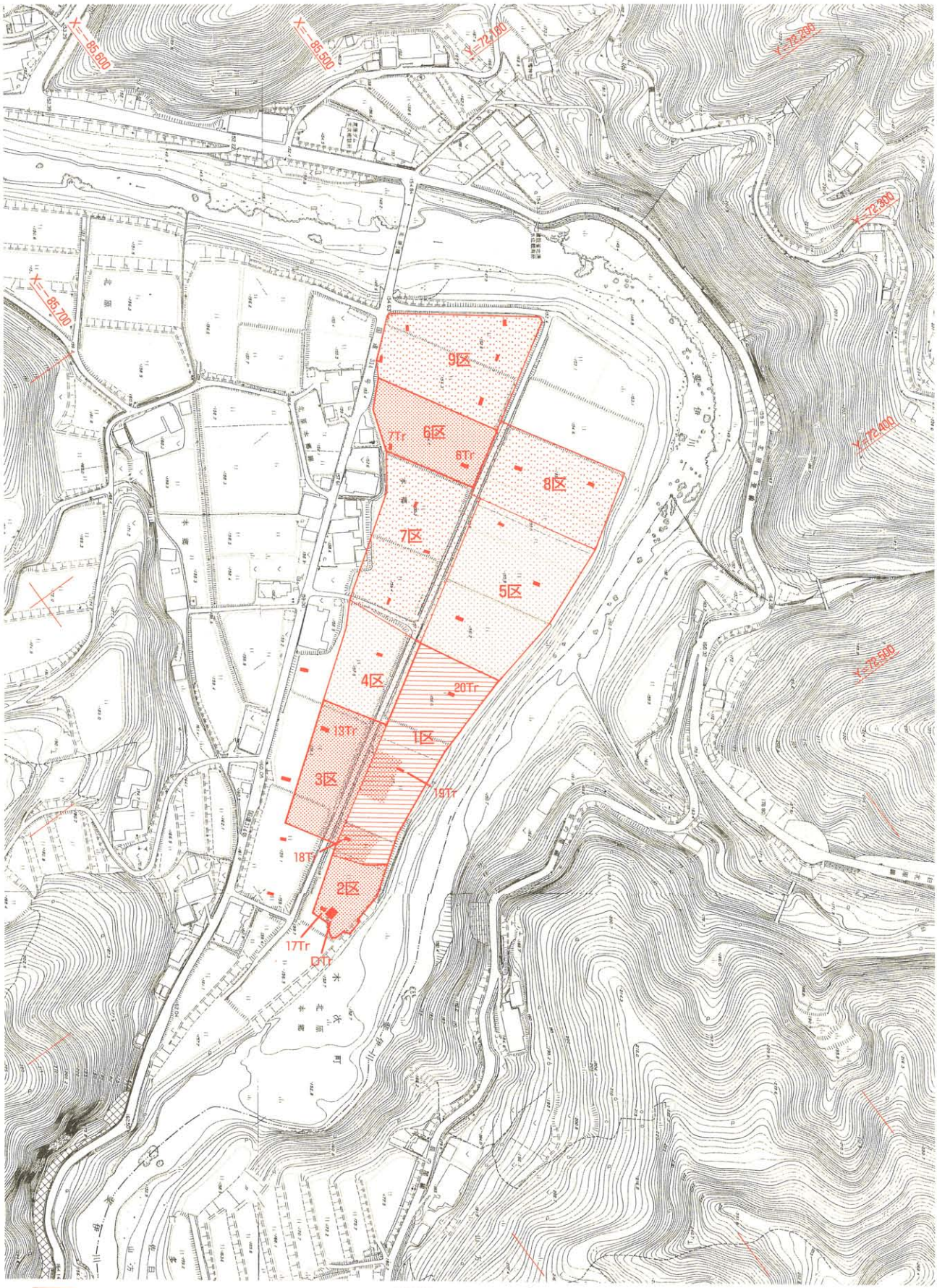
このため、沿川の住民や自治体から斐伊川・神戸川の抜本的な治水対策が要望され、昭和51年７月に工事実施基本計画の改定を行い、いわゆる「治水３点セット」①斐伊川・神戸川上流におけるダムの建設、②中流の斐伊川放水路建設と斐伊川の改修、③下流の大橋川改修と中海・宍道湖湖岸の整備、を基本とした治水対策が具体化した。尾原ダムはこの計画に基づき斐伊川上流の大原郡木次町（当時・現雲南市木次町）・仁多郡仁多町に計画された多目的ダムである。尾原ダム建設事業は平成３年10月の「尾原ダム建設事業に伴う基本協定書」調印を経て着手され、平成５年12月には水源地域対策特別措置法のダム指定を受けた。平成６年２月には「尾原ダム建設に関する基本計画」が公示され、現在建設が進められている。

平成３年６月、建設省中国地方建設局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所（現国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所）から島根県に対し、埋蔵文化財調査の依頼があった。これを受けて島根県教育委員会では平成５年３月と平成６年３月の２回にわたり分布調査を行った。木次町教育委員会（当時・現雲南市教育委員会）と仁多町教育委員会の協力を得て行われたこの調査で、合計81ヶ所の遺跡および要確認調査地を設定した。

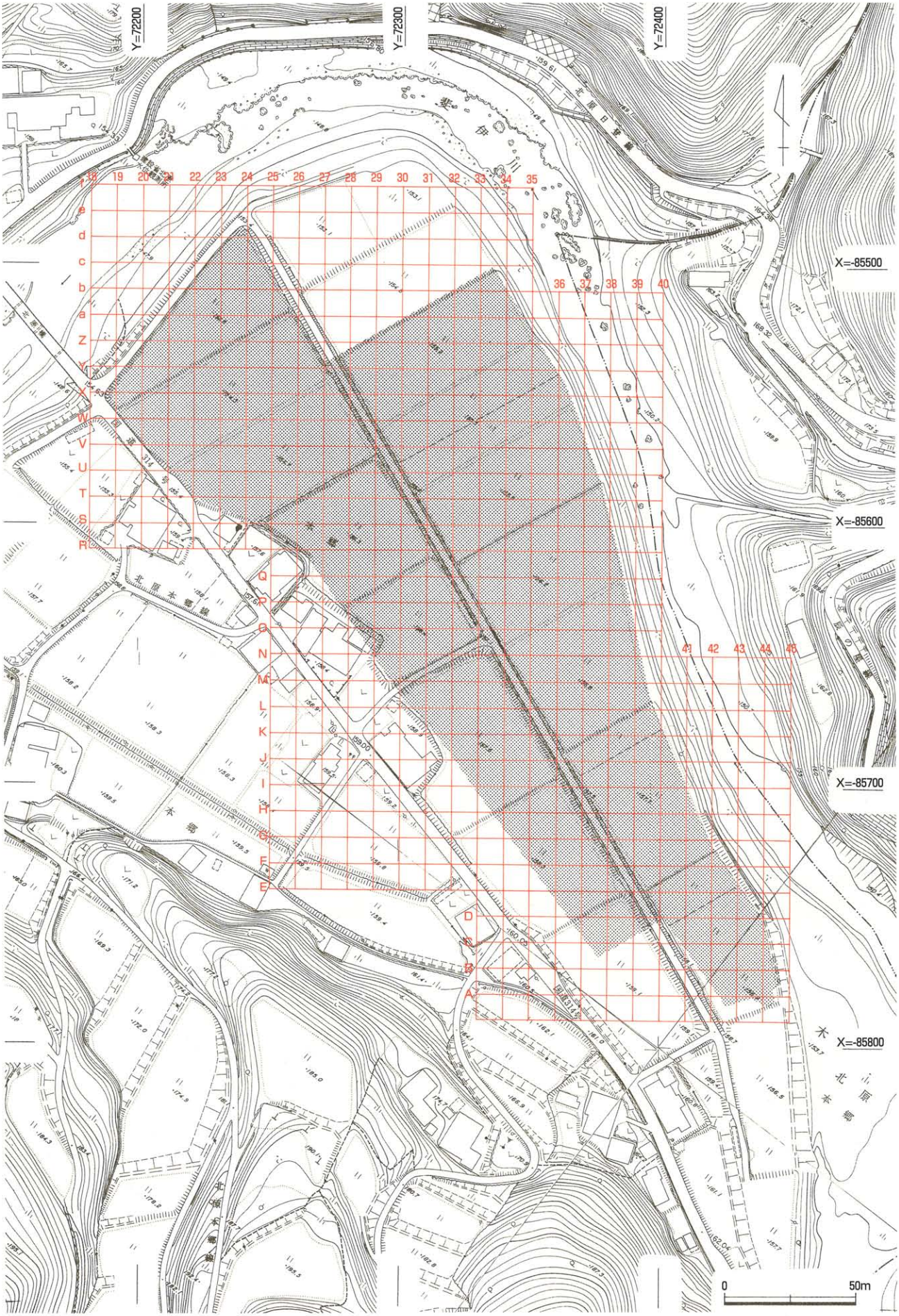
平成10年12月、遺跡の範囲確認調査を平成11年度から実施することが決定した。また、島根県教育委員会、木次町教育委員会、仁多町教育委員会での三者で協議を行い、①確認のため再度分布調査を行うこと、②基本的な分担として、当初はダム本体部分を県が調査し、残土処理場や付け替え



第１図　北原本郷遺跡の位置



第２図　北原本郷遺跡調査区配置図（Ｓ＝1/3000）



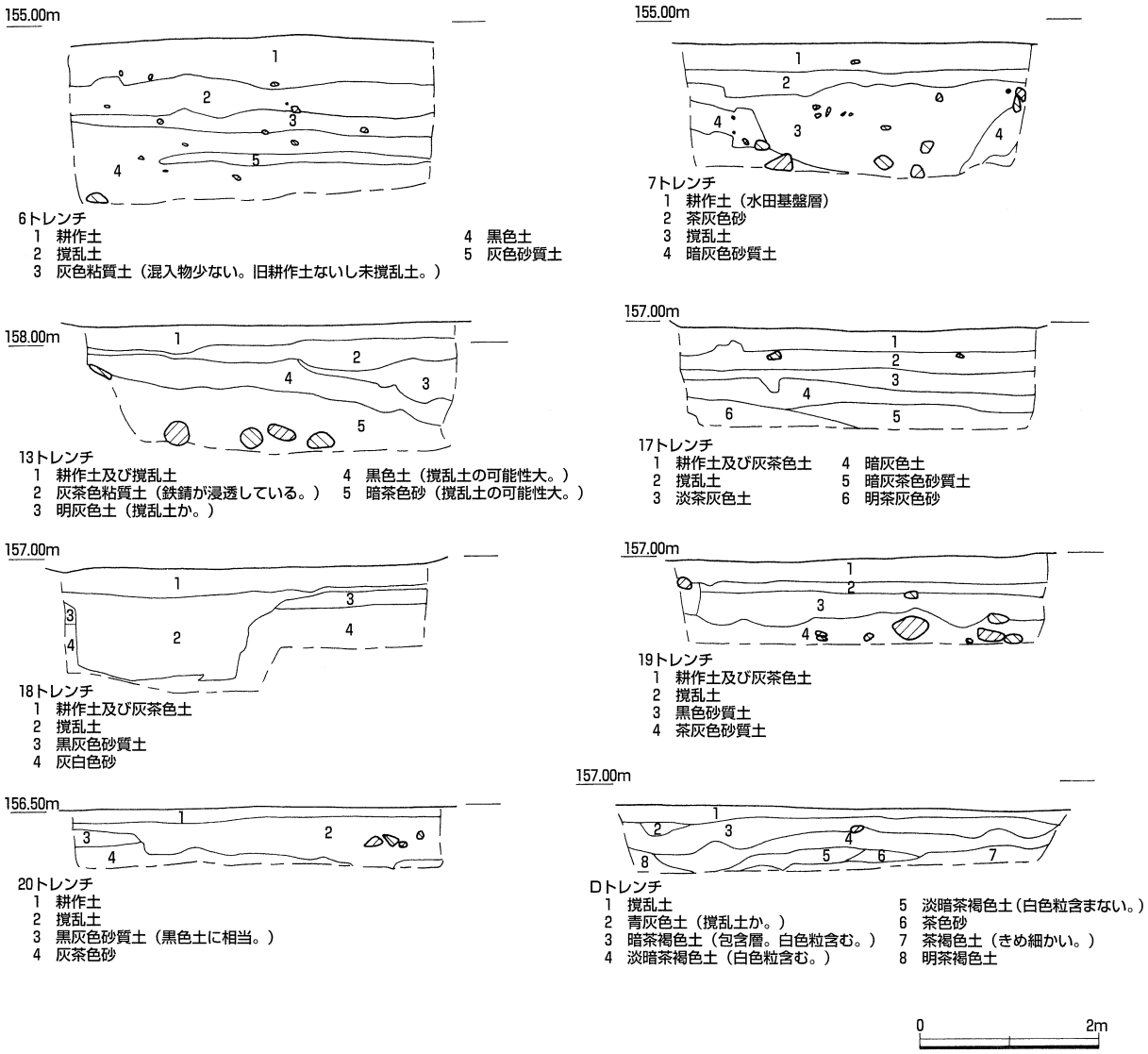
第３図　北原本郷遺跡グリッド設定図（Ｓ＝1/2000）

道路などの付帯設備部分は両町が対応すること、③今後の調査分担は調査状況や各機関の調査体制に応じて調整すること、の３点を確認した。平成11年３月に行われた２度目の分布調査では、新たに32か所の遺跡および要確認調査地を設定し、合計113か所の遺跡および要確認調査地を設定した。

平成11年度、島根県教育委員会は29か所の範囲確認調査を実施し、本報告書収録の北原本郷遺跡を含む11か所について全面発掘調査が必要と判断した。平成12年には20か所で範囲確認調査を行った。平成13年３月に分布調査をあらためて実施し、２か所の要確認調査地を追加した。平成14年には1か所の範囲確認調査を行なった。

本調査は、平成12年度に木次町垣ノ内遺跡と川平Ⅰ遺跡、平成13年度には木次町垣ノ内遺跡と家の後Ⅰ遺跡、尾白Ⅰ遺跡、尾白Ⅱ遺跡、槙ヶ垰遺跡と仁多町家の脇Ⅱ遺跡、平成14年度には木次町北原本郷遺跡、家の後Ⅱ遺跡、仁多町原田遺跡、前田遺跡、平成15年度には木次町北原本郷遺跡、家の後Ⅱ遺跡、下布施氏館跡、仁多町原田遺跡で実施し、これまでに垣ノ内遺跡、川平Ⅰ遺跡、家の後Ⅰ遺跡、尾白Ⅰ遺跡、尾白Ⅱ遺跡、槙ヶ垰遺跡、家ノ脇Ⅱ遺跡、原田遺跡、前田遺跡については報告書が刊行されている。

本報告書は平成14・15年度に発掘調査した北原本郷遺跡の１～３・６区の報告である。



第４図　範囲確認調査トレンチ土層図（Ｓ＝1/80）

第２節　調査組織

下記の体制で発掘調査・報告書作成を行った。

平成14年度（発掘調査）

［事務局］宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）卜部吉博（副所長）内田　融（総務課長）川原和人（調査第２課長）西尾克己（主幹・調査第４係長）

［調査員］東山信治（調査第４係主事）山根洋子（同（兼）文化財保護主事）伊藤悟郎（同調査補助員）

平成15年度（発掘調査）

［事務局］宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）卜部吉博（副所長）永島静司（総務課長）川原和人（調査第２課長）熱田貴保（調査第４係長）

［調査員］

１～３区担当：東山信治（調査第４係主事）福間尚実（同（兼）主事）舟木千晴（同調査補助員）

６区担当：中川　寧（調査第４係文化財保護主事）馬庭範成（同（兼）文化財保護主事）田中強志（同調査補助員）

平成16年度（報告書作成）

［事務局］山根正己（埋蔵文化財調査センター所長）卜部吉博（副所長）永島静司（総務グループ課長）宮澤明久（調査第２グループ課長）熱田貴保（調査第５サブグループリーダー）

［調査員］東山信治（調査第５サブグループ主事）中川　寧（同文化財保護主事）福間尚実（同（兼）文化財保護主事）稲田陽介（同調査補助員）

なお、発掘作業員の雇用などの現地での発掘作業については、島根県教育委員会から（社）中国建設弘済会へ委託して実施した。担当者は以下のとおりである。

社団法人中国建設弘済会島根県支部

（平成14年度）

［現場担当］（技術員）簾　俊治　［事務担当］藤井利恵・山根亜希子

（平成15年度）

［現場担当］（技術員）吉岡智哉・大野紀明　［事務担当］藤井利恵・山根亜希子

第３節　調査の経過

北原本郷遺跡は、島根県雲南市木次町北原に所在する遺跡である。斐伊川が南東へ向けて大きく流れを変える北原地区は、その左岸に斐伊川流域でも有数の規模を持つ河岸段丘が開けている。この河岸段丘上には、北原本郷遺跡をはじめ、家の後Ⅰ遺跡、家の後Ⅱ遺跡が広がっている。北原本郷遺跡はこの河岸段丘の最も東側に位置し、斐伊川に沿って南北に長く広がっている。調査前は水田として利用されていた。平成11年度に行なわれた範囲確認調査の結果、26,950㎡が本調査対象となった。その後、平成14年度に１区の発掘調査に先立って、１区南側の本調査対象外としていた部分に排土処理ための穴を重機で掘っていたところ弥生土器などが出土し、さらにこの周辺に設定したＤトレンチでも縄文土器や弥生土器が出土した。このことから１区南側（２区）の1,200㎡が新たに本調査対象に加わることとなった。また、平成15年度に本調査と並行して行なった追加の範囲確認調査を行なった結果、８区の調査対象面積がさらに1,000㎡広がり、全体の本調査対象面積は最終的に29,150㎡になった。

本調査にあたっては、調査区全体に国土座標系（平面直角座標系ＸＹ座標は日本測地系）にのる基準点を設け、Ｘ＝－85,780、Ｙ＝72,000を基点として、10m間隔で北にＡ・Ｂ…Ｚ・ａ・ｂ…ｅ、東に１・２…45という基準点を設け、その北東側の交点の名称（例えばＥ39）で、１辺10mのグリッドを呼称することとした（第３図）。

平成14年度は、北原本郷遺跡のうち南東側に位置する１区の本調査を実施した。５月上旬から中旬にかけて重機による表土掘削を行ない、５月20日より人力で包含層掘削を開始した。包含層中から縄文土器、弥生土器、石器、鉄滓などの遺物が出土した。7月以降になると弥生時代～古墳時代初頭の竪穴住居跡などが検出され、これらの中には弥生時代後期の焼失住居も確認された。10月９日には蓮岡法暲氏（島根県文化財保護審議会委員）、10月15日には田中義昭氏（島根県文化財保護審議会委員）から現地調査の指導を受けた。11月２日には隣接して調査した家の後Ⅱ遺跡とあわせて現地説明会を開催し、約60名の参加者が来跡した。その後、竪穴住居跡の検出面よりも下層でも遺物包含層が確認できたことから、１区の南側の一部で下層の発掘調査を行ない、12月20日に現地調査を終了した。

平成15年度には、１区下層の未調査部分と２～６区の調査を行なうこととなった。２区は4月14日から包含層掘削をはじめ、縄文時代晩期の土坑や古墳時代前期初頭の加工段、縄文～古墳時代の土器などが検出された。６月26日から３区の調査を開始し、調査の進行とともに１区下層と３区下層の発掘作業を並行して行なった。６区も８月21日から調査を開始した。10月16日には山田康弘氏（島根大学法文学部助教授）から縄文時代の遺構・遺物について現地で調査指導を受けた。11月３日には家の後Ⅱ遺跡、下布施氏館跡とあわせて現地説明会を開催し、約80名の参加者が現地を訪れた。調査区壁面で三瓶山の噴出物と見られる土壌が認められたため、12月８日に中村唯史氏（島根県立三瓶自然館）から現地で指導を受けた。12月12日に現地調査を終了した。

１月19・20日には矢野健一氏（立命館大学文学部助教授）から６区出土の縄文時代早期～前期の土器について調査指導を受けた。１月19日～23日と２月23日～27日にかけて、１～３区から出土した鉄関連遺物について穴澤義功氏（たたら研究会委員）から調査指導を受け、鉄関連遺物の分類や考古学的観察、分析資料の選別等を行なった。

平成16年度は、１～３・６区の報告書作成のため、遺構図の整理・トレース、遺物の分類・実測・写真撮影、図版作成、原稿執筆等の作業を行なった。11月には千葉豊氏（京都大学埋蔵文化財センター）から縄文時代後期の土器について調査指導を受けた。なお、整理作業と並行して、７～９区の現地調査が４月～12月にかけて行なわれ、これにて北原本郷遺跡の現地調査は全て終了した。

第2章　周辺の遺跡

斐伊川中・上流域の遺跡の様相は、近年の尾原ダム建設に伴う発掘調査によって新たな資料が増加し、多くのことが明らかになってきている。以下に周辺の遺跡について概観することとしたい。

旧石器時代　これまで雲南市・仁多町周辺でこの時代の遺跡は確認されていない。

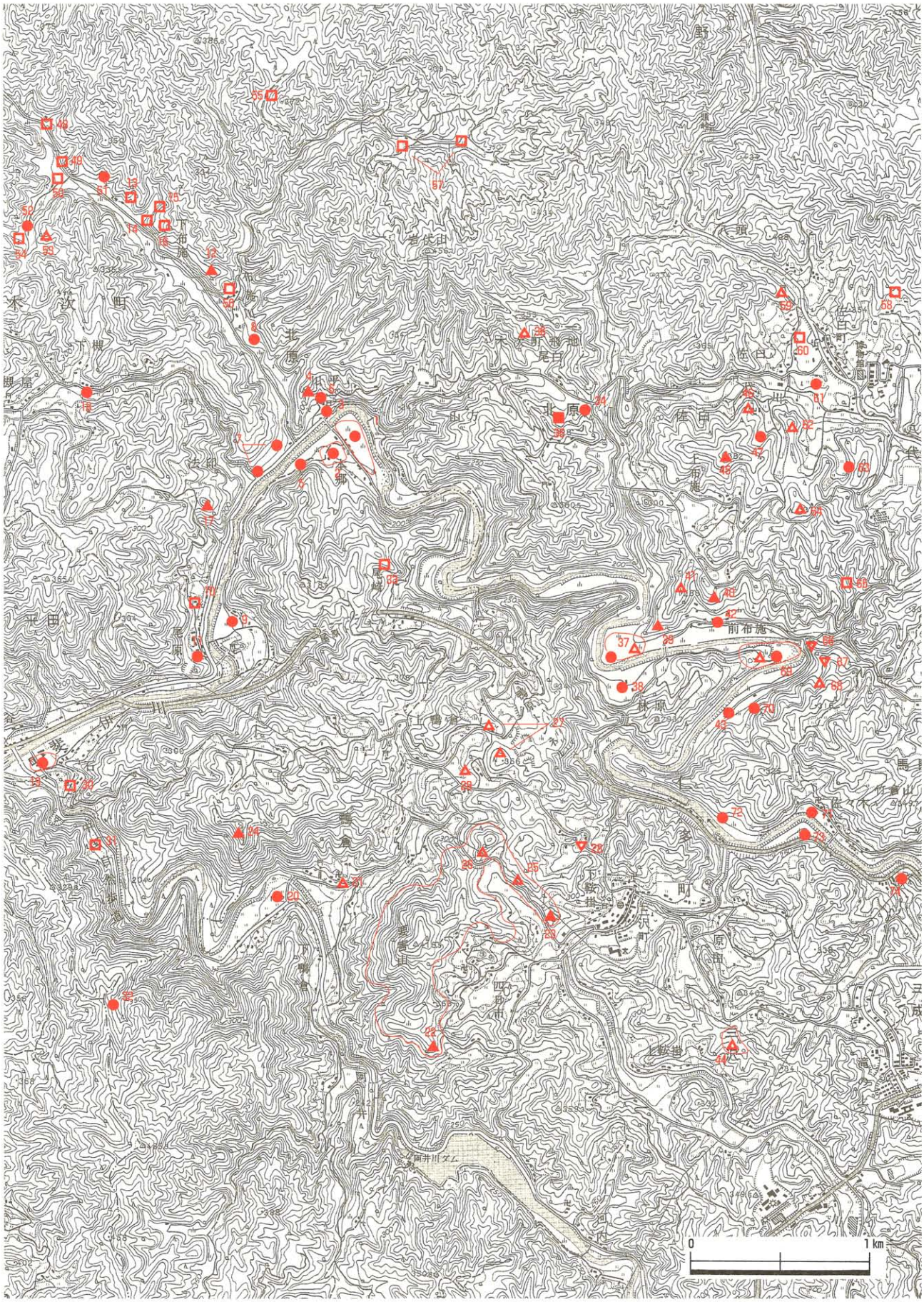
縄文時代　斐伊川中・上流域は縄文時代の遺跡が多く分布する地域である。

この地域で最も古い縄文土器は、雲南市木次町川平Ⅰ遺跡（7）から出土した縄文時代早期の押型文土器である。前期の土器は北原本郷遺跡6区（1）や川平Ⅰ遺跡で、中期の土器は、平田遺跡(19) や垣ノ内遺跡（8）で出土している。川平Ⅰ遺跡では縄文時代早期以降の土坑も検出されている。縄文時代後期には平田遺跡、仁多町下鴨倉遺跡（20)、暮地遺跡（74）などで多数の土器や土坑、土器埋設遺構、土偶が見つかっているほか、家の後Ⅱ遺跡1区（2）では竪穴住居跡が、北原本郷遺跡では平地式建物跡や土器溜まりが検出された。晩期の遺跡も多く、家の後Ⅱ遺跡では土器埋設遺構4基、配石土坑2基、土坑51基が、仁多町原田遺跡（37）では平成14・16年度の調査で土器埋設遺構が合計10基、竪穴住居跡合計5棟、配石（墓）や土坑（墓)、線刻礫が確認された。土器埋設遺構は、これまで暮地遺跡などで例が知られていたが、尾原ダム建設に伴う発掘調査によって確認例が増加し、斐伊川中流域に特徴的な遺構であることがはっきりした。

弥生時代　垣ノ内遺跡では弥生時代中期後葉～古墳時代前期の竪穴住居跡・建物跡が合計16棟確認され、加飾性の強い「塩町系」の土器群が出土した。また、北原本郷遺跡では弥生中期前葉～古墳時代初頭の竪穴住居跡が見つかっており、集落構造を復元できるような資料が増えている。暮地遺跡では中期後葉の竪穴住居跡が2棟検出されたが、うち1棟は焼失住居である。

古墳時代　斐伊川中流域には雲南市加茂町神原神社古墳、三刀屋町松本古墳群、木次町斐伊中山古墳群などの前期古墳が点在する。古墳時代後期には横穴式石室を持つ古墳が見られるようになる。仁多町原田古墳（37）はその中の一つで、墳形や規模は不明であるが、横穴式石室から双龍環頭大刀、金銅製馬具一式、ヒスイ製勾玉などの玉類や鉄器、多数の須恵器が出土しており、当時の近畿地方との密接な関係がうかがわれる。築造時期は6世紀末と考えられる。このほか仁多町には横穴式石室を持つ穴観1号墳（円墳：27）や前方後方墳で横穴式石室を持つ穴観2号墳がある。この地域の横穴墓は平面縦長長方形プランで、断面三角形である。下布施横穴墓群（53）では装飾大刀を副葬した横穴墓が確認されており、このほか仁多町伊賀武社境内横穴墓（59)、殿ヶ迫横穴墓群(41)、時仏山横穴墓（68）なども発掘調査されている。集落遺跡としては古墳時代前期初頭の垣ノ内遺跡、平田遺跡がある。平田遺跡では竪穴住居跡から鍛冶炉や板状・棒状の鉄片などが検出され、火で加熱した鉄素材を鏨で切断する原始的な鍛冶技術で、鉄器が製作されたと考えられている。垣ノ内遺跡では古墳時代後期から再び集落が営まれ、9世紀まで継続する。家ノ脇Ⅱ遺跡では古墳時代後期の集石と土器溜まりが確認されており、祭祀跡もしくは土器を廃棄した場所と考えられている。

奈良・平安時代　雲南市木次町寺田Ⅰ遺跡（14)、仁多町原田遺跡では奈良時代の鍛冶遺構が、槙ヶ垰遺跡（33）では平安時代の製鉄関連遺物が確認されている。寺田Ⅰ遺跡では鋳造関連の遺物も出土しており、遺構や遺物のあり方から官営的な工房の可能性がある。また、仁多町亀ヶ谷遺跡



第５図　北原本郷遺跡とその周辺の遺跡（Ｓ＝1/30,000）

表１　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種　別	縄　文	弥　生	古　墳	古　代	中　世	江戸以降	備考	遺跡地図
1	北原本郷遺跡	集落	■	■	■	■	■	■	本報告書掲載	Q110
2	家の後Ⅱ遺跡	集落	■	■	■	■	■	■	発掘調査	Q111
3	宮ノ脇遺跡	散布地・集落？	■	■	■	■	■	■	発掘調査	Q71
4	下布施氏館跡	山城					■		発掘調査	Q37
5	家の後Ⅰ遺跡	散布地	■	■	■	■			発掘調査	Q52
6	宮サコ遺跡	散布地		■		■			発掘調査	Q70
7	川平Ⅰ遺跡	集落	■	■					発掘調査	Q56
8	垣ノ内遺跡	集落	■	■	■	■	■		発掘調査	Q53
9	家の上遺跡	祭祀遺跡・製鉄遺跡		■	■	■	■	■	発掘調査	Q75
10	上垣内たたら跡	製鉄遺跡					■		発掘調査	Q74
11	石壺遺跡	散布地							発掘調査	Q23
12	案久寺遺跡	城館跡					■		発掘調査	Q57
13	ゴマボリ鈩跡	製鉄遺跡							発掘調査	Q68
14	寺田Ⅰ遺跡	製鉄遺跡・古墓				■			発掘調査	Q78
15	寺田Ⅱ遺跡	製鉄遺跡							発掘調査	Q79
16	寺田Ⅲ遺跡	製鉄遺跡								Q80
17	トヤゲ丸城跡	城跡								Q72
18	下槻Ⅲ遺跡	集落								Q63
19	平田遺跡	製鉄遺跡ほか	■	■	■	■	■		発掘調査	Q22
20	下鴨倉遺跡	散布地	■	■	■				発掘調査	N5
21	光善寺古墳	古墳			■					N90
22	三沢城跡	城跡					■			N44
23	布広城跡	城跡					■			N60
24	松木山城跡	城跡								N21 Q115
25	どけや古墳	古墳			■					N20
26	比丘尼原横穴墓群	横穴墓			■					N62
27	穴観古墳群	古墳			■					N22
28	為石古墓	古墓					■			N115
29	菅田古墳群	古墳			■		■			N122
30	勝部宅前鈩跡	製鉄遺跡								Q113
31	難波宅前鈩跡	製鉄遺跡								Q114
32	戈の原遺跡	散布地								N100
33	槙ヶ垰遺跡	製鉄遺跡	■	■	■	■		■	発掘調査	Q77
34	尾白Ⅰ遺跡	散布地	■	■	■				発掘調査	Q54
35	尾白Ⅱ遺跡	炭窯跡						■	発掘調査	Q55
36	尾白横穴墓群	横穴墓			■					Q1
37	原田遺跡・原田古墳	集落・古墳	■	■	■	■	■		発掘調査	N135
38	前田遺跡	散布地	■						発掘調査	N145
39	西尾社遺跡	城跡						■	発掘調査	N131
40	水手山城跡	城跡					■			N42
41	殿ヶ迫横穴墓群	横穴墓			■				発掘調査	N134
42	円満寺遺跡	祭祀遺跡・寺院跡				■			発掘調査	N144
43	家ノ脇Ⅱ遺跡	散布地	■	■	■	■	■		発掘調査	N146
44	正覚古墳群	古墳			■					N107
45	佐白城跡	城跡					■			N43
46	玉雲寺古墳群	古墳			■					N125
47	六方遺跡	散布地				■	■			N130
48	妻の原鈩跡	製鉄遺跡								Q67
49	枯木ヶ谷鈩遺跡	製鉄遺跡					■		発掘調査	Q58
50	大歳鈩跡	製鉄遺跡					■	■		Q107
51	茶屋の廻遺跡	散布地			■	■			発掘調査	Q108
52	北原Ⅰ遺跡	散布地		■	■				発掘調査	Q59
53	下布施横穴墓群	横穴墓			■				発掘調査	Q69
54	家ノ前鈩跡	製鉄遺跡				■	■			Q109
55	下布施滝の上鈩跡	製鉄遺跡								Q45
56	谷口遺跡	製鉄遺跡						■		非掲載
57	佐白・大原山製鉄跡群	製鉄遺跡						■		N123
58	金子松鈩跡	製鉄遺跡								N69
59	伊賀武社境内横穴墓群	横穴墓			■				発掘調査	N140
60	佐白・原鈩跡	製鉄遺跡								N75
61	中山遺跡	散布地			■					N18
62	上布施横穴群	横穴墓			■					N19
63	上布施遺跡	散布地		■						N8
64	上布施一畑山古墳群	古墳			■					N110
65	亀ヶ谷遺跡	製鉄遺跡			■	■			発掘調査	N136
66	シベ石遺跡	社跡						■	発掘調査	N137
67	時仏遺跡	社跡						■	発掘調査	N138
68	時仏山横穴群	横穴墓			■				発掘調査	N139
69	林原遺跡	集落・古墳	■	■	■					N61
70	家ノ脇遺跡	散布地			■	■				N146
71	寺畑遺跡	散布地		■	■					N141
72	家の前遺跡	散布地			■	■				N147
73	寺宇根遺跡	散布地			■					N148
74	暮地遺跡	散布地	■	■					発掘調査	N56

（凡例）　● 集落・散布地　△ 古墳・横穴墓　▽古墓・経塚・社跡　▲ 城跡　□ 生産遺跡

(65) では平安時代後期の製鉄炉跡が検出された。雲南市木次町家の上遺跡（９）では配石遺構から土馬、手づくね土器が見つかった。仁多町円満寺遺跡 (42) でも湧水のある地点で大量の須恵器や土師器とともに土馬が出土した。これらは、水に関わる祭祀の跡ではないかと思われる。

中・近世　集落遺跡としては、家の後Ⅱ遺跡・宮ノ脇遺跡（３）で中世の掘立柱建物跡が確認された。また、前田遺跡 (38) では室町時代の礎石建物跡が検出された。城郭跡は、三沢氏の居城として三沢城 (22) がよく知られている。独立丘陵に近い形態の鴨倉山に位置する多郭式の山城である。下布施氏館跡（４）は発掘調査で堀切や郭、通路状遺構が確認された。上垣内たたら跡 (10)、枯木ヶ谷鈩遺跡 (49)、家ノ前鈩跡 (54) は中世前半の製鉄遺跡で、本床状遺構のみの製鉄炉地下構造が確認されている。近世になると、奥出雲地域では絲原家、卜蔵家、櫻井家など有力鉄師のもと、大規模な高殿たたらが営まれ、鉄生産量は飛躍的に増大する。尾白Ⅱ遺跡 (35) では近世以降の炭窯が調査されており、この中にはたたらで使用される大炭を生産した可能性のあるものも見られる。

【参考文献】

島根県教育委員会　『増補改訂島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隠岐編）』　2003

坂　本　諭　司　「寺田Ⅰ遺跡の調査と金属生産関連遺物」『山陰における鉄・鉄器生産の諸問題』（社）日本鉄鋼協会社会鉄鋼工学部会　2003　pp.42～52

島根県教育委員会　『尾白Ⅰ遺跡・尾白Ⅱ遺跡・家ノ脇遺跡３区・川平Ⅰ遺跡　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１』　2003

島根県教育委員会　『家の後Ⅰ遺跡・垣ノ内遺跡　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２』 2003

島根県教育委員会　『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報』11　2003

島根県教育委員会　『槙ヶ垰遺跡　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書３』　2004

島根県教育委員会　『家ノ脇Ⅱ遺跡・原田遺跡１区・前田遺跡４区　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書４』　2004

島根県教育委員会　『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報』12　2004

木次町教育委員会　『平田遺跡　木次町文化財調査報告書第４集』　1997

木次町教育委員会　『家の上遺跡・石壷遺跡　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書１』　1998

木次町教育委員会　『上垣内たたら跡・北原Ⅰ遺跡・茶屋の廻遺跡』　1999

木次町教育委員会　『平田遺跡　第Ⅲ調査区　斐伊川広域一般河川改修工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』　2000

木次町教育委員会　『枯木ヶ谷鈩遺跡　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書３』　2000

木次町教育委員会　『下布施横穴墓群・案久寺遺跡　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書４』 2002

木次町教育委員会　『家ノ前鈩跡・谷口遺跡・宮サコ遺跡　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書５』　2003

仁多町教育委員会　『下鴨倉遺跡緊急発掘調査報告書』　1981

仁多町教育委員会　『下鴨倉遺跡』　1990

仁多町教育委員会　『伊賀武社境内横穴墓』　2001

仁多町教育委員会　『殿ヶ迫横穴墓群・西尾社遺跡・亀ヶ谷遺跡・シベ石遺跡・時仏遺跡・時仏山横穴墓』 2001

仁多町教育委員会　『暮地遺跡　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』　2004

木　　次　　町　『新修木次町誌』　2004

第３章　１～3区の調査

第１節　調査の概要

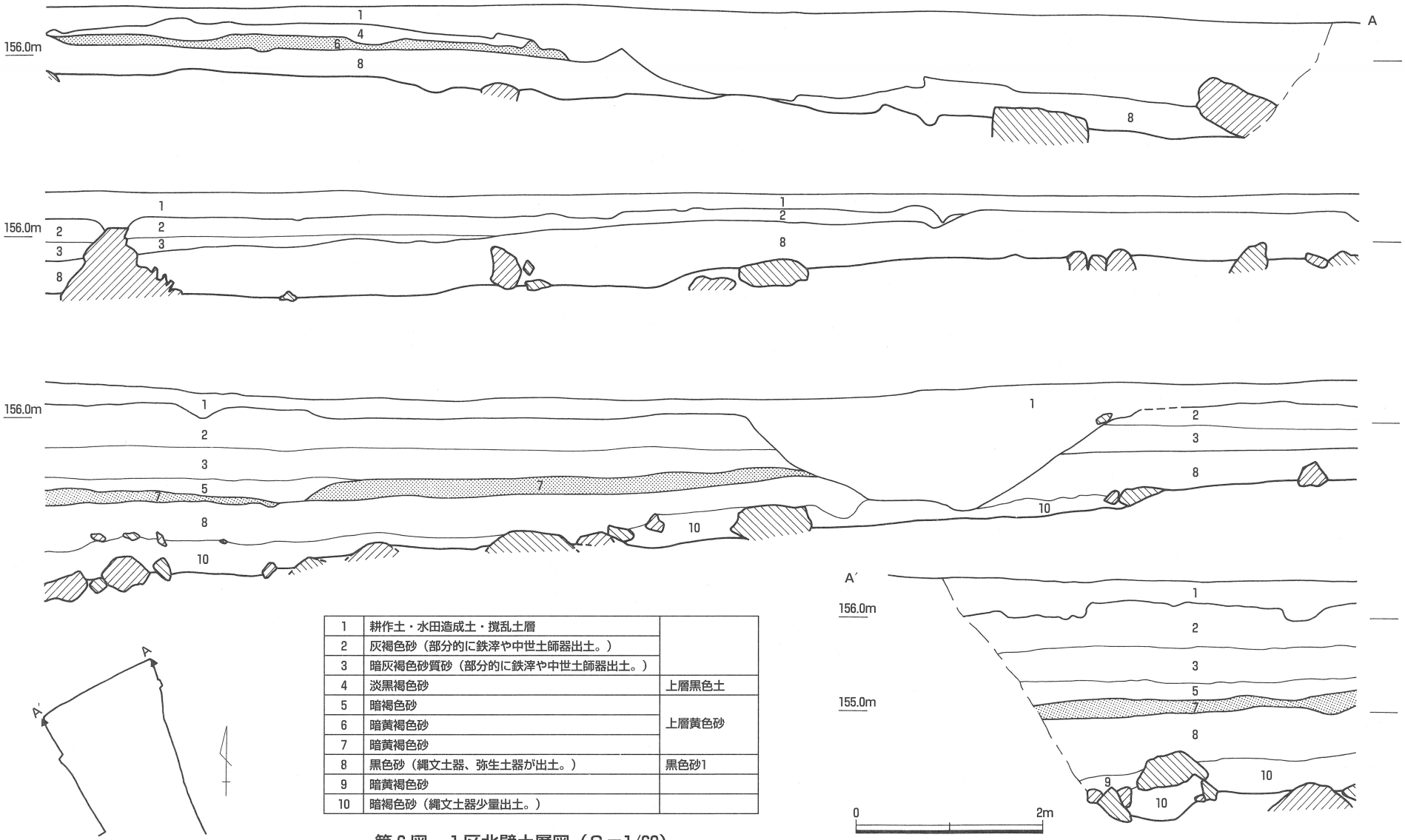
１～３区は北原本郷遺跡の中でも南側に位置する調査区である。１区は、平成14年５月20日から人力による遺物包含層の掘削を開始した。縄文時代晩期から古墳時代初頭を中心とする遺物包含層（黒色砂１）を掘削し、黄色砂１上面を精査したところ弥生時代～古墳時代初頭の竪穴住居跡や、掘立柱建物跡、溝、縄文時代晩期から弥生時代の土坑などを検出した。この遺構面で遺構の記録や地形測量をして、11月15日に空中写真撮影を行なった。さらに、部分的にトレンチを入れに深く掘り下げたところ下層の遺物包含層（黒色砂２・３）が確認されたため、１区南側については下層を発掘し、遺構面ごとに遺構の記録や地形測量を行ない、12月20日に現地調査を終えた。平成14年度の発掘調査面積は約3,900㎡である。

平成15年度は、１区の南に隣接する２区、西に隣接する３区、それに１区の下層の続き部分の調査を行なった。平成15年４月14日から２区の発掘調査を開始した。複数の遺物包含層や遺構面が認められたため、各面において遺構の記録や地形測量を行ない、１区南側と合わせて黄色砂４上面まで調査した。７月８日に２区の完掘状態の写真をラジコンヘリコプターにより空中撮影した。３区の発掘調査は６月26日から開始した。黄色砂１上面では前年度に１区で半分だけ検出された竪穴住居跡の続き部分と小型の竪穴建物跡１棟などを確認した。黄色砂１上面の遺構実測・地形測量ののち、10月21日空中写真撮影を行なった。その後、１区下層の未調査部分とあわせて黒色砂２、黒色砂３を発掘し、黄色砂２上面では縄文時代後期中葉の平地式建物跡や土坑など、黄色砂３上面では土器埋設遺構１基や縄文時代後期前葉の土器を多く伴う旧河道を確認した。12月８日に空中写真撮影を行ない、12月11日に全ての現地調査を終了した。平成15年度の１～３区の調査面積は約4,200㎡である。

第２節　調査区の層序（第６～９図）

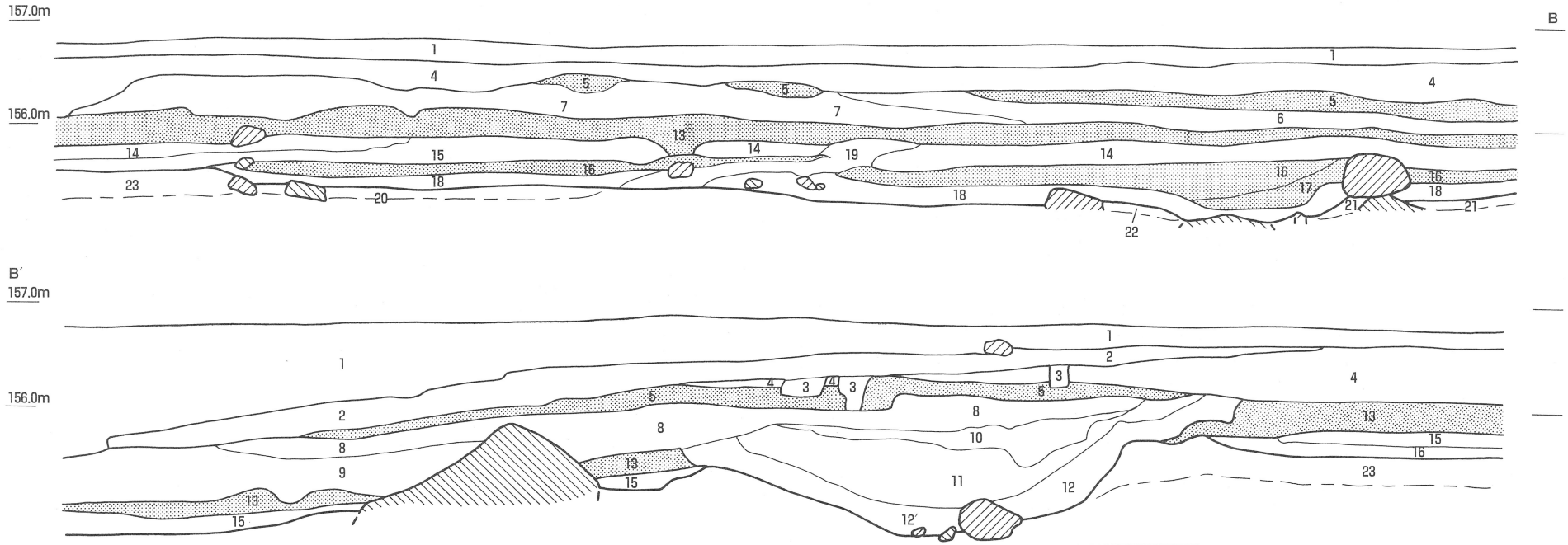
１～３区の基本層序は大きくみて上から順に、水田耕作土・造成土－灰褐色～暗灰褐色砂質土－上層黒色土－上層黄色砂（土）－黒色砂(土)１－黄色砂１－黒色砂２－黄色砂２－黒色砂３－黄色砂３－黒色砂４－黄色砂４・礫層に分けられる。ただし、これらの土層は調査区の全面に確認できるものではなく、例えば途中で黄色砂がなくなり、その上下の黒色砂が接して区別ができなくなる場合もある。

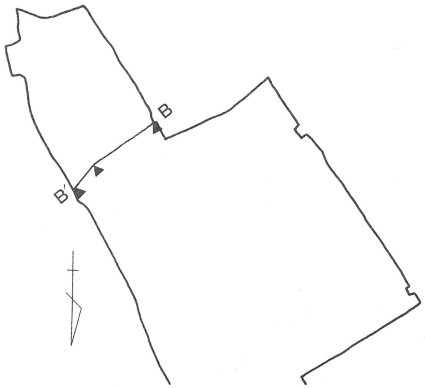
灰褐色砂質土からは陶磁器片や鉄滓などが出土しており、中世以降の遺物包含層か、もしくは古い段階の水田造成土の可能性がある。上層黒色土は土師器・須恵器片や中世土器片、鉄滓などが出土しており、中世の遺物包含層と考えられる。上層黄色砂及び黄色砂１～４は斐伊川の氾濫に伴う砂層で、その間にはさまれた黒色砂１～４が遺物包含層である。黒色砂１では主に縄文時代晩期～古墳時代初頭の遺物が出土する。黒色砂２は縄文時代後期中葉～後葉の土器を若干含む。なお、下層の黄色砂２には三瓶太平山降下火山灰が部分的に入り込んでいる。黒色砂３では旧河道を中心に縄文時代後期前葉の遺物がまとまって出土した。黒色砂４からは縄文土器片がわずかに出土しているが、その時期は判然としない。



1	耕作土・水田造成土・撹乱土層	
2	灰褐色砂（部分的に鉄滓や中世土師器出土。）	
3	暗灰褐色砂質砂（部分的に鉄滓や中世土師器出土。）	
4	淡黒褐色砂	上層黒色土
5	暗褐色砂	上層黄色砂
6	暗黄褐色砂	
7	暗黄褐色砂	
8	黒色砂（縄文土器、弥生土器が出土。）	黒色砂1
9	暗黄褐色砂	
10	暗褐色砂（縄文土器少量出土。）	

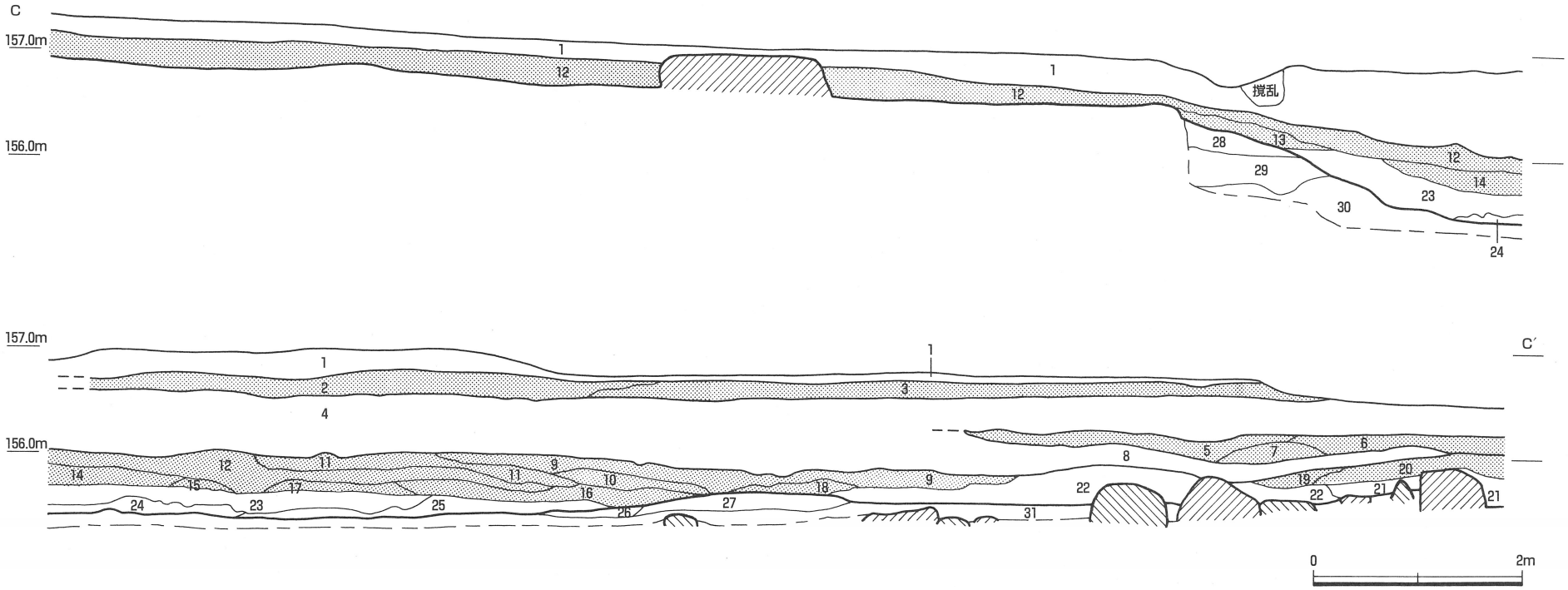
第６図　１区北壁土層図（Ｓ＝1/60）

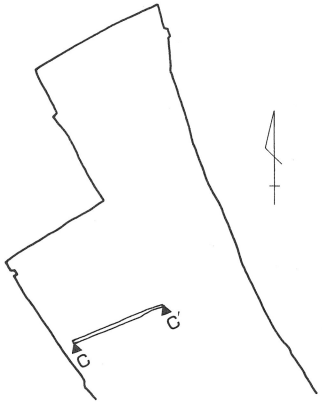




1	灰褐色粘質土（耕作土・水田造成土）	
2	暗灰褐色粘質土（やや砂混じり。須恵器・土師器・中世土器片など含む。水田造成土の可能性あり）	
3	暗灰色粘質土（φ0.5mm以下の砂礫を含む。黒色土がブロック状に入る。撹乱土か。）	
4	黒褐色砂（縄文時代晩期～弥生時代の土器を主体に含む。）	黒色砂1
5	にぶい黄褐色～暗黄褐色砂	黄色砂1
6	黒褐色砂（4より少し色が薄い。）	黒色砂2
7	暗褐色砂（やや黄色おびる。部分的に黒色の強い所もある。）	
8	黒褐色砂	
9	暗褐色砂（上半部がややまだらに黄色おびる。）	
10	暗灰褐色砂（縄文土器片含む。）	SX01覆土
11	黄褐色砂	
12	黒灰色砂（粘性少しあり。黒色有機質を含む。）	
12′	黒灰色砂礫層（φ0.5cm～25cm大の礫を多く含む。）	
13	淡黄色～にぶい黄褐色～暗黄褐色砂（東へ行くにつれて暗い色になる。）	黄色砂2
14	淡黒褐色砂（縄文土器片含む。）	黒色砂3
15	淡暗褐色砂（縄文土器片含む。）	
16	淡黄褐色～にぶい黄褐色砂（東へ行くにつれて暗い色になる。）	黄色砂3
17	赤褐色砂	
18	淡黒褐色砂～暗灰色粘砂質土（縄文土器片含む。）	黒色砂4
19	黒褐色（土中の鉄分やマンガンが固着した層）	
20	黄褐色砂	黄色砂4
21	灰黄褐色砂質土（やや粘性あり。）	
22	赤褐色砂礫層	
23	砂礫層（φ30cm以下の礫を多く含む。）	

第７図　１区南壁土層図（Ｓ＝1/60）

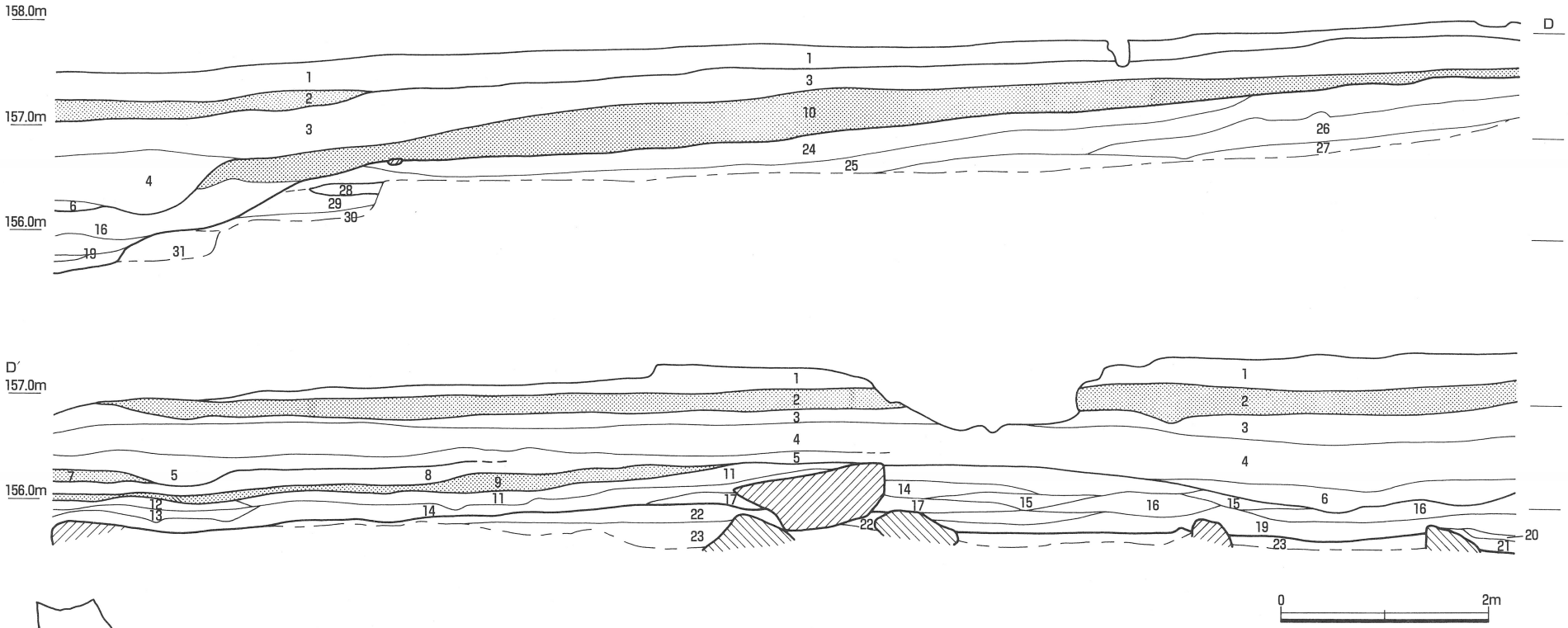


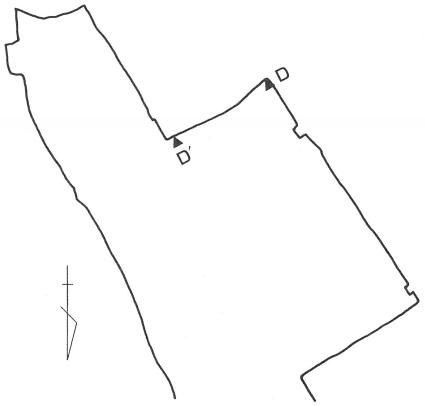


1	黒色粘砂質土（中世土器・鉄滓などを含む。2よりも粘性強い。）	上層黒色土
2	暗灰褐色砂質土（西へ行くにつれ黒っぽくなる。粘性やや強。）	上層黄色土
3	暗黄褐色砂（2よりも黄色みが強く、粒度が大きい。粘性あまりなし。）	
4	黒色粘砂質土（粘性やや強。東へ行くほど砂っぽくなる）	黒色土1
5	濁暗黄褐色砂（まだらに黄色みの強い部分が入る。）	黄色砂1
6	暗黄褐色砂（5よりも黄色っぽい。）	
7	黄褐色砂	
8	黒色砂（4よりも粒度大きい。粘性弱いが少し土っぽい。）	黒色砂2
9	淡暗褐色砂（φ5mm大の小礫まばらに入る。）	黄色砂2
10	淡暗黄褐色砂（鉄分が沈殿し固く締る。）	
11	淡暗灰黄褐色砂	
12	淡暗褐色砂（11よりも黒っぽいが、1・4・8と比べるとかなり薄い色調。）	
13	暗黄褐色砂（鉄分が沈殿し固く締る。）	
14	淡暗黄褐色砂（12と比べ薄い色調。）	
15	淡暗黄褐色粘砂（14と比べ粗い砂。φ1cm以下の小礫含む。）	
16	にぶい黄褐色砂	
17	淡暗黄褐色粗砂（15とほぼ同じ。）	
18	にぶい黄褐色砂	
19	暗黄褐色砂（φ5mm以下の礫含む。）	
20	にぶい黄褐色砂（φ5mm以下の礫含む。）	

21	暗褐色砂	黒色砂3
22	黒褐色砂（鉄分が沈殿し固く締る。黒み強い。）	
23	黒色砂（縄文土器多く含む。）	
24	黒灰色砂（縄文土器多く含む。）	
25	暗黄褐色粗砂	
26	黄褐色粗砂	
27	褐色砂（ややにぶい色で薄く黄色おびる。若干鉄分沈殿。）	
28	にぶい黄褐色砂（鉄分が沈殿し固く締る。）	
29	暗灰色砂	
30	明黄褐色砂（やや粗い砂。）	
31	暗灰褐色砂（部分的に青灰色おびる。）	

第８図　３区中央ベルト土層図（Ｓ＝1/60）





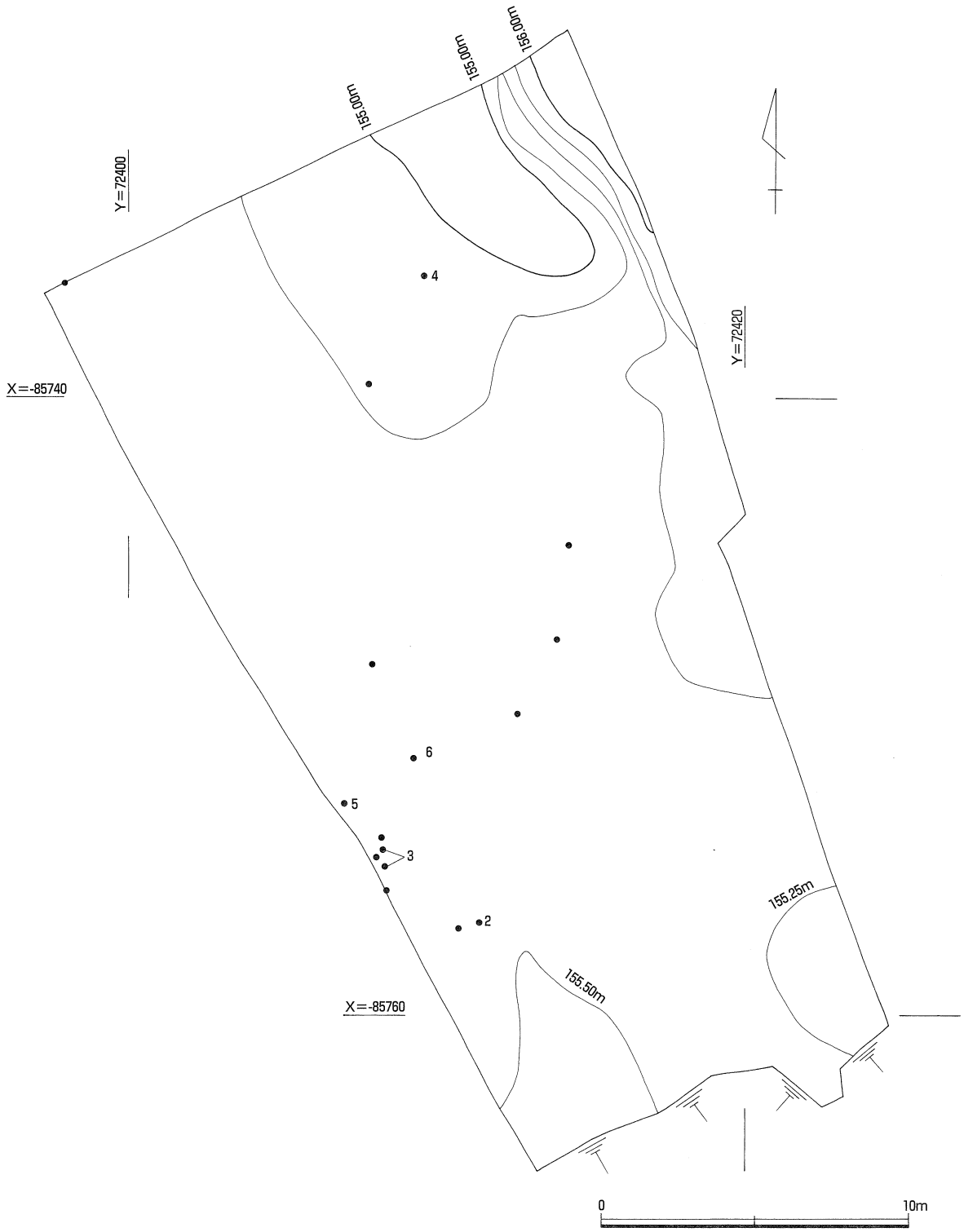
1	黒褐色土（やや砂含み粘性あり。）	上層黒色土
2	淡暗黄褐色砂質土（やや粘性あり。）	上層黄色土
3	黒色粘砂質土（粘性強く、シルト質。）	黒色土1
4	淡黒色粘質土（粘性極めて強く、やや灰色おびる。）	
5	淡黒褐色粘砂質土（4ほどではないが粘性強く、シルト質。小礫は含まない。）	
6	黒灰色粘質土（粘性強い。5よりやや薄い色調。やや砂まじり。）	
7	にぶい黄褐色砂	黄色砂1
8	黒褐色砂質土（φ5mm以下の小礫若干含む。）	黒色砂2
9	淡暗黄褐色砂（φ3cm以下の火山灰ブロックが少し入る。）	黄色砂2
10	暗灰色砂（φ5mm以下の小礫まばらに含む。火山灰のようなものもわずかに含む。）	黄色砂2に対応?
11	淡黒褐色砂（小礫は含まない。）	黒色砂3
12	淡黒褐色砂（φ5mm以下の小礫多く含む。）	
13	にぶい黄褐色砂（φ5mm以下の小礫を密に含む粗砂。）	
14	暗褐色砂（11・12よりも薄い色調。）	
14′	暗褐色砂（ややまだらに黄色おびる。）	
15	暗灰色砂（比較的細かい砂。やや青灰色おびる。）	
16	暗灰茶褐色粗砂（青灰色をおびた部分がまだらに入る。φ5mm以下の小礫を比較的多く含む。）	

17	黄褐色砂（まだらに暗褐色おびる。）	黒色砂3
18	暗黄褐色粗砂（やや茶色っぽいが16よりも黄色みが強い。φ5mm以下の小礫を比較的多く含む。）	
19	淡黒灰色砂（やや青灰色おびる。やや土気おび、若干粘りがある。）	
20	灰茶褐色粗砂（16よりも粗い砂でφ5mm以下の小礫多く入る。やや青灰色おびる。）	
21	黒灰色砂（19よりも濃い色調。土気おび、14より粘性強い。）	
22	淡黄色砂	黄色砂3
23	やや黄色みおびた青灰褐色砂（やや締まり強い。）	
24	黄褐色～暗黄褐色砂（φ5mm以下の小礫まばらに含む。20cm以下の礫少し入る粗砂。）	
25	黒灰色砂	
26	黄灰色粗砂（やや暗い色調。）	
27	暗灰色砂（25よりやや暗い色調。）	
28	にぶい灰黄褐色シルト（三瓶山の第2ハイカに相当する火山灰が約5cmの厚さで塊状に入る。）	
29	暗褐色砂	
30	淡黄褐色砂	
31	やや黄色みおびた青灰褐色砂	

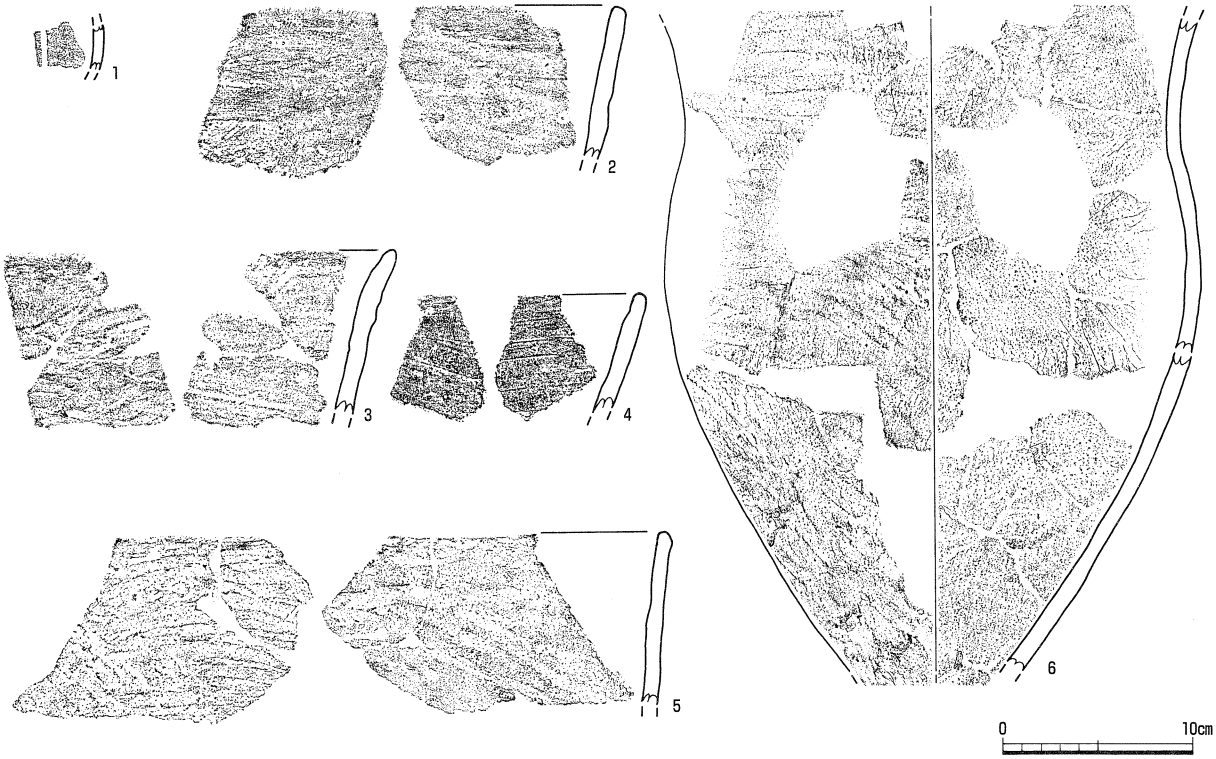
第９図　３区南壁土層図（Ｓ＝1/60）

第３節　黒色砂４～黄色砂４上面の調査（第10・11図）

２区の調査時に土層の確認のため１区南壁に沿ってサブトレンチを設けたところ黒色砂３よりもさらに下層に縄文土器片を含む黒色砂が認められた。そのため、遺物分布の広がりや遺構の有無を確認するため１区の南側から２区の北側にかけて530m²分を調査した。黒色砂４は上面の標高が約155.6mで、層の厚さは10～20cmである。この層の広がりは１区南壁で見る限り、２区西壁から東



第10図　１・２区　黄色砂４上面地形図（S＝1/200）



第11図　１・２区　黒色砂４出土遺物（S＝1/4）

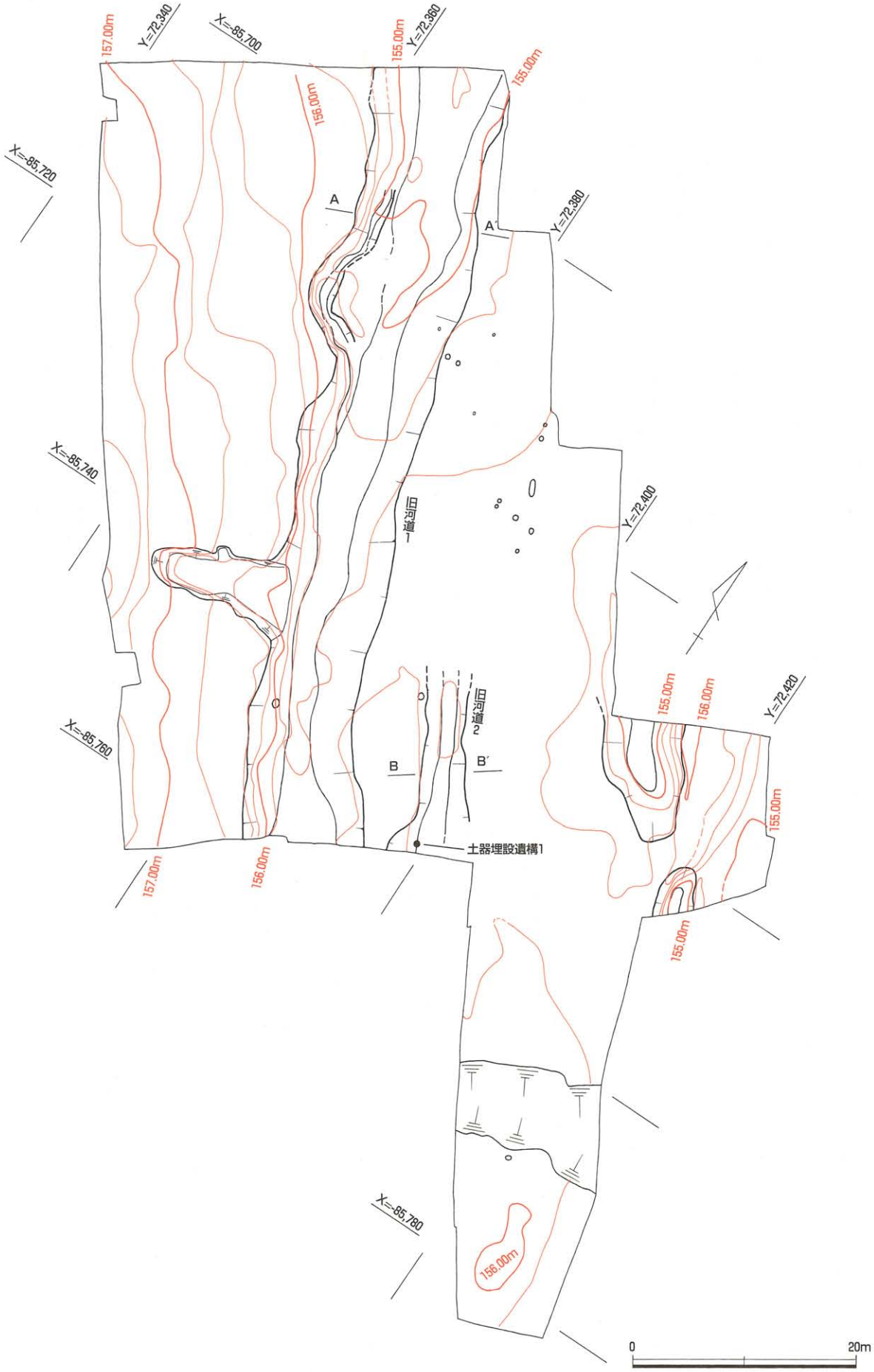
へ約12.6mまでの範囲で認められた。黒色砂４から黄色砂４上面にかけては、遺構は検出されず、遺物も縄文土器片がわずかに出土したのみであった。１は縦方向に２本の沈線が施されたものである。布勢式の土器のようにも思われるが、そうだとすると、本来黒色砂３で出土したものが層位を誤認して取り上げられたのであろう。2～６は粗製深鉢である。６は胴部がくびれる器形で、胴部下半は外面に右下がりの粗いナデが入るのに対し、くびれる部分から上は横方向に粗いナデが入る。

第４節　黒色砂３～黄色砂３上面の調査

１区の南側及び２区西側、３区東側では黒色砂３が認められた。黄色砂３上面まで掘削したところ、土器埋設遺構１が検出された。遺物は、旧河道１・２を中心に縄文時代後期前葉の土器がまとまって出土した。

１　土器埋設遺構（第13図）

３区の南東端で、旧河道２の西側の下端付近に位置する。直径32cm、深さ11cmの土坑内に浅鉢が正位で埋設されていた。埋設土器として用いられた浅鉢は完形のもので、口径30.1cm、器高12.0cm、底径9.6cmで、底部から口縁部が直線的に開く器形である。土器と掘り方との間には暗灰色のやや粘性の強い砂質土が入っており、土器を据え付ける際に置き土がされたものと思われる。土器の内部には、下部に有機質分を含む淡黒褐色砂が入り、上部に黄褐色粗砂が凸レンズ状に堆積していた。このことから、土器が埋設された後も土器内部は土で埋められたりはせず、自然に土砂が堆積した可能性が高いと思われる。埋設土器内及び土器埋設遺構周辺の遺構外の土壌については、理化学的



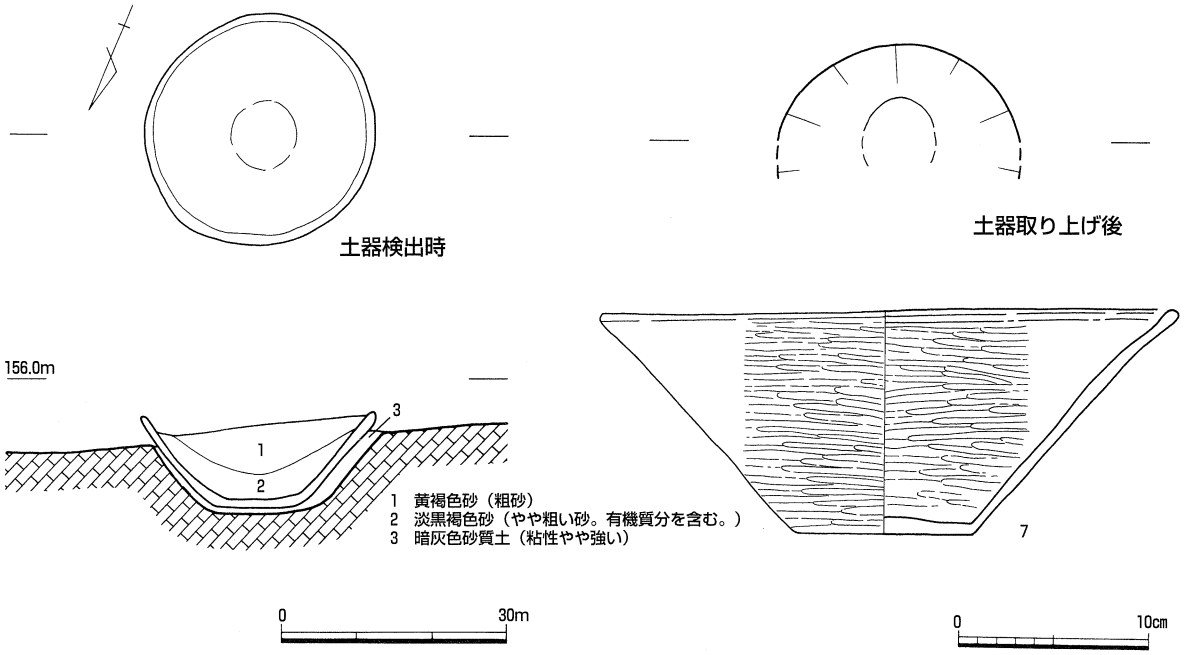
第12図　1～3区　黄色砂3上面遺構配置図（S＝1/500）

な分析を島根大学生物資源学部教授若月利之氏に依頼した。分析の結果、遺構内外ともリン濃度は低く両者に大きな差はなく、埋葬を目的としたものではないと考えられる、ということであった（第６章参照）。

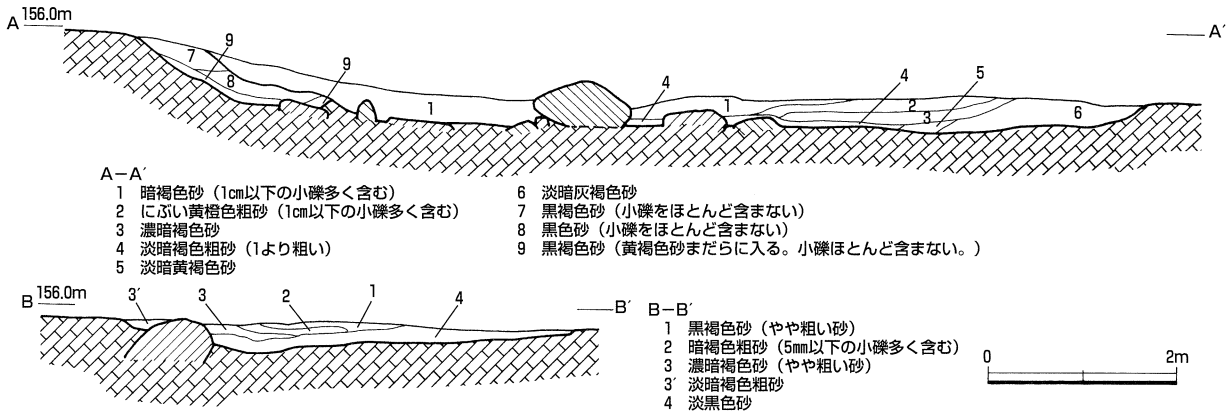
２　旧河道１・２（第12・14・15図）

旧河道１は３区を縦断するかたちで南北にのびていた。幅は上端の部分でおよそ９～11mである。H37からＩ37グリッドにかけては中心となる太い流路とは別に、幅約３ｍの細長い流路が西に張り出すようなかたちで走っている。第14図Ａ－Ａ′ラインの土層図では、太い流路が細い流路を切っている様子が観察できることから、旧河道１は１本の流路ではないが、平面的に新旧の切り合いを把握し、それぞれを別の流路として認識することはできなかった。そのため、ここではこれらを旧河道１としてまとめて報告する。

旧河道１の覆土には有機質分を含んだ黒色砂が堆積しており、その中から多数の土器が出土して



第13図　土器埋設遺構１（Ｓ＝1/10）、埋設土器（Ｓ＝1/4）



第14図　旧河道１・２土層図（Ｓ＝1/80）

いる。このことから、この河道中に常時水流があったわけではなく、降雨時などに低い部分に集まった水が流れていたものと推測される。旧河道１の遺物の分布は地点によって粗密が認められる。Ｅ39グリッドや、河道の西岸部でＧ38、Ｈ37グリッドの河道が蛇行している部分で遺物が集中している。また、Ｆ38・39グリッドでは前述の部分と比べて遺物の出土量が若干少なめであるが、上部から掘り込まれた攪乱が旧河道まで達していたことによるものと思われる。これに対し、さらに河道を下ったＩ37・38、Ｊ37・38グリッドでは上部からの攪乱の影響は考えられないにもかかわらず、遺物の量はかなり少ない。

土器片の接合関係についてみてみると、104、109、110、130、156のようにかなり離れた地点から出土した破片同士が接合することもあった。これらの土器片はあまり摩滅しておらず、土器が出土する土層は有機質分を含む黒色砂であり、土器が流されるほどの水流はなかったと考えるならば、同一個体の土器の破片が異なる地点に廃棄された可能性が想定される。ただし、旧河道の蛇行する部分で土器片が集中していることから、水流によって流された土器片が流れの弱い部分にたまったという見方もでき、本来は１か所に廃棄されたものが別々の地点に流れ着いたという可能性も否定しきれない。

旧河道２は３区南東側で、南壁から北へ向けてのびている。３区南壁付近では河道の落ち込みが不明瞭であるが、第14図Ｂ－Ｂ´ラインでは幅4.0m、深さ0.36mで明らかにくぼんだかたちになっている。さらに、そこから北側に向かうと次第に落ち込みが不明瞭になり、南壁から15mの部分で途切れるようなかたちになる。覆土として黒色から暗褐色の砂が堆積しており、この中位のレベルで縄文土器片がまとまって出土した。

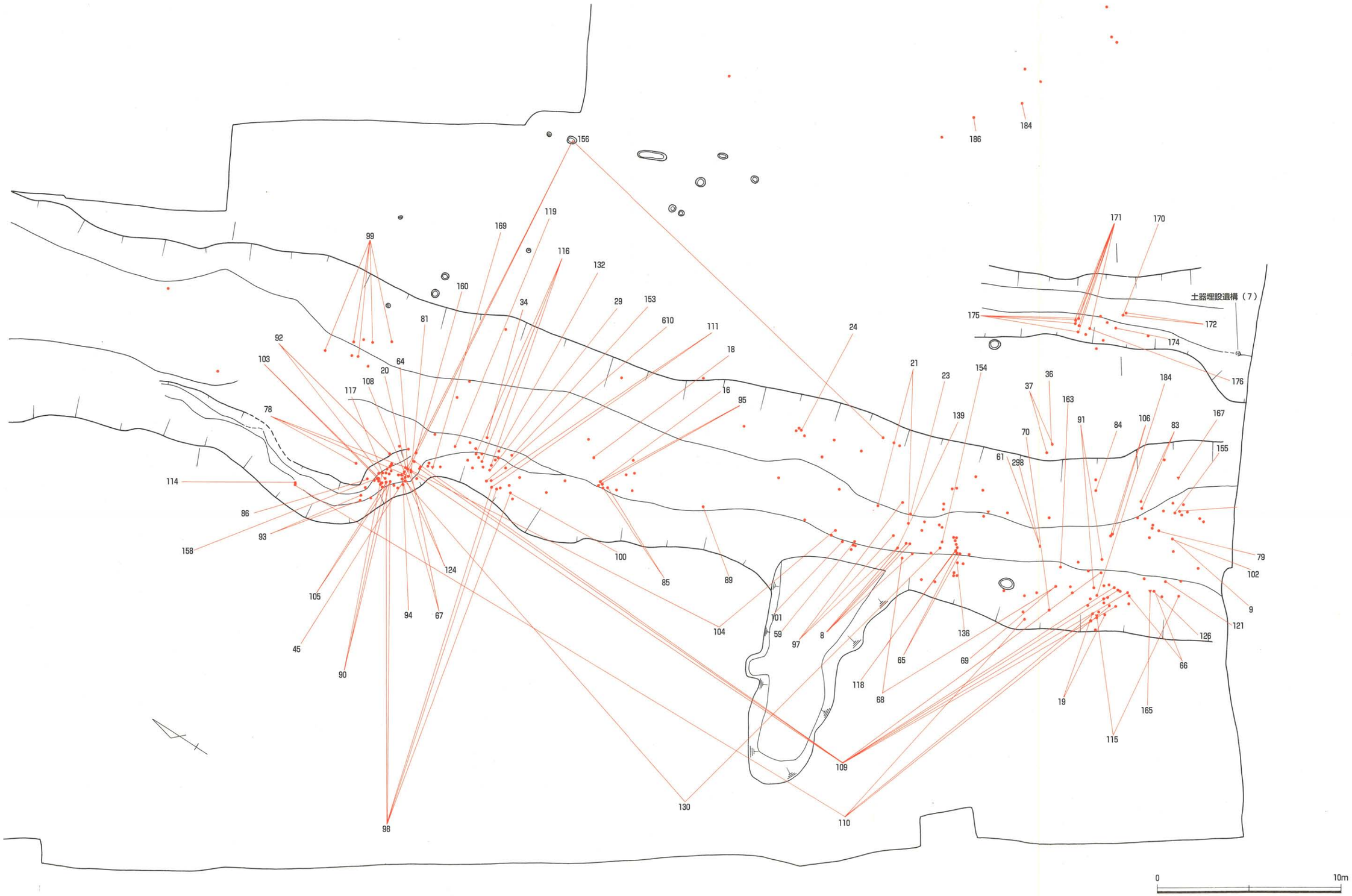
旧河道１・２では前述のように多量の土器がまとまって出土しているが、土器捨て場として利用されたと考えられる。これらの土器が本来どこで使用されていたのか、どこが当時の人々の活動域があったのか課題が残る。

3　出土遺物（第16～26図）

第16～24図は旧河道１から出土した遺物である。

８～18は島式の有文精製浅鉢である。８～11、14～18には口縁部や体部に横方向に展開する磨消縄文が施されており、12・13は沈線のみで施文されている。８～11、13～18の文様帯には赤色顔料が塗布されている。８・16～18は体部下半から体部上半が屈折して立ち上がる器形である。８は底部から口縁部まで復元できたもので、体部上半から口縁部にかけて磨消縄文で施文され、体部上半には大きな渦巻文が横方向に展開している。口縁部は端部が屈曲し逆「く」の字形になっている。また、渦巻き状の把手が対角線上の２か所につき、把手の下には円孔が穿たれている。内面全体と外面の体部上半から口縁部にかけての色調は黒色であるのに対し、屈曲部を境に体部下半は黄色に近い色合いとなっている。18は口縁部を欠くが、体部上半に大きな渦巻き文が展開し、器形も８と類似している。16・17は体部が屈曲する部分に文様帯をもつ。９・11は体部に上下２段に横方向の磨消縄文が施されている。口縁部は端面に１条の沈線が入り、縄文の施された円形の突起が伴う。10は渦巻状の磨消縄文が施されたもので、9と同一個体の可能性が高い。14・15は口縁部が内湾する器形で、口縁部に横方向に磨消縄文が展開する。

19～23は島式の有文精製深鉢である。19は胴部が丸みをもち、屈曲して口縁部が立ち上がる器形である。体部上半から口縁部にかけて沈線で施文されており、大きな渦巻文が展開している。口縁



第15図　1～3区黒色砂3遺物分布状況（S＝1/200）

端部はやや肥厚し、沈線が施される。口縁部には円形の窪みや沈線が施された円錐形の突起がつく。20～23は沈線間に磨消縄文が施されている。20は口縁部に（　）形の突起をもち、突起の下には渦巻文が展開する。21～23は同一個体と考えられる。23は口縁部にＣ字形の突起をもつ。

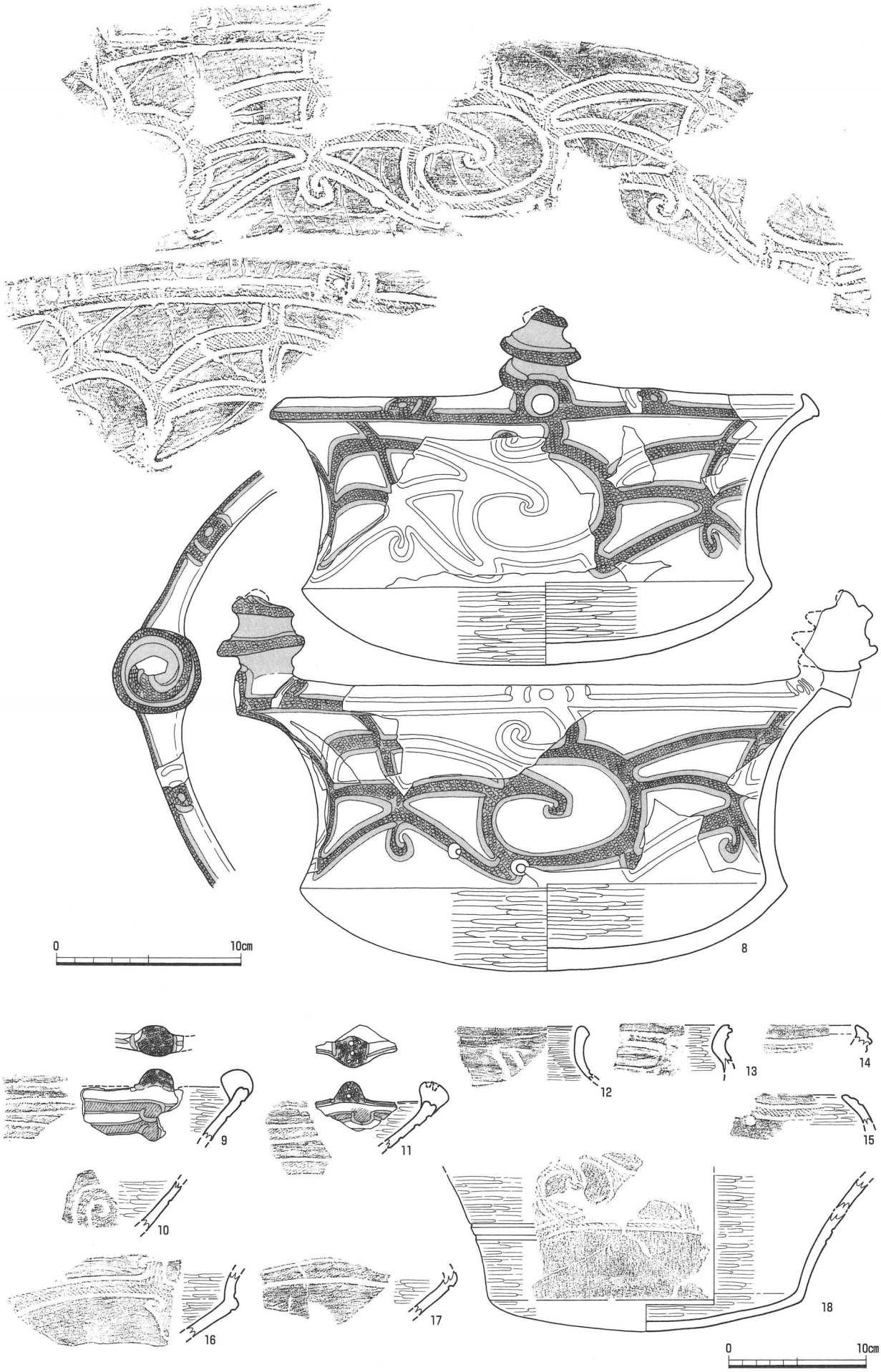
24～26、28～33は布勢式の深鉢である。口縁部の肥厚した面に、沈線と縄文で施文されたもの（24～26）、沈線のみで施文されたもの（28・29・32・33）、沈線と刻目で施文されたもの（30・31）がある。29の口縁部には半円形の突起が内側と外側へ向かって張り出している。33は口縁部の突起に円形の窪みをもち、その周りに２条の沈線が弧状に巡る。26は頸部に縦方向に細密条痕が施されており、胴部には縦長の刺突、もしくは縦方向の沈線が施されているのが観察できる。27は胴部の破片で、横方向の条痕ののち、縦長の刺突が列状に入れられている。26との接点はないが、胎土や色調が類似しており、同一個体の可能性がある。34は布勢式の深鉢胴部で、退化して孔のなくなった橋状把手をもつ。

36・37は刻目をもつ突帯が貼り付けられた深鉢の破片で、同一個体と考えられる。37は粘土紐による三角形の環状の把手がつけられている。38は小形の深鉢で、口縁端部に刻目が施され、体部には沈線で多重の多角形が描かれている。

39～49は深鉢の胴部破片である。39・40は縦方向に多条の沈線が施されており、布勢式のものと思われる。41は縦方向の磨消縄文が見られる。42～47は沈線のみで施文され、48は無節の縄文が施されている。49は底部の一部も残っているが、縦方向に施された沈線間のうち幅の広い部分に縄文が施されている。

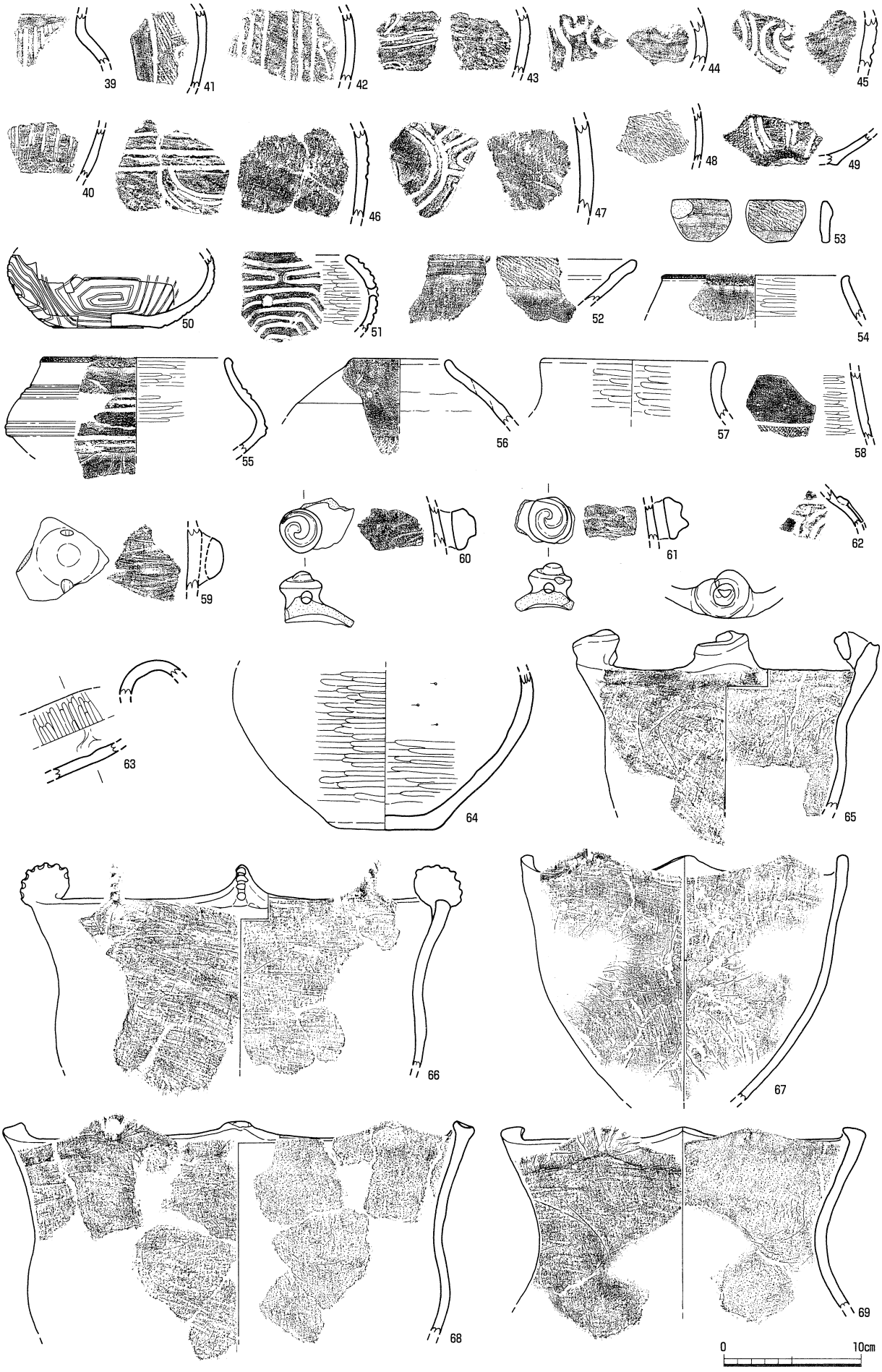
50・51は体部から口縁部にかけて大きく内湾する浅鉢で、多重の多角形を連ねた文様、もしくは角をもった変形渦巻文をもつもので、松ノ木式のものである。52・53は、口縁部内面側が肥厚して縄文が施された浅鉢で、同一個体と思われる。53は土器片の周囲が口縁端部を残して打ち欠かれ、半円形の土製品に転用されている。54～58・62は壺の口縁部から胴部の破片である。59～61は双耳壺の把手の破片である。59は半球形の把手をもち、60・61は把手の頭部に渦巻状の文様が入るもので、同一個体とみられる。63は注口土器の注口である。

64～118は無文の深鉢である。64は外面が丁寧に磨かれた精製深鉢である。65は口縁部に渦巻状の、66は鶏冠状の突起をもつ。67～69は波状口縁のものである。70～76は口縁端部に刻目が施されている。76は山形の突起をもつもので、突起の下には円孔が穿たれている。77～82・90～97は砲弾形の器形をした深鉢である。77は小形のもので、外面はミガキ調整されている。78は底部から口縁部まで復元できたもので、底面は削られて凹底状になっている。83・84・98は胴部中位から口縁部にかけて内湾気味になるものであるが、83は口縁部付近で内湾しているのに対し、84は胴部中位で屈曲するようにかたちになり、98は胴部中位で最大径をもち、そこから口縁部に向かい緩やかに内湾している。85～89・99～112は胴部がくびれた器形のものであるが、くびれた部分から長く緩やかに外反するもの（85・86・88・89・104・106～112）、短く外反するもの（87・105）、口縁部がやや内湾するもの（99・100）、くびれた部分から直線的に内径するもの（101）、くびれた部分から口縁部がほぼ真上に立ち上がるもの（102・103）など多様な形態が見られる。深鉢の調整はナデや、ケズリのほか、生乾きの状態で強くなでられ、凹凸が顕著に見られる粗いナデのものが一定量見られる。千葉豊氏の指摘では、このような粗いナデ調整は島根県の山間部で見られるもので、この地域の特徴といえるようである。このほかに条痕調整のものも少量だが出土している。

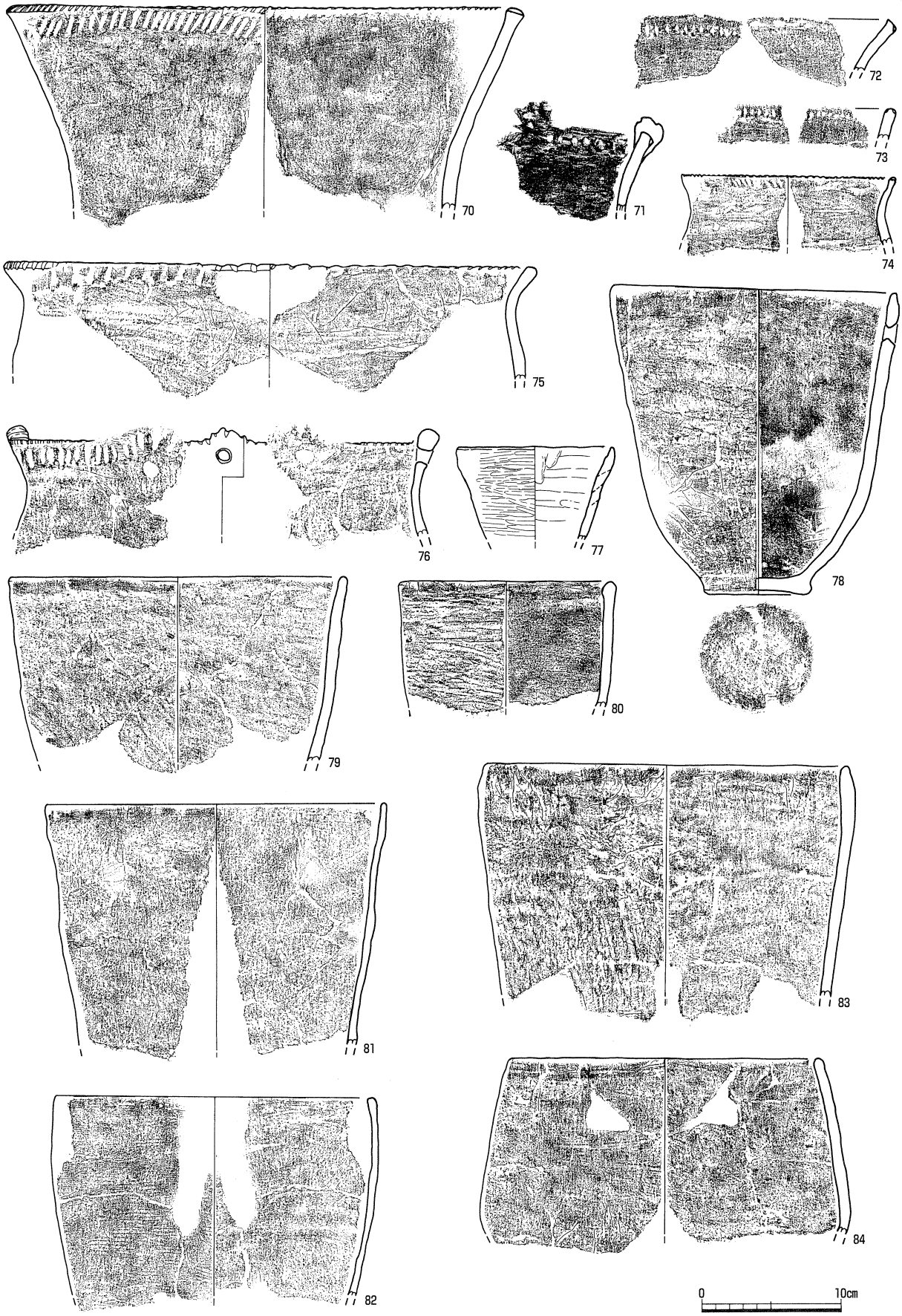


第16図　旧河道１出土縄文土器（１）（８：Ｓ＝1/3、９～18：Ｓ＝1/4）

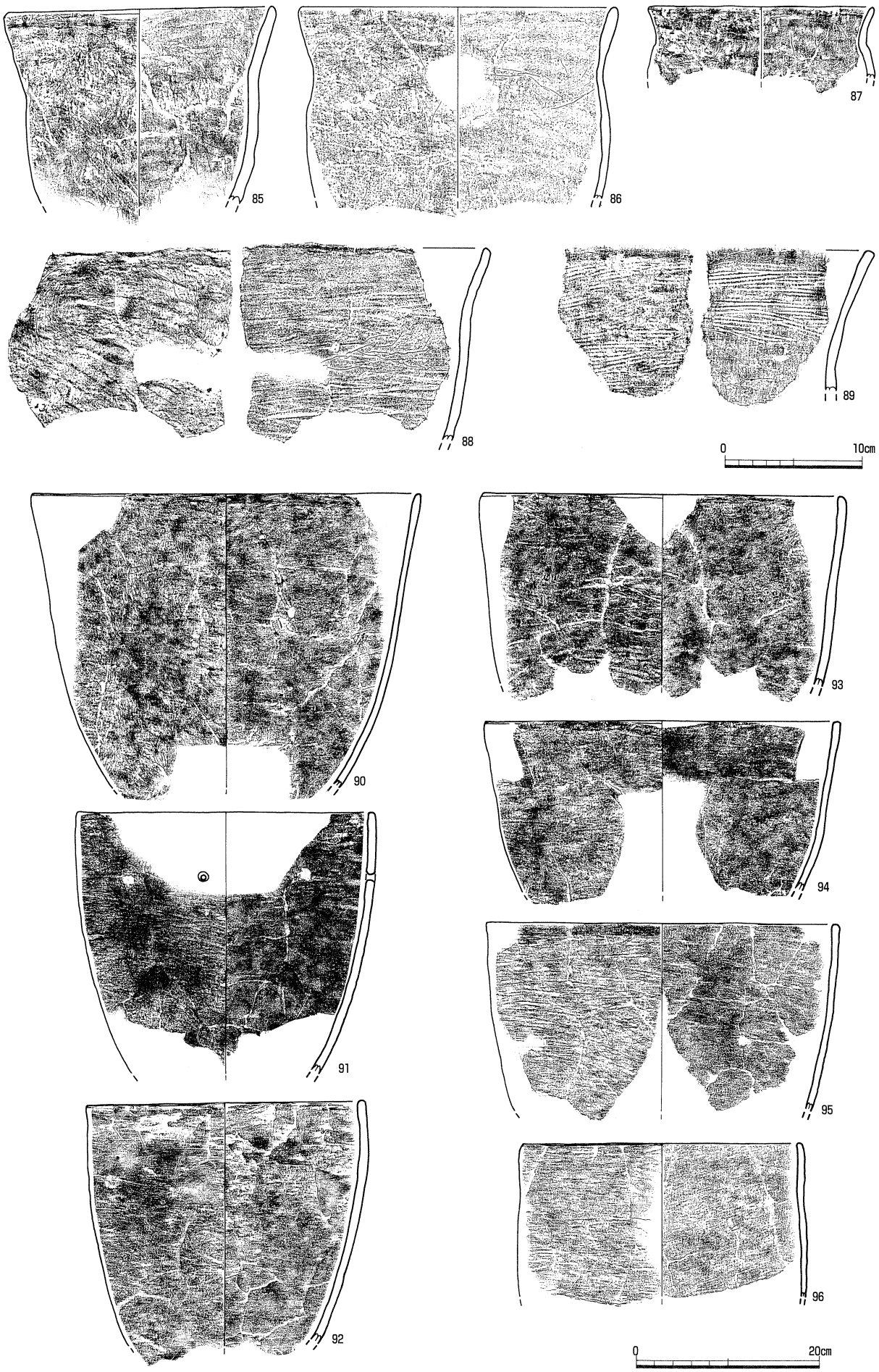
第17図　旧河道１出土縄文土器（２）（S＝1/4）



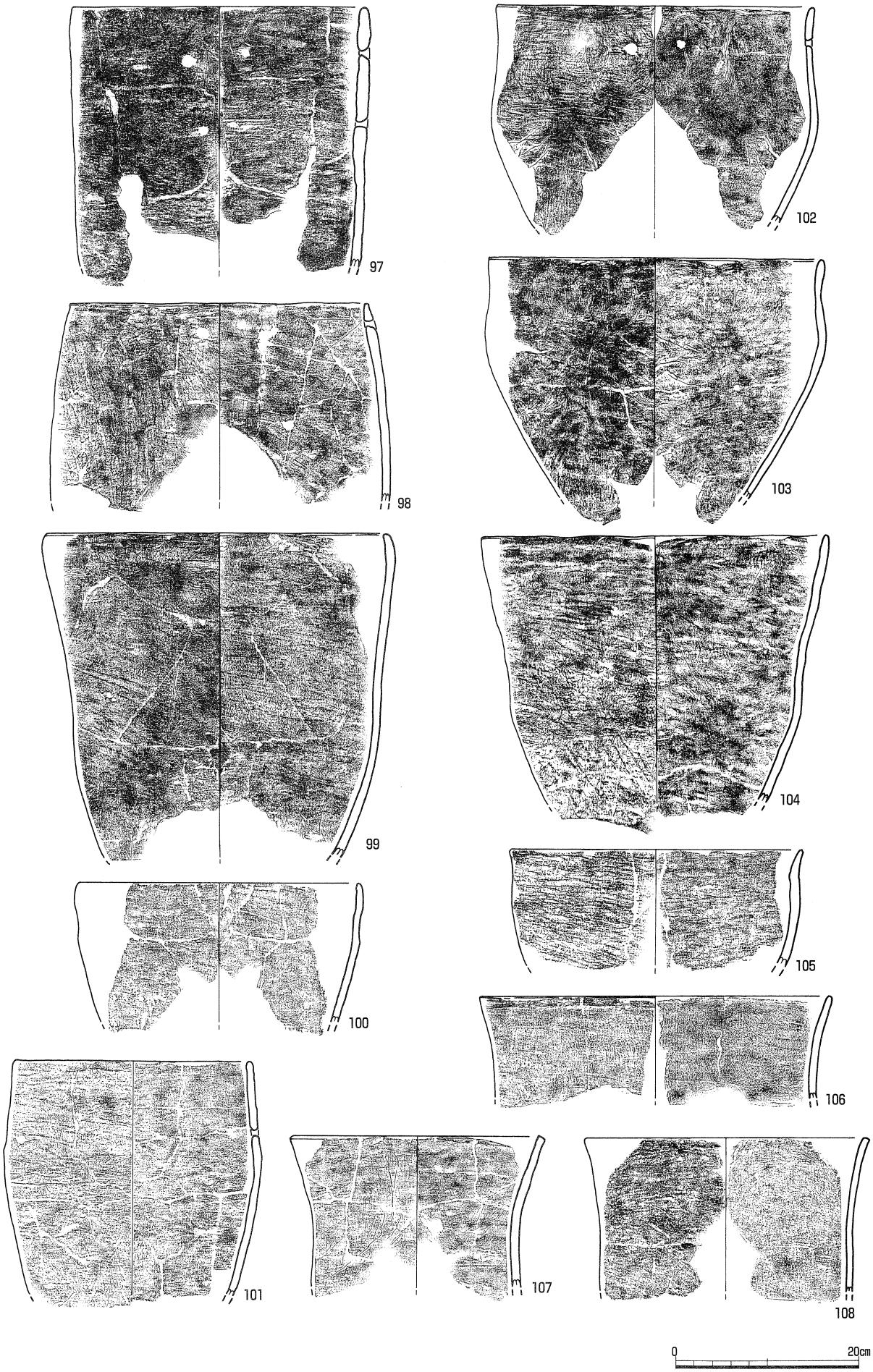
第18図　旧河道１出土縄文土器（３）（S＝1/4）



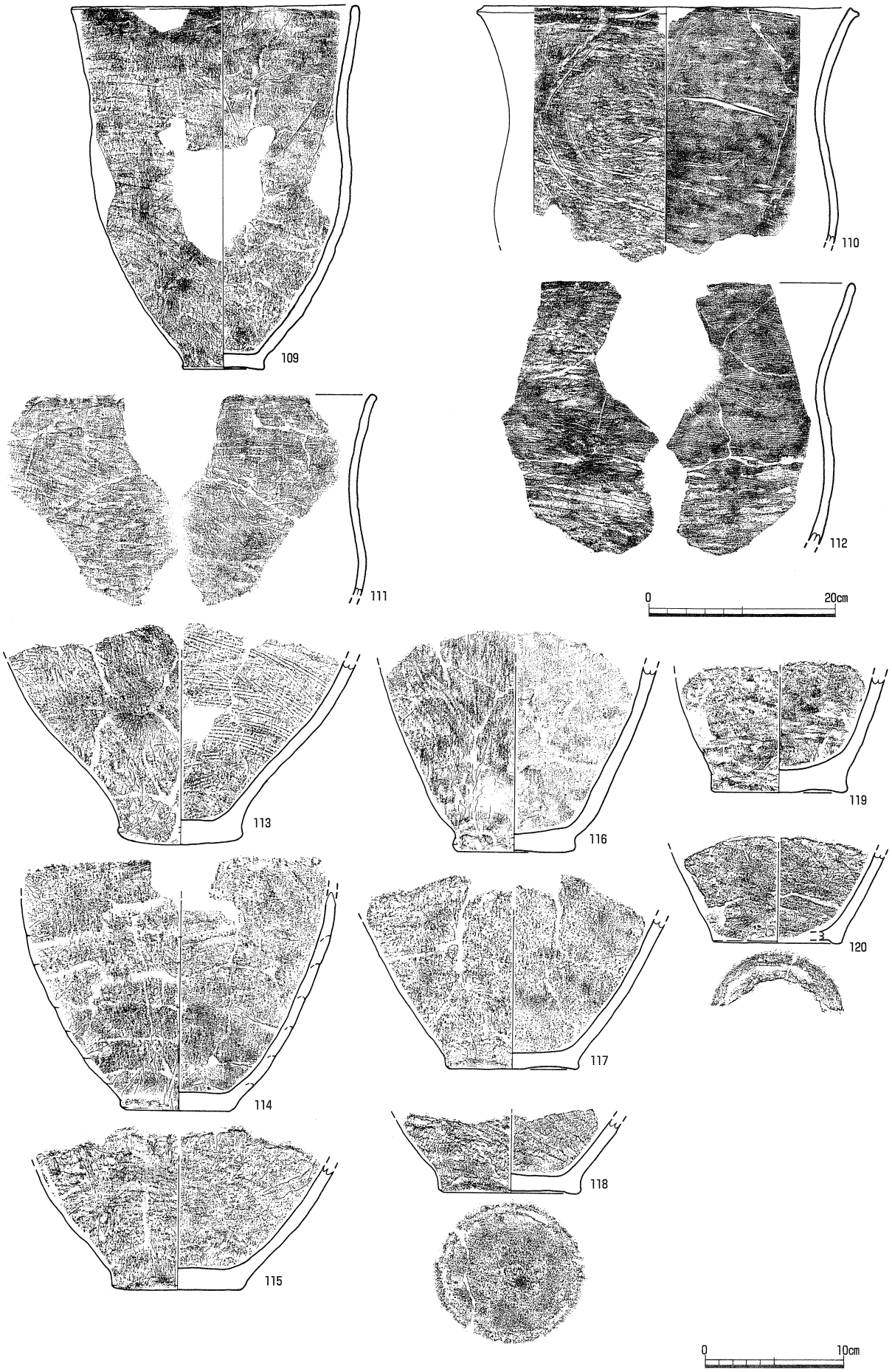
第19図　旧河道１出土縄文土器（４）（S＝1/4）



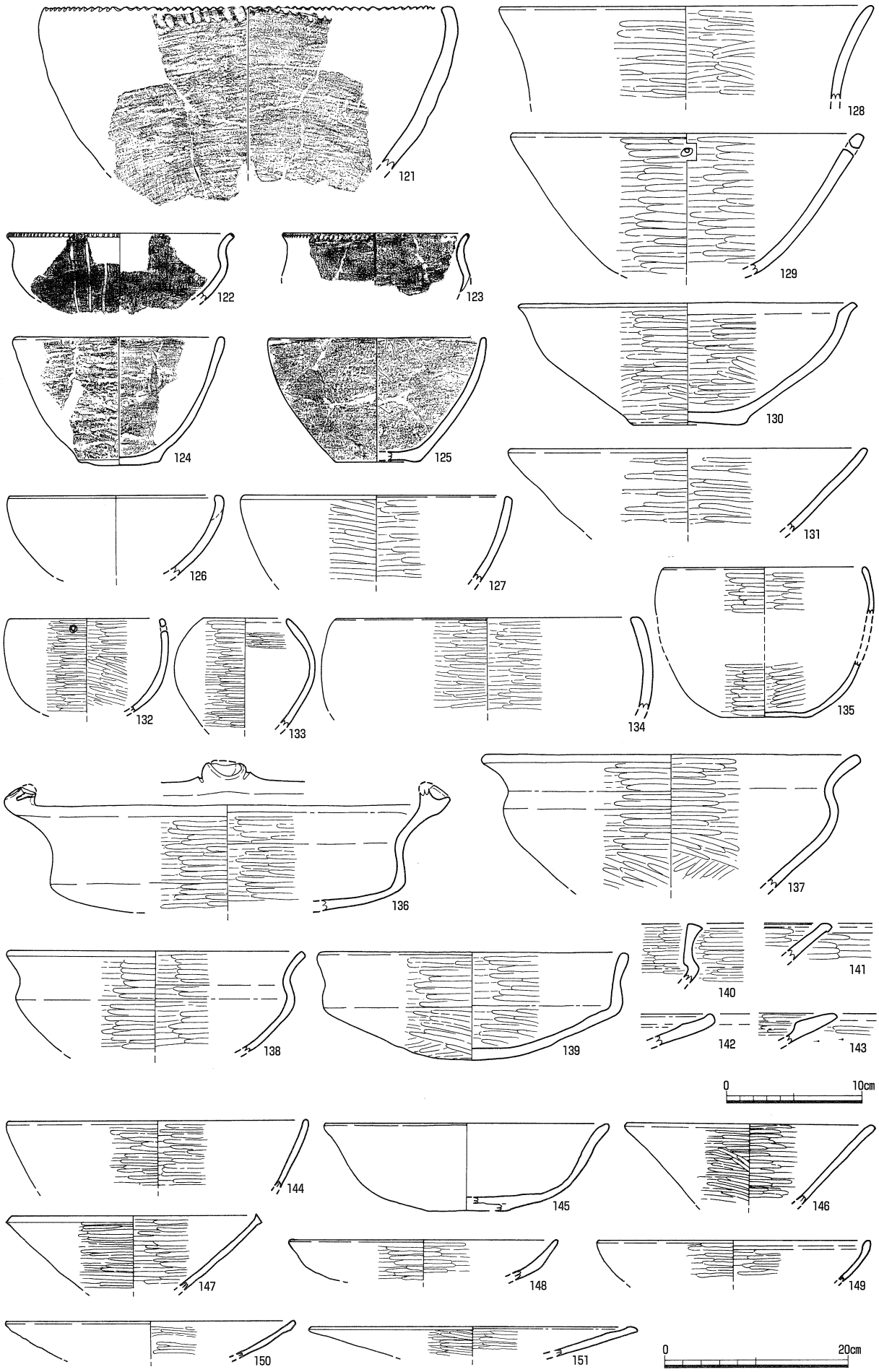
第20図　旧河道１出土縄文土器（５）（85～89：Ｓ＝1/4、90～96：Ｓ＝1/6）



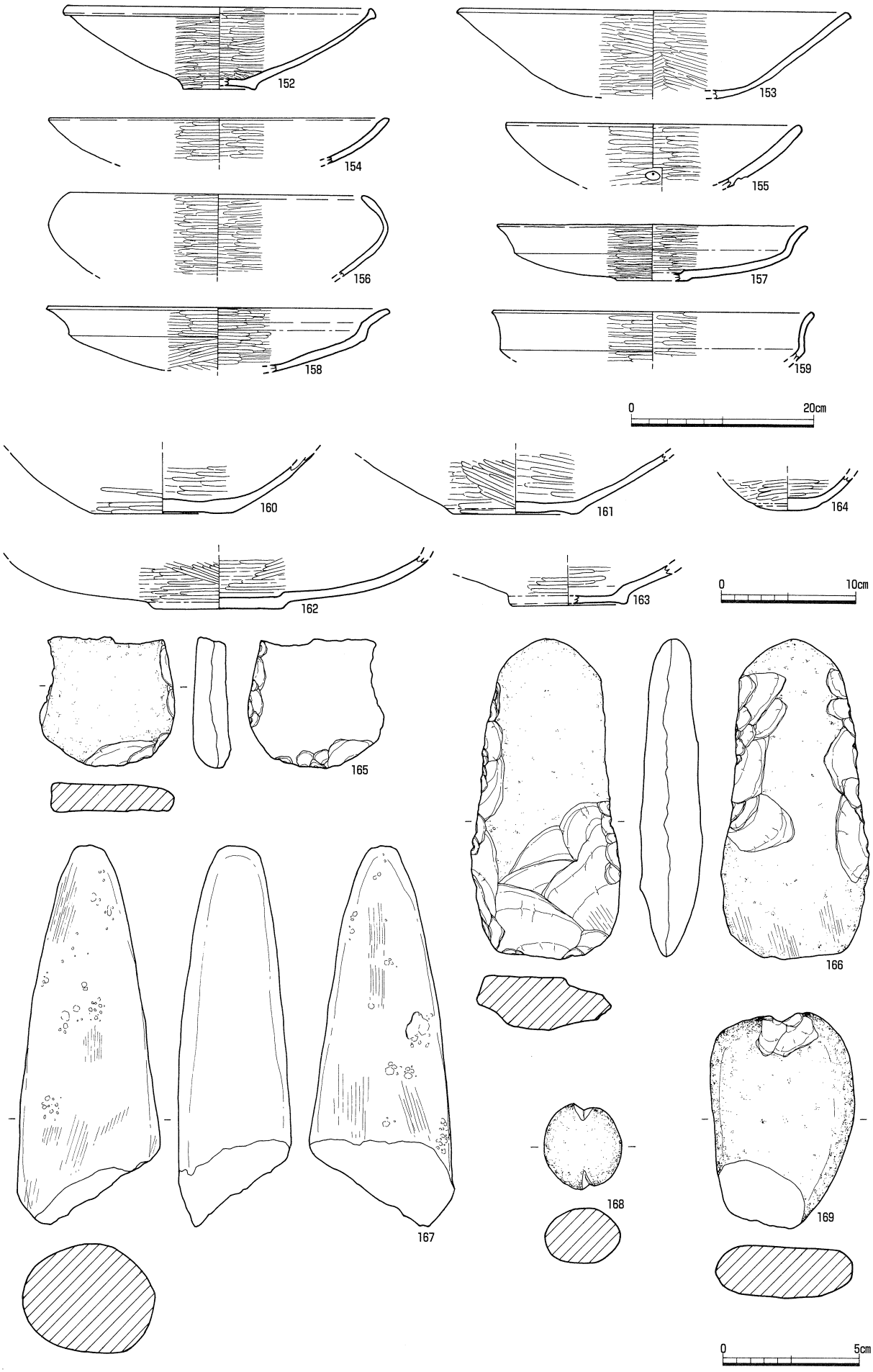
第21図　旧河道１出土縄文土器（６）（S＝1/6）



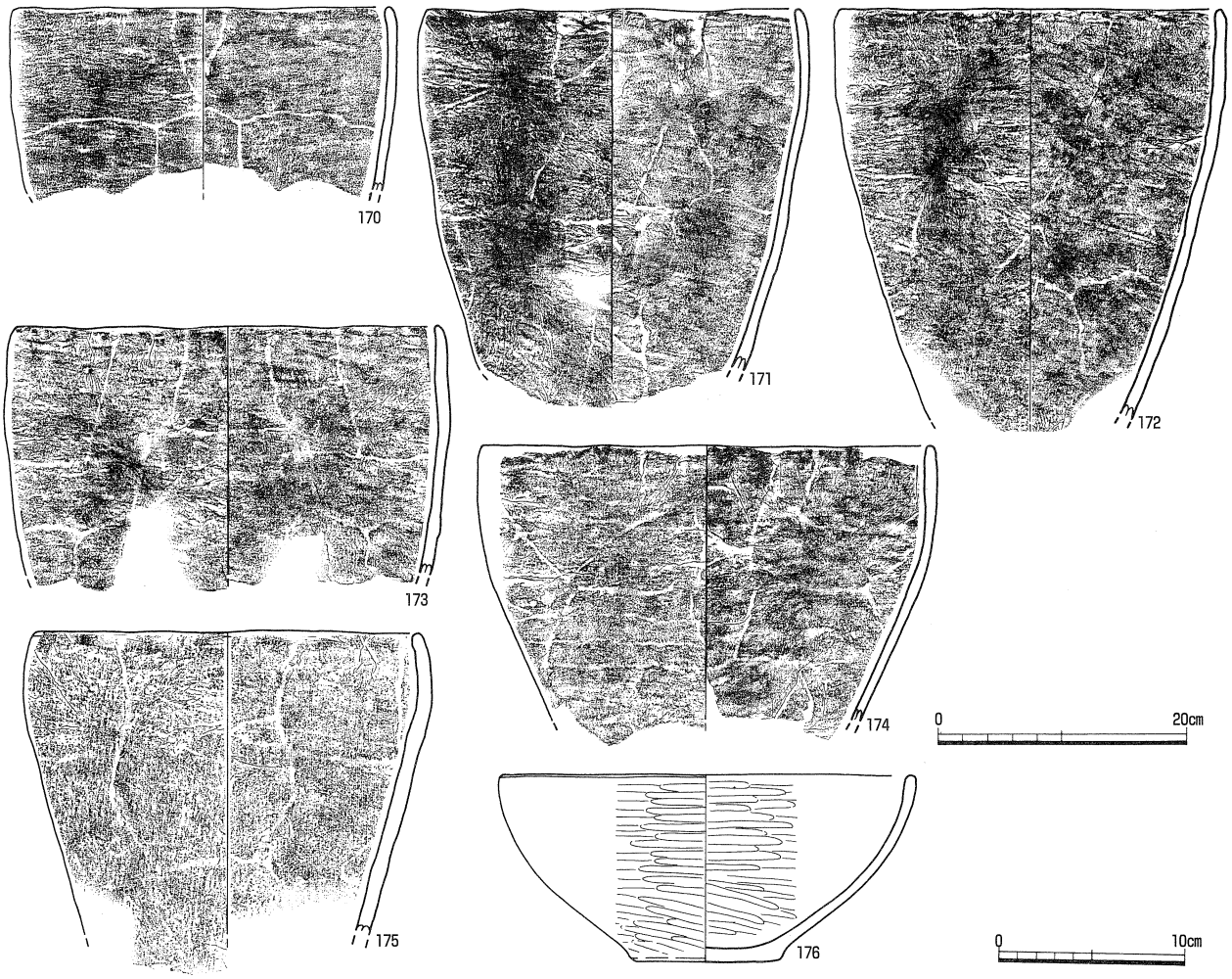
第22図　旧河道１出土縄文土器（７）（109～112：S＝1/6、113～120：S＝1/4）



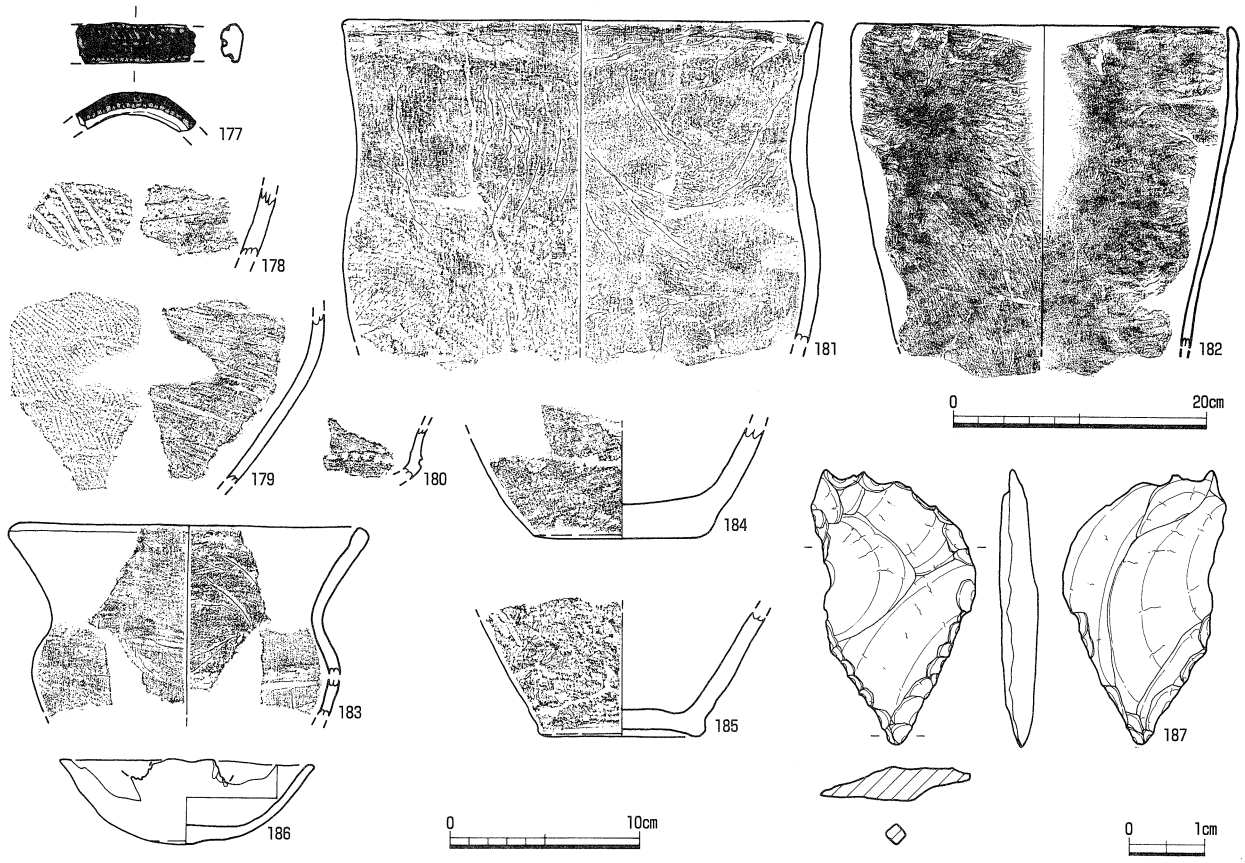
第23図　旧河道１出土縄文土器（８）（121～143：S＝1/4、144～151：S＝1/6）



第24図　旧河道１出土縄文土器（９）、石器（152～163：S＝1/4、165～169：S＝1/2）



第25図　旧河道２出土遺物（170～174：S＝1/6、175・176：S＝1/4）



第26図　１～３区黒色砂３出土遺物（177～181・183～185：S＝1/4、182：S＝1/6、187：S＝1/1）

113～120は深鉢の底部から胴部下半で、113～116は平底、117～119は凹底、120は上げ底のものである。113は底部の中央がふくらみ、突出するようなかたちになっている。114は体部に成形時の輪積み痕が顕著に残っている。

121～163は無文あるいは装飾の少ない浅鉢である。器形は大きくみて、体部が口縁部に向かって直線的あるいは緩やかに内湾しながら開くもの（121・124～131・144～155）と、体部中位で最も径が大きくなり、そこから口縁部に向かって強く内湾するもの（132～135・156）、体部に段をもち、屈折するもの（136～140・157～159）に分けられる。121～123は口縁端部に刺突が施された浅鉢で、122には口縁部から体部にかけて3本の沈線が縦方向に入れられている。136は口縁部に渦巻き状の突起をもつ。155の体部には円形の貼り付けられたものがはがれた痕跡が残る。底部は平底のもの（124・125・130・135・157・160・162）、凹底のもの（152・161・163）、丸底のもの（139・164）がある。157・162・163は内外面に段がつくかたちで底部が突出している。浅鉢の多くは内外面ともミガキ調整され丁寧に作られたものが多いが、中にはケズリやナデで調整を終えているもの（121～125）もわずかだがある。

165～169は旧河道１から出土した石器で、165・166は打製石斧、167は乳棒状の磨製石斧の刃部欠損品、168・169は石錘である。168は小形で、両端に切れ目を入れて紐かけを作っているのに対し、169は打ち欠いて紐かけを作っている。

170～176は旧河道2から出土した縄文土器である。170～175は無文の深鉢の口縁部から胴部にかけての破片である。器形はいずれも砲弾形か口縁部がやや内湾するもので、口縁端部はナデによって形を整えるようなことはしていない。176は無文の浅鉢である。底部は平底で、体部から口縁部が緩やかに内湾する椀形の器形である。

177～187は旧河道以外の部分で出土したものである。177は布勢式の口縁部把手の破片で、沈線と縄文で施文され、文様帯は赤色塗彩されている。178・179は深鉢胴部で、178には縄文と沈線、179には縄文が施される。180は浅鉢の破片で、体部の屈曲部に沈線が入れられ、その中に刺突が施されている。181～185は粗製深鉢である。183は小形のもので、体部が強くくびれそこから口縁部が開く器形である。186は真上からみると楕円形に見える器形の浅鉢で、調整はナデのみである。口縁部の少なくとも2か所にえぐり取られたようになっている部分があり、ここでは口縁端部に刻目が施されている。187は安山岩製の石錐である。

第５節　黒色砂２～黄色砂２上面の調査

１区の南側及び、２区のほぼ全体、３区東側では黒色砂２が認められ、黄色砂２上面まで発掘調査を行なった。黄色砂２上面では平地式建物跡１や土坑、ピット、性格不明遺構（SX01）を検出した。黒色砂２では縄文時代後期中葉から後葉の土器片が少量ながら出土した。

１　平地式建物跡（第28図）

平地式建物跡１はＩ39・40グリッドを中心に位置し、内側に円形に巡るＰ１～Ｐ８の柱穴列と、その外側を取り巻くP11～19の柱穴列からなる。内側の柱穴列の規模は長径5.1m、短径4.9mである。この柱穴列の内側には中央よりやや北にＰ９、やや南にＰ10があり、これらもこの建物の柱穴になる可能性が考えられる。内側の柱穴列内部の面積は19.6㎡になる。外側の柱穴列は、南北の径が8.0m、東西の径が7.6mとやや南北に長くなっており、南側のＰ11とＰ19との間隔は大きく開い

ている。内側の柱穴列と外側の柱穴列との間隔は北側が狭いのに対し、南側の方が広くなっている。また、外側の柱穴列内部の面積は43.6㎡で、建物とするには広すぎるように思われる。こうしたことから、内側の柱穴列が建物の柱穴となり、外側の柱穴列は建物の外周を取り巻く柵のようなものであった可能性が考えられる。

２　性格不明遺構（第29図）

SX01はＥ43グリッドの北東を中心とする部分に位置する、長さ7.2m、幅3.8m、深さ約1mの不整長楕円形の落ち込みである。上部に暗灰褐色砂が入り、黄褐色砂をはさんで、黒灰色砂が堆積している。この遺構の性格についてはよく分からないが、自然流路の一部が深く落ち込んだかたちで残っていたのかもしれない。上層の暗灰褐色砂から縄文土器片が出土した。188は沖丈式の深鉢で、口縁部に横方向の沈線と縄文が施されている。189は結節縄文を持つ深鉢胴部片で、権現山式古段階のものである。このほか図示しなかったが粗製深鉢の破片も出土している。

３　土坑（第30図）

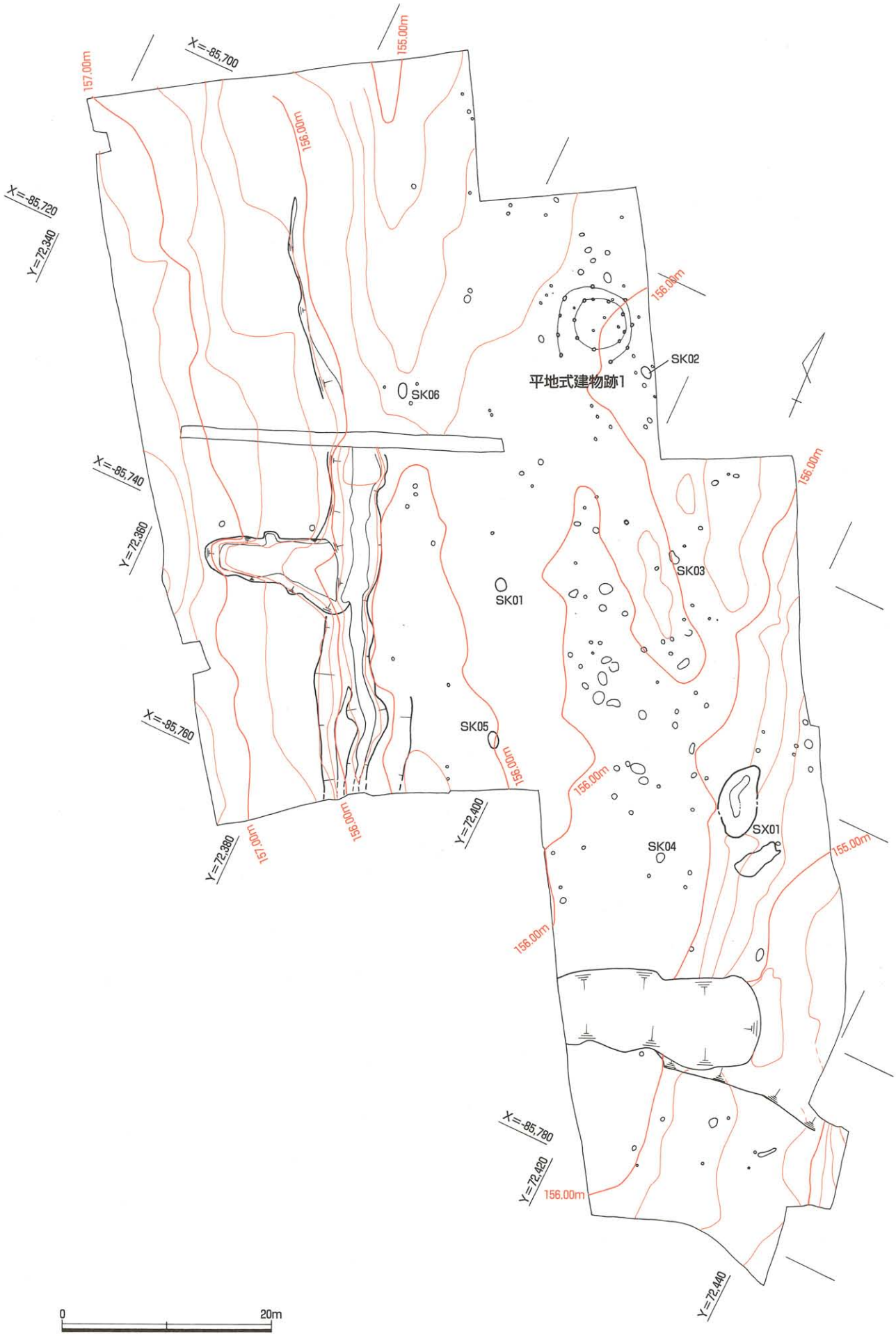
SK01～06は黄色砂2上面で検出された土坑である。

SK01は長軸長1.18m、短軸長1.03m、深さ0.75mの隅丸方形の土坑で、西側にテラス状の段がつくかたちになっている。土坑の中央の上位から中位にかけて長さ20～50㎝弱の礫が重なった状態で検出された。覆土の下層には１㎝大の炭化物粒が含まれていた。土坑の底面は礫層に当たったところで止まっており、水が少ししみ出てくるような状態であった。この遺構から出土した遺物はないため時期は特定できないが、検出面から縄文時代後期中葉～後葉と考えられる。

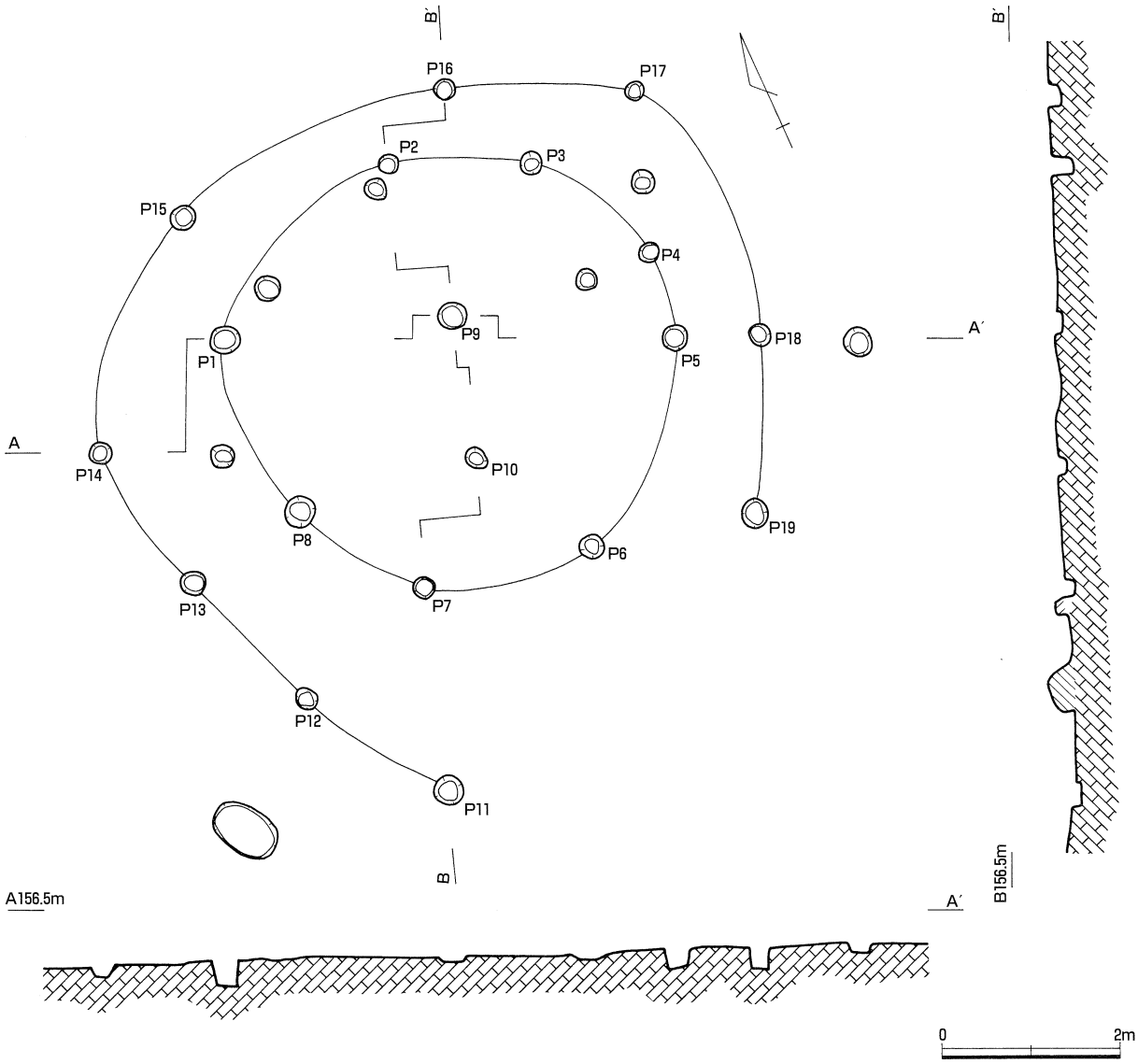
SK02～SK06は石を伴わない素掘りの土坑で、平面形態はいずれも楕円形もしくは不整楕円形である。これらの遺構からは、SK06で深鉢の胴部片が出土したのみで時期の特定できるものはなかった。検出面からこれらの土坑の時期は縄文時代後期中葉～後葉と推定される。

４　出土遺物（第31図）

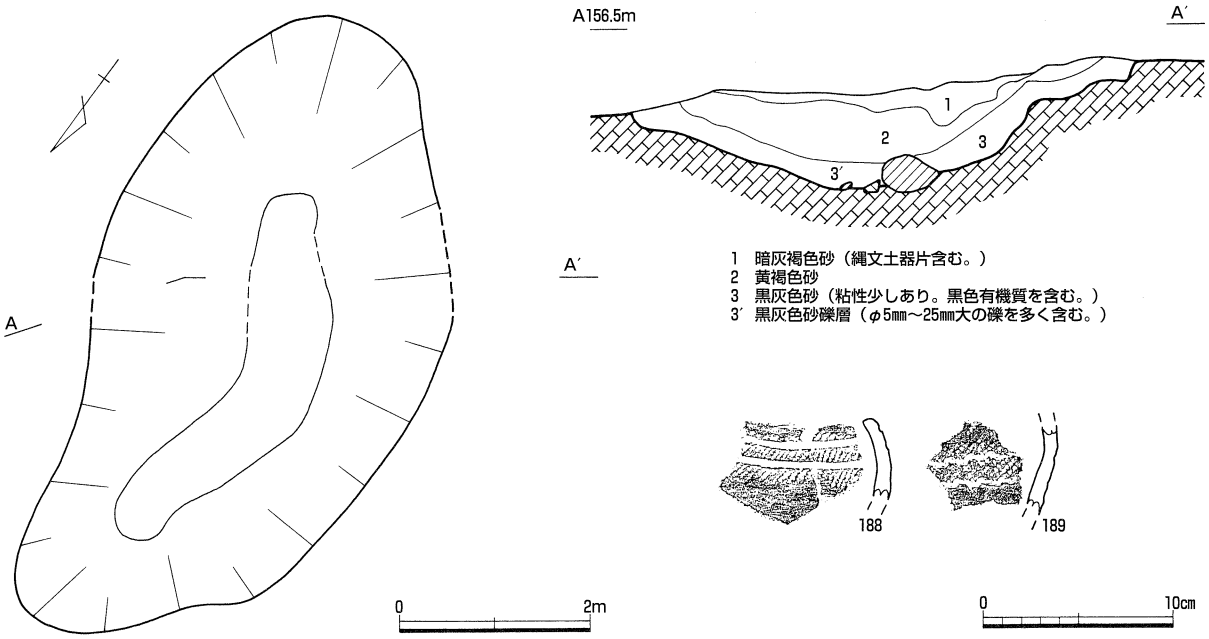
190は拡張した口縁部に沈線や刻目の入る布勢式の深鉢で、本来は黒色砂３に含まれていたものが水流などで土層が撹拌されたため混入したものと思われる。191・192は口縁部に横方向の沈線が入れられ、縄文が施された深鉢で沖丈式のものである。191はSX01の188と同一個体になる可能性がある。193は横方向の沈線と縄文で施文されている。194は体部の屈曲部に刻目の入る突線をもち、刺突を伴う沈線で区画した内側に縄文が施されるものである。193・194は沖丈式の注口土器と思われる。196・197は結節縄文が施された権現山式古段階の深鉢胴部片である。195は体部が「く」の字に屈曲する器形で、擬似縄文が入る。権現山式新段階の注口土器胴部片であろう。198は弧状の沈線が入れられた深鉢口縁部片で、時期は不明である。199は口縁端部に刻目をもつものである。縄文時代晩期のものが混入したのかもしれない。200～204は粗製深鉢の口縁部片である。205～208は粗製深鉢の底部片で、205・206は平底、207・208は凹底になる。209～213・215は浅鉢口縁部片である。209は外面が粗いナデ、内面はケズリののち条痕調整された粗製のものである。210は端部内側が肥厚し、211は内面に沈線が施される。212は口縁部が短く立ち上がっている。210～212は色調が黒色で、内外面が丁寧に磨かれたもので縄文時代晩期のものの可能性もある。本来、黒色砂１に伴うものであったが、取り上げの段階では土層の区別がつかなかったため黒色砂２出土としたのかもしれない。214は浅鉢胴部片で、内面に段がつく。216は安山岩製の平基式石鏃、217・218は楔形石器で、前者は安山岩製、後者は水晶製である。219は切目石錘である。



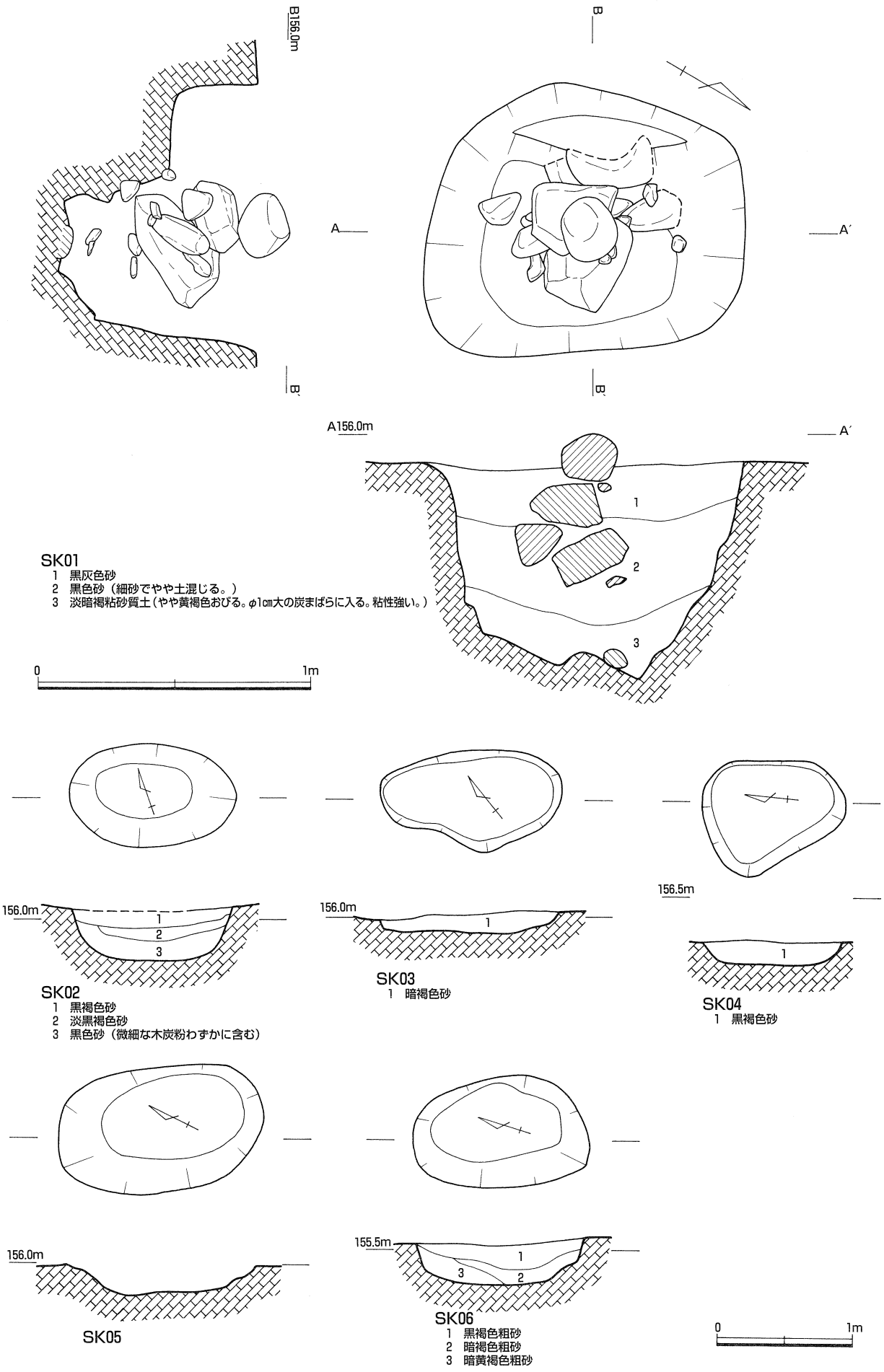
第27図　1～3区黄色砂2上面遺構配置図（S＝1/500）



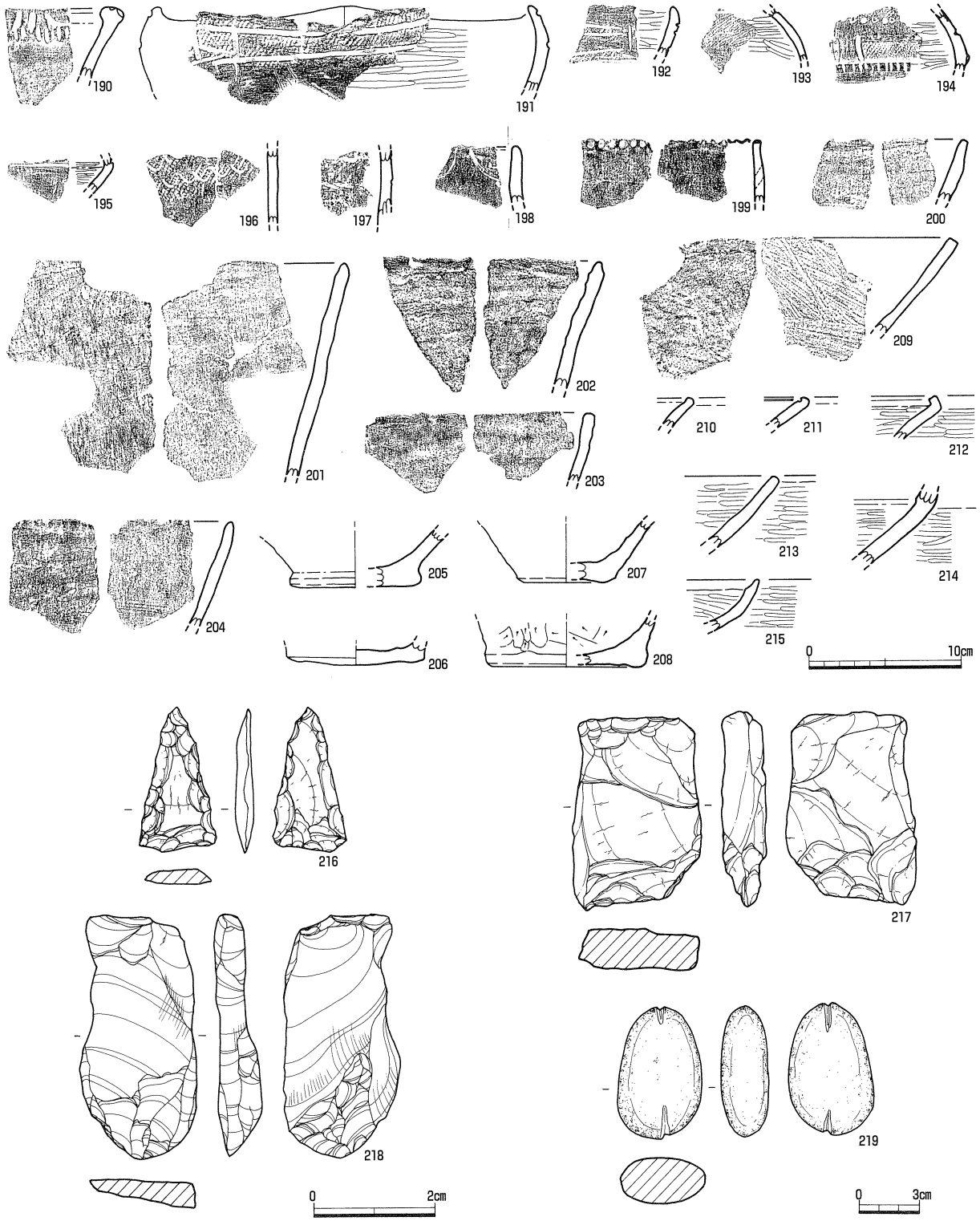
第28図　平地式建物跡１（Ｓ＝1/80）



第29図　SX01（Ｓ＝1/80）、出土遺物（Ｓ＝1/4）



第30図　SK01～06（SK01：S＝1/20、SK02～06：S＝1/40）



第31図　1～3区黒色砂2出土遺物（190～215：S＝1/4、216～218：S＝1/1、219：S＝1/3）

第6節　黒色砂1～黄色砂1上面の調査

1　縄文時代の遺構・遺物

（1）性格不明遺構・土坑（第33～36図）

SX02はN37に南北にのびる性格不明遺構で、長さ6m、幅3.4m、深さは0.65mである。この遺構の性格はよく分からないが、自然流路の一部が深く落ち込んだかたちで残っていたのかもしれない。

小片のため図示していないが、粗製深鉢の破片が出土している。SK07はSX02の西側を切って掘り込まれた楕円形の土坑で、南側にテラス状の段がある。小片だが縄文土器の粗製深鉢片が出土している。

SK08～10・13は礫を伴う土坑である。

SK08は平面形が楕円形のもので、覆土の上部には焼土が入り込んでいる。中位の深さで長さ30㎝前後の石が２つ並んだかたちで検出された。覆土中から縄文土器片が出土している。220は体部に段をもつ浅鉢で、調整は内外面ともナデで終えられている。

SK09は円形の土坑で、覆土中には土器片や礫が混在していた。221・222は口縁部が緩やかに外反する深鉢である。223は体部が屈曲し、そこから波状の口縁部が直立している。224・225は磨製石斧である。遺物から縄文時代晩期前葉～中葉の土坑と考えられる。

SK10は円形の土坑である。一部は黄色砂１上面で検出できたが、黄色砂１がちょうどなくなる部分であったためプランは完全には確認できず、黒色砂２を取り除いた段階で完全に検出できた。確認できた規模は上面径約1.4m、深さ0.34mであるが、実際はこれよりも径が大きく、深さも0.9m程度あったと考えられる。覆土上部には15～50㎝を超える石が散在し、底面には拳大から50㎝前後の礫が密集していた。覆土中から縄文土器や石器が出土した。226～228は深鉢口縁部で、226は端部に刻目をもち、227は内面に円形の刺突文をもつ。229は２条突帯の深鉢胴部片である。230は浅鉢で、胴部が2段に屈曲している。231・232は安山岩製の平基式石鏃、233は安山岩製のスクレーパーである。229から縄文時代晩期後葉の遺構と考えられる。

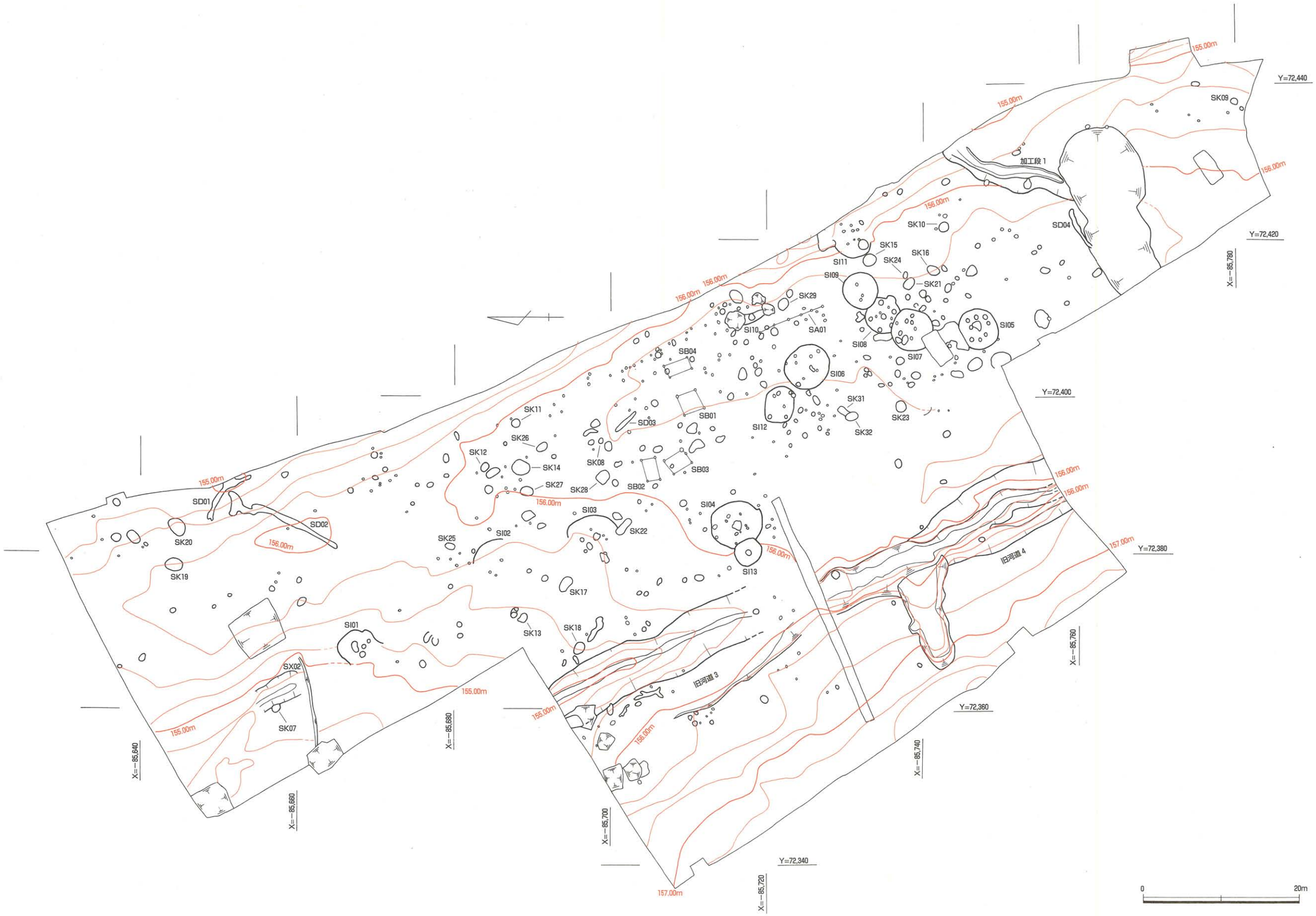
SK13は不整形な土坑で、西側が一段深くなっており、この部分に石が入る。234は波状口縁の深鉢で、口縁部内面に粘土帯を貼り付けて肥厚させ、沈線や縄文で施文している。崎ヶ鼻式のものと考えられるが、この土坑は黄色砂1上面から掘り込まれていることから、混入したものと考えられる。遺構の時期は不明である。

SK11・12・14～18は素掘りの土坑で、平面形は、SK11・15は円形で、SK12・14・16は楕円形、SK17・18は不整形である。SK16は北端にピットを伴う。これらの遺構からは小片ではあるが縄文土器片が出土しているため縄文時代の土坑であった可能性が考えられる。

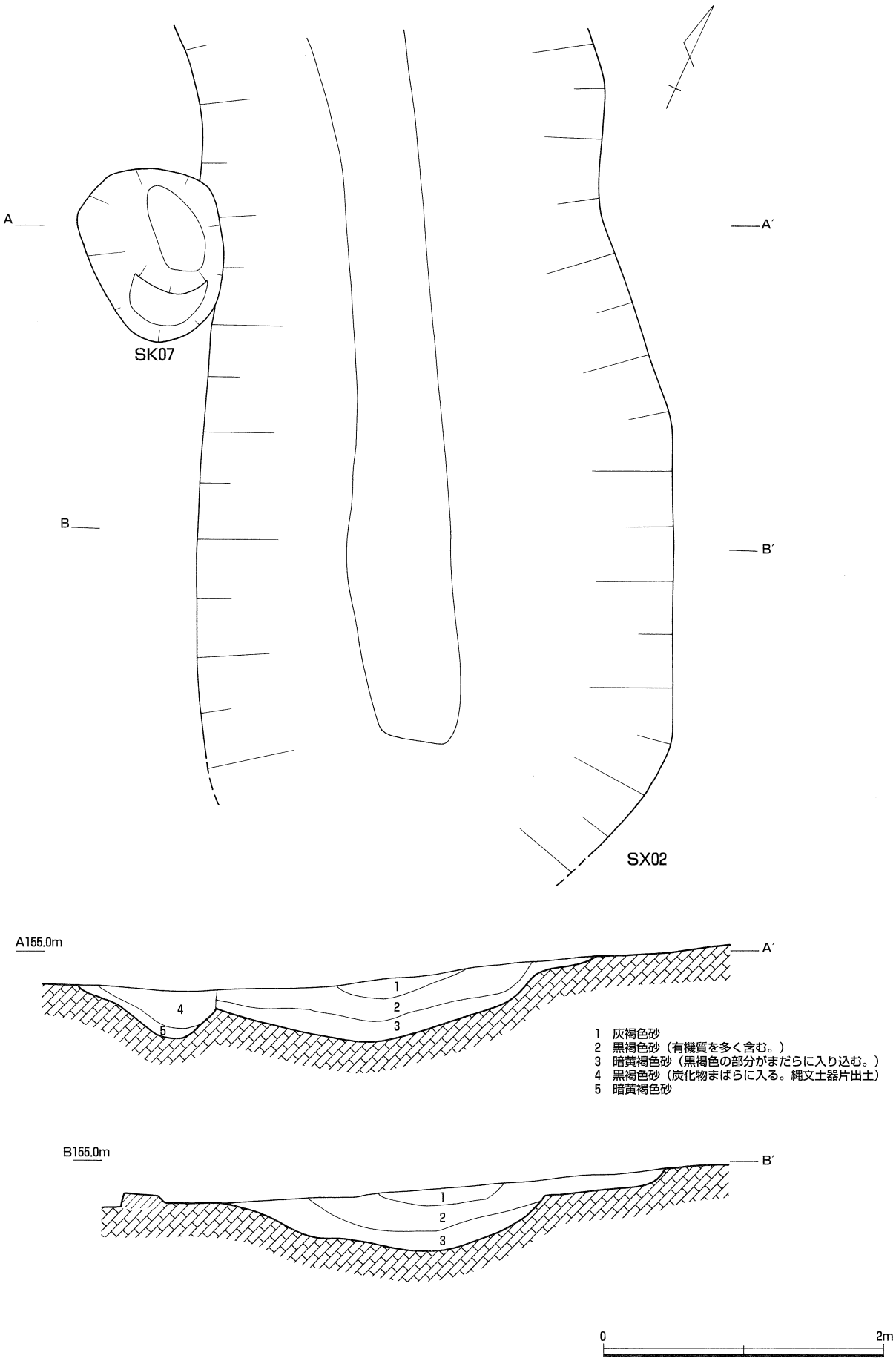
（２）旧河道

旧河道３（第37図）　３区の北側を南北にのびていた。確認できた長さは約27m、幅は6.4mで、第37図断面での深さは0.3mである。河道の底面から覆土にかけて縄文土器片が出土した。235は縦方向の2本沈線の間に縄文が施され、沈線の外側には縦長の刺突文が列状に入れられている。下層の旧河道１で出土した27と類似していることから、布勢式のもので、下層のものが混入したのではないかと思われる。236～240は粗製深鉢である。236は口縁部が強く外反するもの、240は口縁部が緩やかに外反するもの、237は口縁部が内湾するもの、238・239は砲弾形のものである。239には豆粒状の粘土粒が貼り付けられている。241は凹底の深鉢である。242は椀形の浅鉢で、口縁部は緩やかに外反する。243は浅い皿状の浅鉢で、体部から口縁部にかけて緩やかに内湾しながら開いている。内外面とも条間の密な条痕調整が認められる。

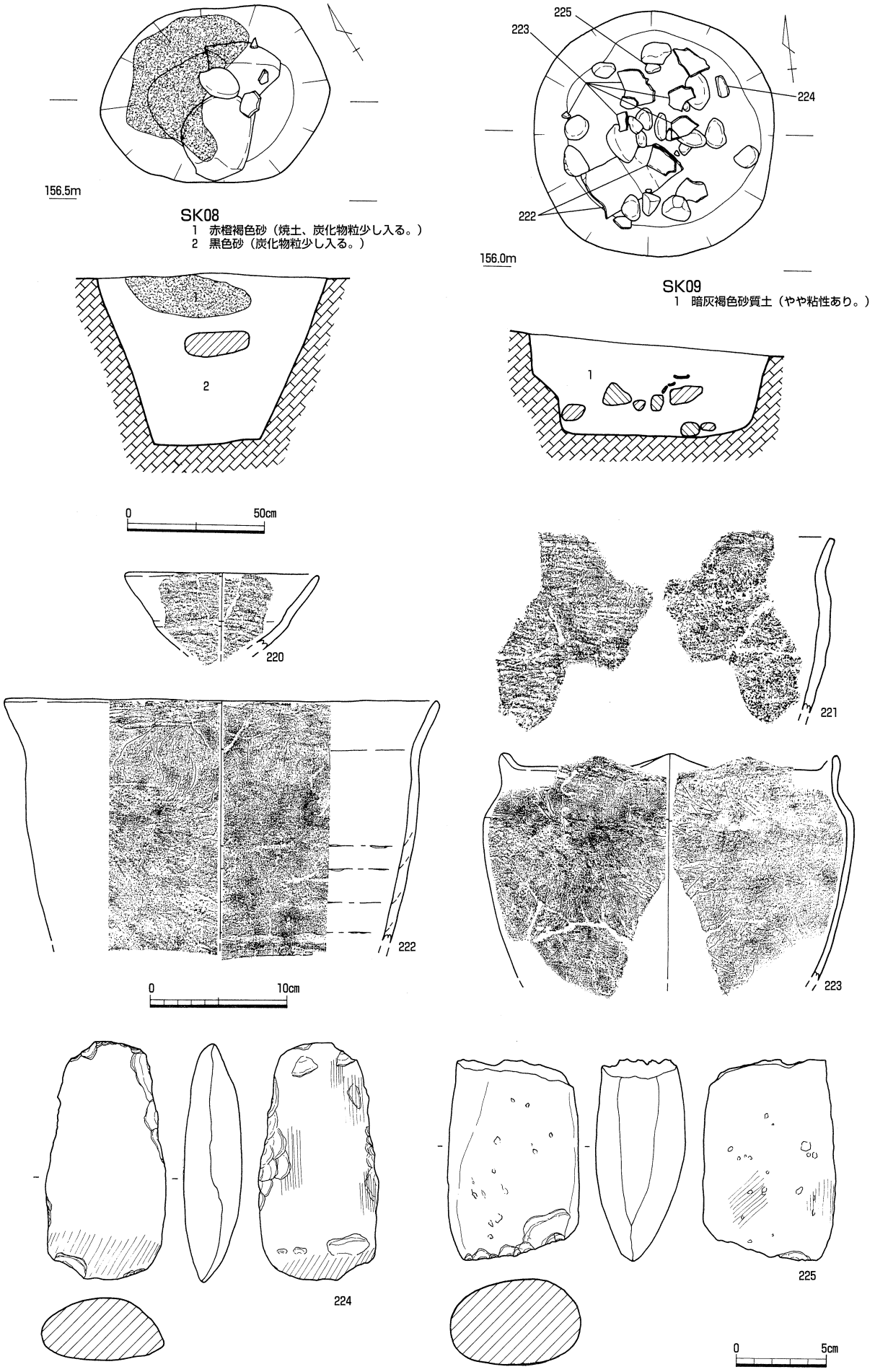
旧河道4（第９・32図）　３区南側中央で検出された。３区南壁における河道の幅は約5mで、底面の標高は約156mである。３区南壁から北へのびるが、撹乱部分に当たるためここからどのようなっていたのか分からない。ただし、３区中央の土層断面では旧河道４に相当する落ち込みは見られ



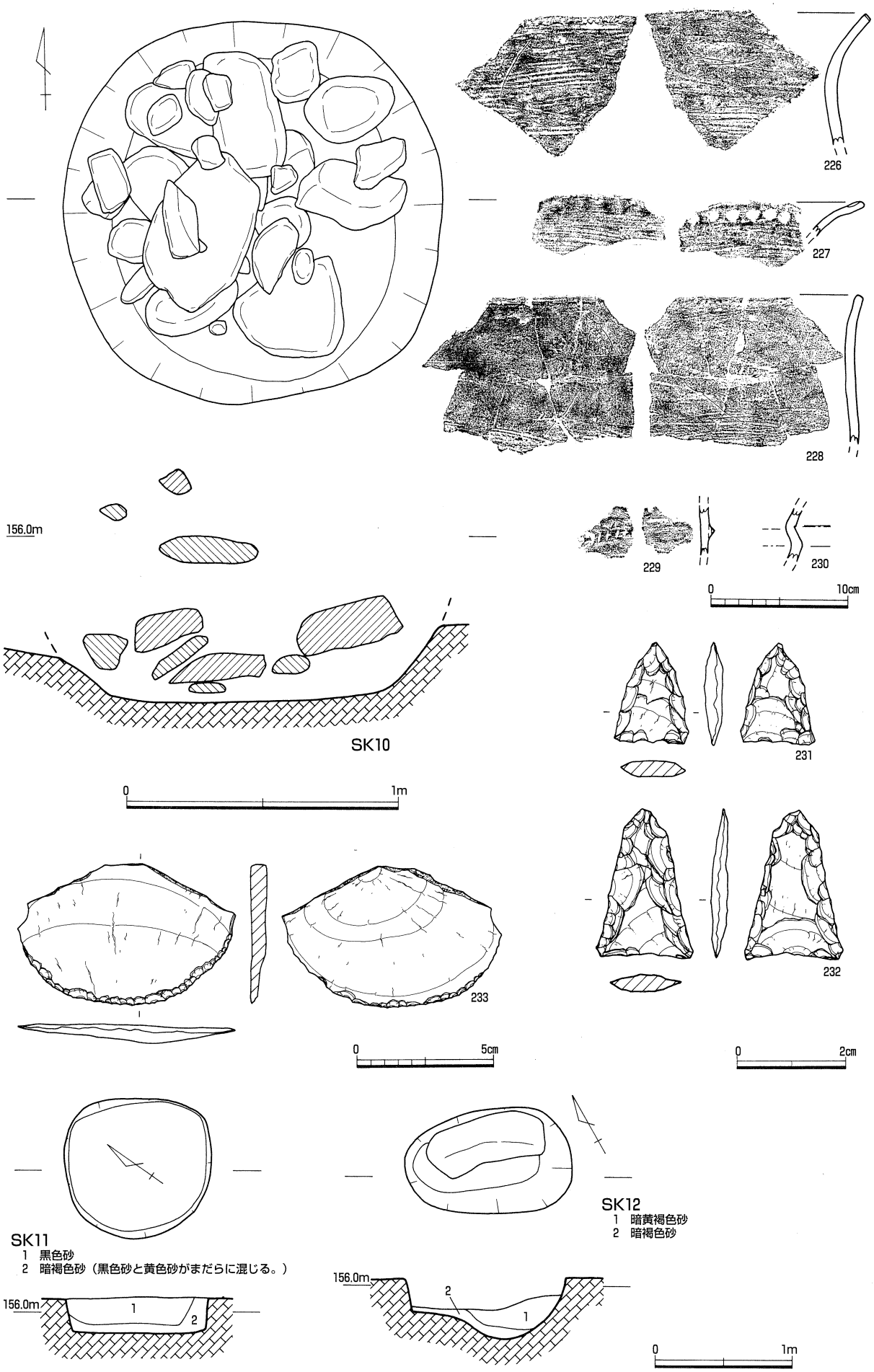
第32図　1～3区黒色砂1～黄色砂1上面遺構配置図（S＝1/500）



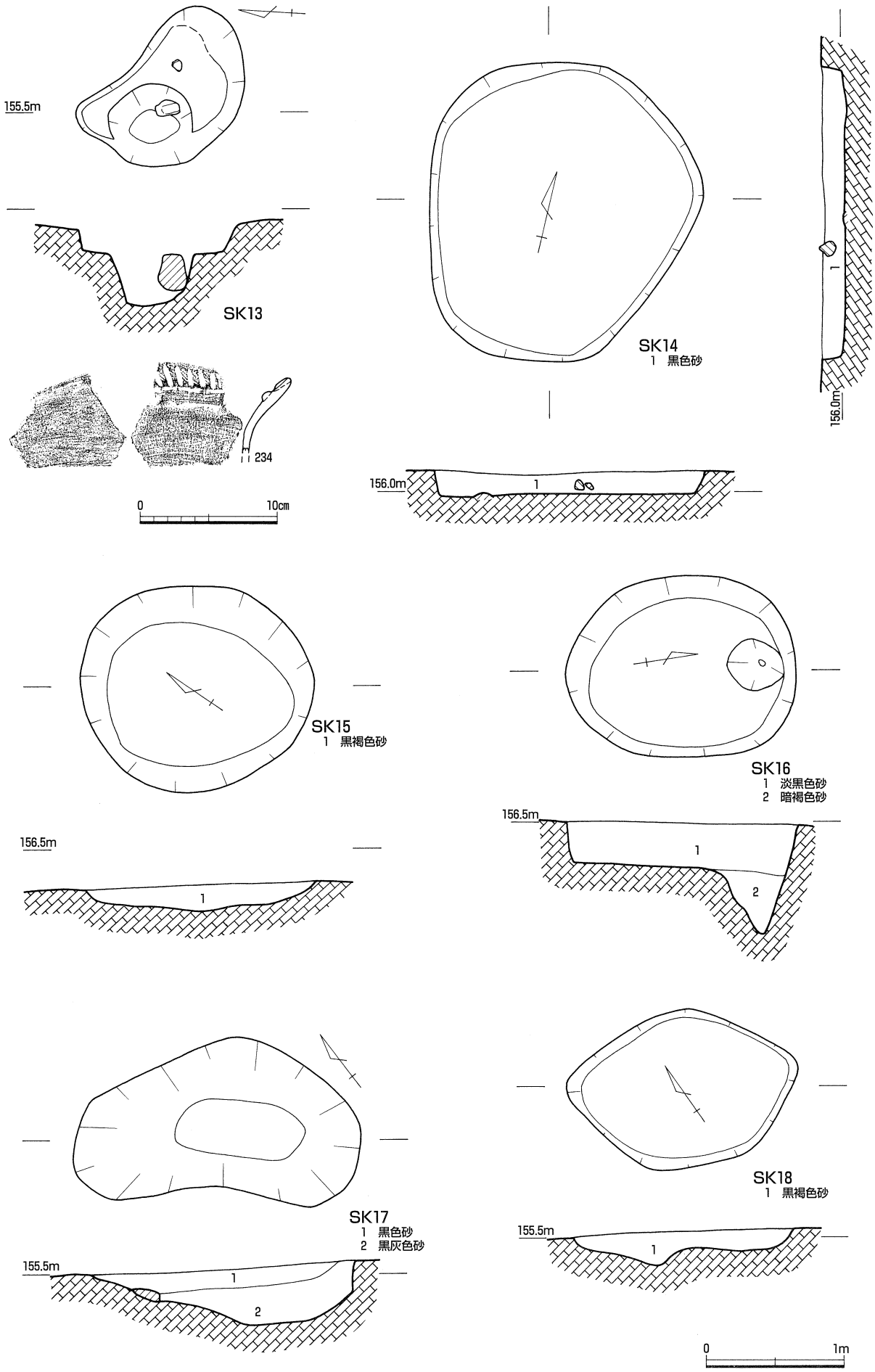
第33図　SX02・SK07（S＝1/40）



第34図　SK08・09（S＝1/20）、出土遺物（220～223：S＝1/4、224・225：S＝1/3）
220はSK08、221～225はSK09より出土



第35図　SK10～12（SK10：S＝1/20、SK11・12：S＝1/40）、
出土遺物（226～230：S＝1/4、231・232：S＝1/1、223：S＝1/2）



第36図　SK13～18（S＝1/40）、出土遺物（S＝1/4）

ないことから、途中で収束していたのではないかと思われる。有機質分を多く含む黒灰色粘質土が堆積しており、水流はあまりなかったと思われる。

（３）不明土製品・磨石とその出土状態（第38・39図）

不明土製品２点（244・245）と磨石（246）は３区南西隅のC38で１か所にかたまって出土した。土坑など遺構に伴うものではないが、その出土状態からほぼ原位置を保っており、一括性が高いものと判断される。これらの出土した標高は約157．6mで、３区南壁の３層（黒色砂１に相当）と10層（火山灰のようなもの含む。黄色砂２に対応か。）の境界付近に位置する。また、これらの周辺で同じくらいのレベルから縄文土器片の269・332が出土している。以上のことから、これらは縄文時代後期中葉～晩期の遺物と考えられる。

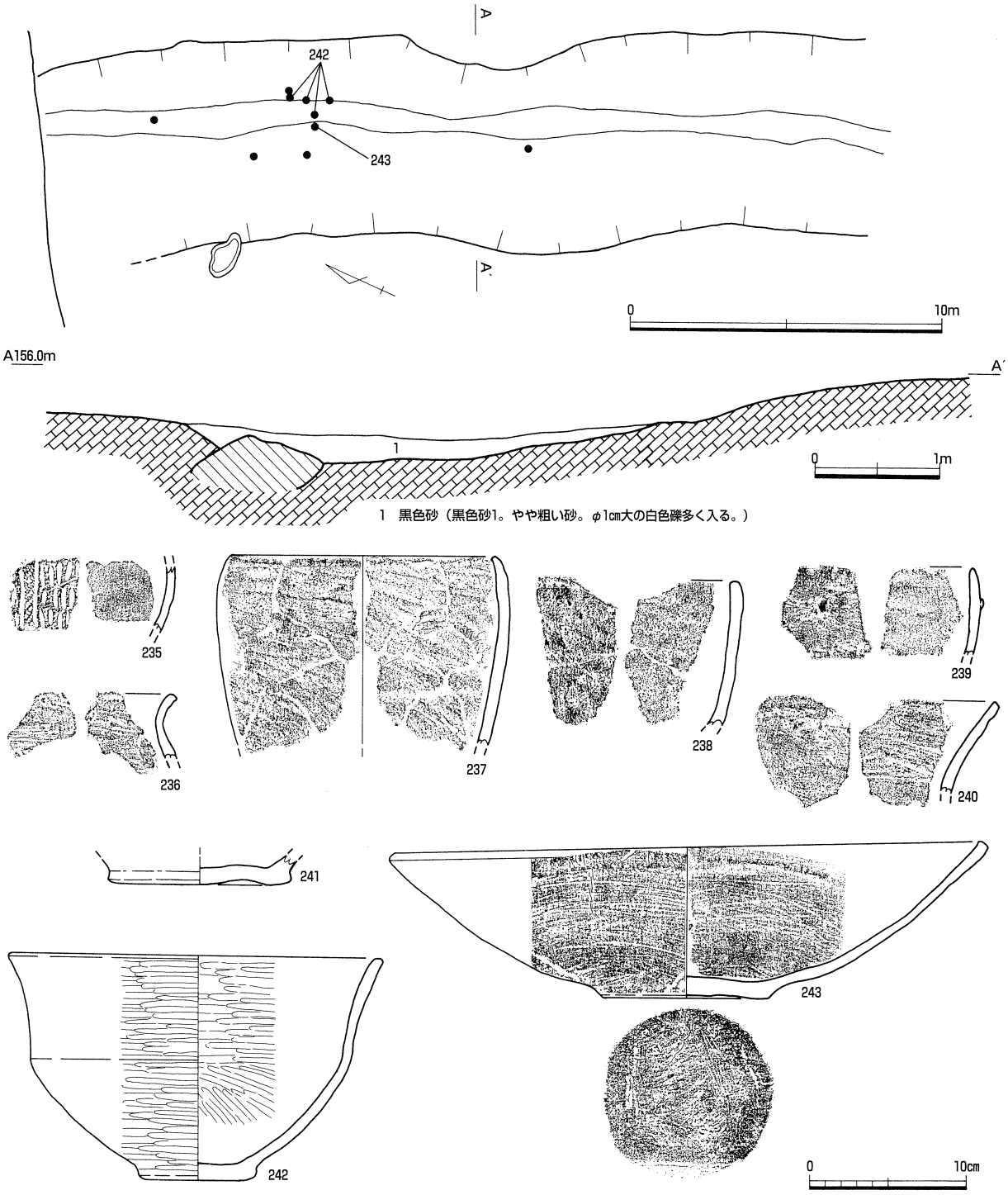
244は円形の土製品である。全体的にやや摩滅しているが、特に実測図の表面側は削られたためか線状の傷跡が見られ、図手前側に向って厚みが若干小さくなっている。245は楕円形の土製品で、実測図の裏面側には溝状の筋が入れられ、ミガキ調整されている。これに対し表面側には溝状の筋はなく、焼成後に何かで削られたため、磨り減った部分や細長くくぼんだ傷跡が見られる。図の手前側には焼成後に削って抉りあけられたような穴がある。244・245とも色調は黒色で、焼成は良くないようである。また、触るとススのようなものが付着することから二次的に被熱した可能性も考えられる。246は実測図の裏面側が主要な磨面として使用されている。表・裏面ともにススが付着していることから、火にかけられたものと考えられる。

（４）縄文土器（第40～43図）

247～267は縄文時代後期の有文土器である。247～251は崎ヶ鼻式の深鉢で、口縁部に粘土を貼り付けて肥厚させ、縄文や沈線などで施文している。252は布勢式～崎ヶ鼻式の浅鉢で、体部の屈曲部に刻目が入る。253～256は沖丈式の深鉢で、口縁部に沈線や縄文が施されている。257は沖丈式の注口土器胴部である。258・259は権現山式古段階の深鉢で、258は口縁部外面に沈線と結節縄文が施され、259は内面に結節縄文が見られる。261は縦方向に多条の沈線が施された口縁部、261は縄文地の胴部片である。262は沈線の間に擬似縄文が施されたもので、263は沈線の間に貝殻腹縁による刺突が見られる注口土器胴部である。264は沈線の間に羽状の刺突文が施される。262～264は権現山式新段階のものと思われる。265～267は宮滝式並行の深鉢である。265は口縁部内面に沈線が施され、その上が刺突されている。266・267は4条の凹線文が巡る胴部片で、266は巻貝によって扇状圧痕が付けられた浮文をもつ。以上のうち247～264は本来黒色砂２以下の層に伴うものであることから、下層のものが混入したと考えられる。265～267についても黄色砂１が残っていない部分で出土しているため、黒色砂２に伴う可能性もある。

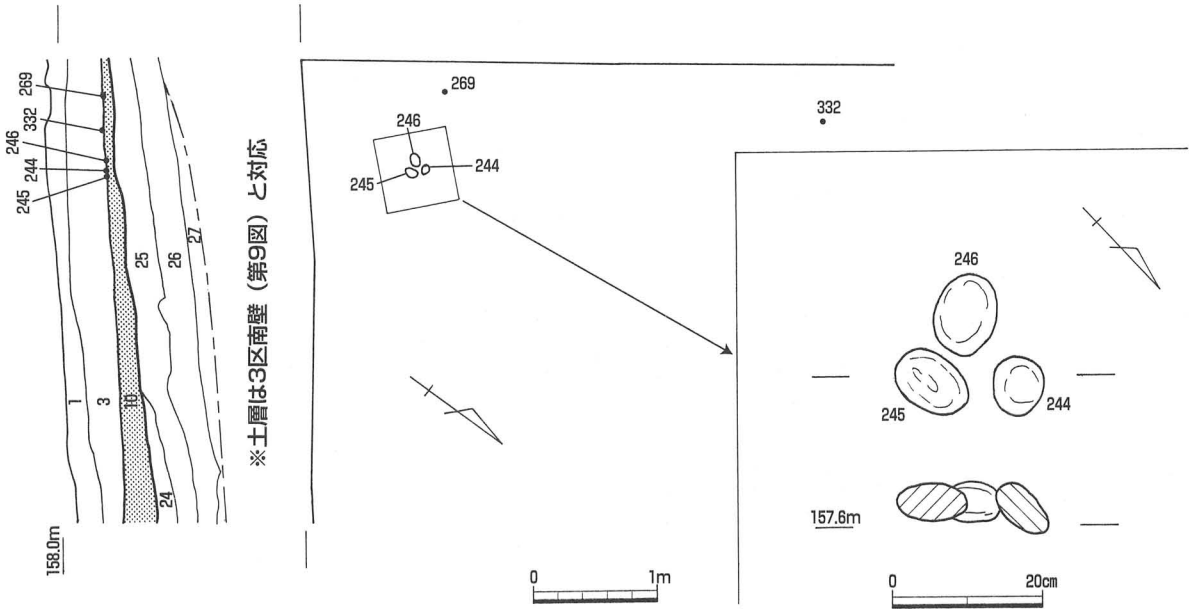
268～272・274～279・281～285は無文の粗製深鉢である。268・269・271・277・278は口縁部が内湾するものだが、278についてはボウル形の浅鉢になるかもしれない。270・272・274は砲弾形のもの、275・276は口径10cm前後もしくはそれ以下の小形のものである。281・282は頸部に強いナデが入り、口縁部が短く外反するもので晩期前葉のものと考えられる。279は頸部がすぼまり、そこから口縁部が短く直立気味に立ち上がる。283～285は口縁部が緩やかに外反するもので、晩期中葉に位置づけられよう。285は波状口縁である。

280は波状口縁の深鉢で、波頂部の下に棒状の粘土を貼り付けた文様をもつ。286～291は口縁端部に刻目が入れられたもの、292～299は口縁部内面に刺突文が施されたものである。

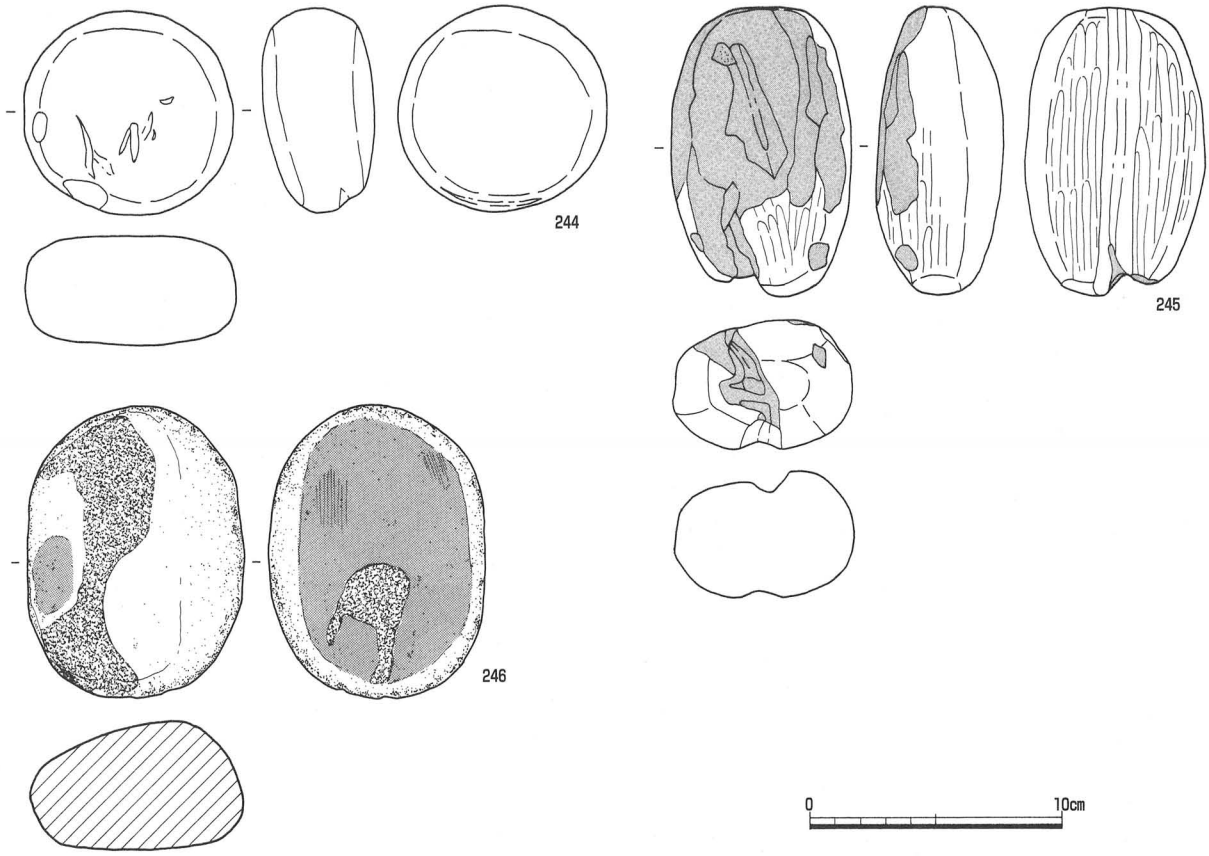


第37図　旧河道３（平面：Ｓ＝1/200、断面：Ｓ＝1/50）、出土遺物（Ｓ＝1/4）

300～330は突帯文土器で、300～303は口縁端部に刻目が施される。300・303は口縁部が外反する器形で、302は砲弾形の器形になる。304～311は口縁部から下がった位置に刻目をもつ突帯がつくもので、305は半截竹管様の工具で、308は先端が二又に分かれた工具で刻目が入れられている。312～314は口縁部から下がった位置に無刻目突帯をもつものである。314は口縁部が内傾しており、壺形のものであったと思われる。315・316は口縁部にほぼ接して刻目突帯をもち、317・318は口縁部にほぼ接して無刻目突帯をもつ。319～322は二条突帯深鉢の胴部片である。319の突帯は貼り付け突帯ではなく、わずかな高まりしかもたない。323～329は口縁部に接して刻目突帯をもち、329～330は口縁部に接して無刻目突帯をもつ。323は指先で刻目が施されている。



第38図　不明土製品・出土状態（S＝1/60、拡大図はS＝1/10）

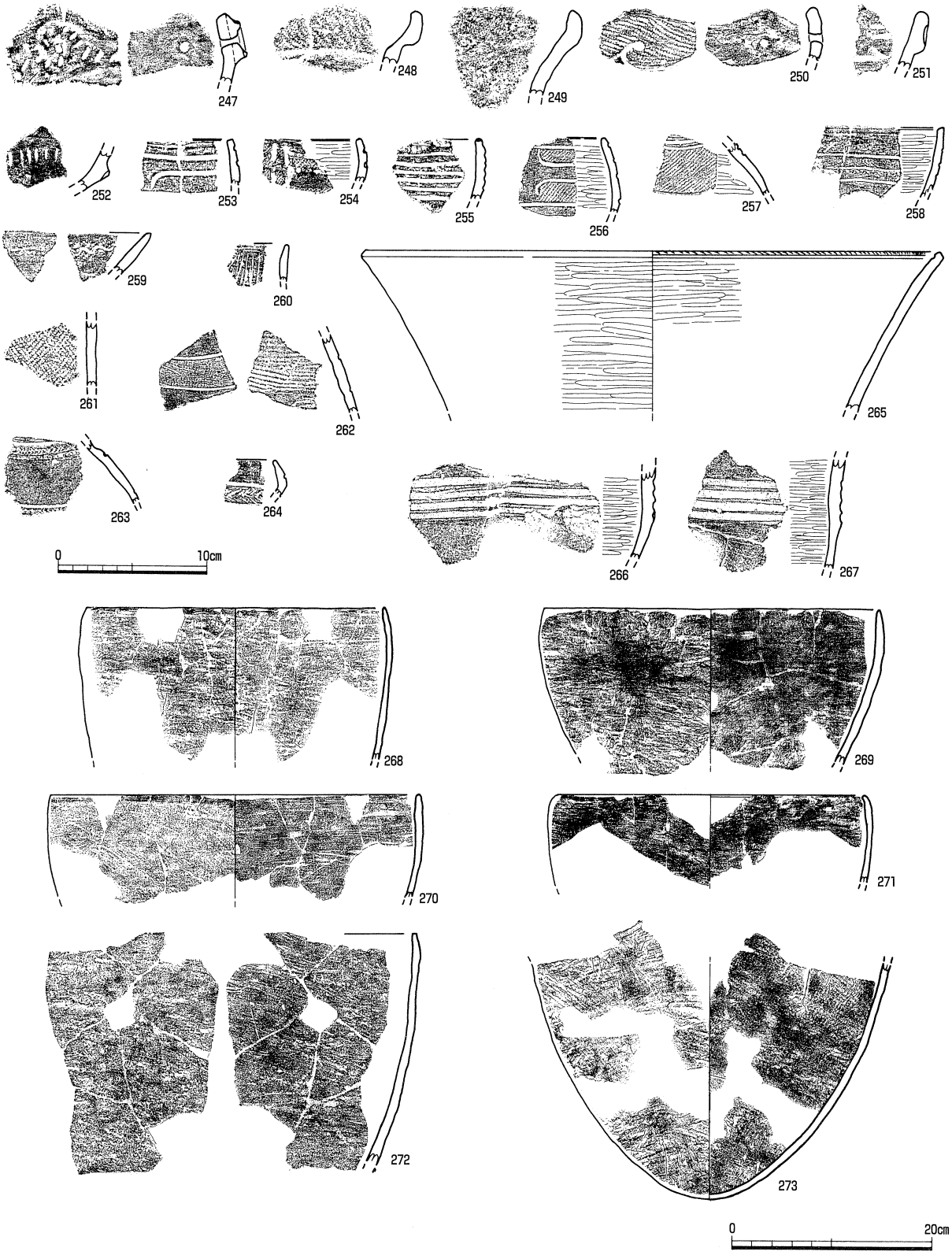


第39図　不明土製品・磨石（S＝1/3）

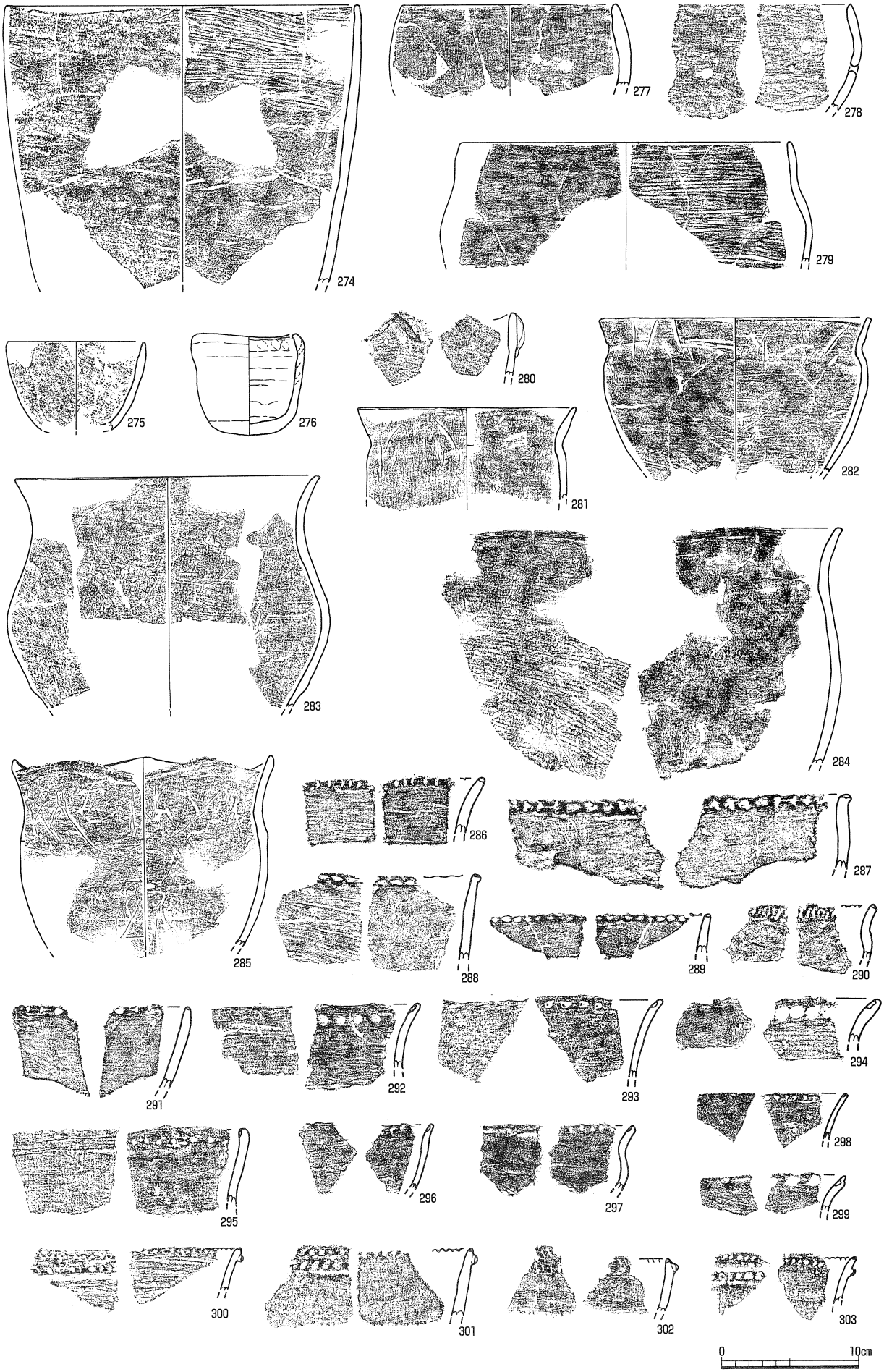
273・331～334は深鉢の底部で、273・331は丸底、332・334は凹底、333は平底だが体部の立ち上がりが緩やかで丸底に近くなっている。

335～372は浅鉢である。335～345は沈線文や刺突文などが施された浅鉢で、滋賀里Ⅱ式に併行すると思われる。346～348は粗製の浅鉢で、346は体部が屈曲し口縁部が短く外反する。348は小型のものである。358・359は口縁部が大きく外反して開き、端部が短く立ち上がるもので晩期前葉に位置づけられる。357は体部が２段に屈曲し、口縁部が短く、晩期中葉のものと思われる。366・367

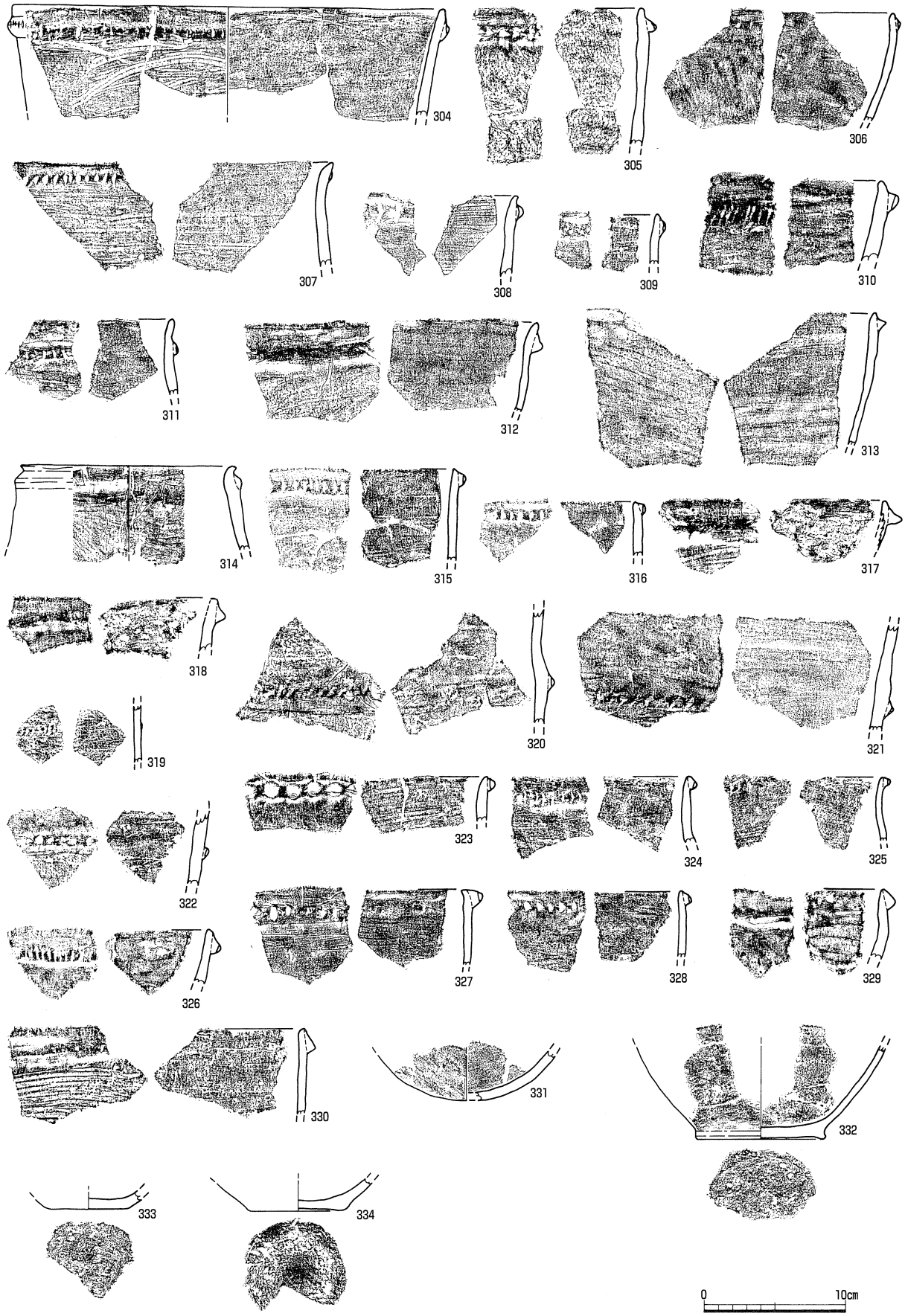
は体部が「く」の字形に屈折する。368・369は波状口縁のもので、晩期後葉のものと思われる。370～372は浅鉢底部で、370は平底、371・372は凹底であるが、372は体部の立ち上がりが緩やかで、丸底に近いものである。373は注口土器である。



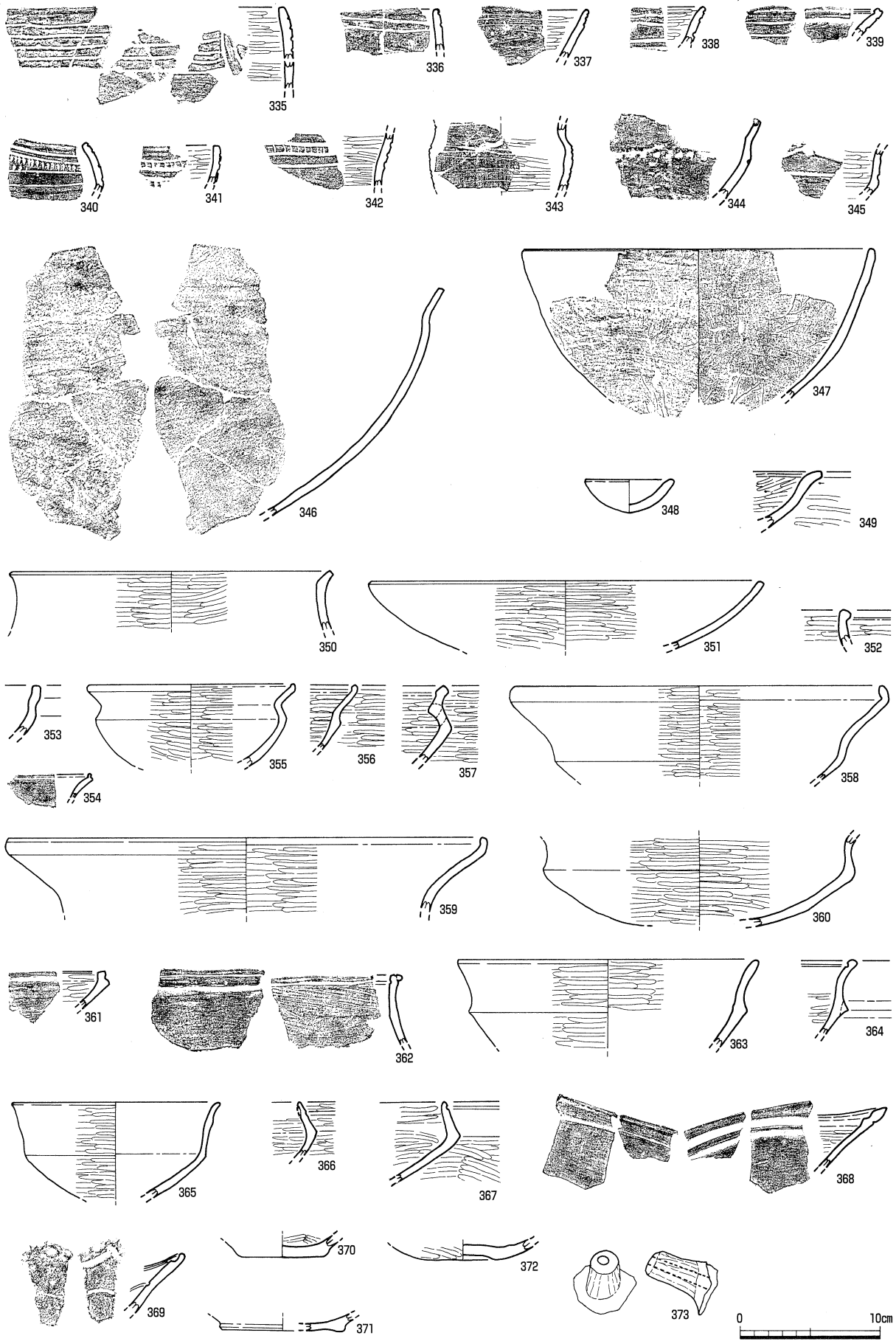
第40図　１～３区表土～黒色砂１出土縄文土器（１）（247～267：Ｓ＝1/4、268～273：Ｓ＝1/6）



第41図　1～3区表土～黒色砂1出土縄文土器（2）（S＝1/4）



第42図　1～3区表土～黒色砂1出土縄文土器（3）（S＝1/4）



第43図　1～3区表土～黒色砂1出土縄文土器（4）（S＝1/4）

２　弥生時代～古墳時代初頭の遺構・遺物

（１）竪穴住居跡・建物跡

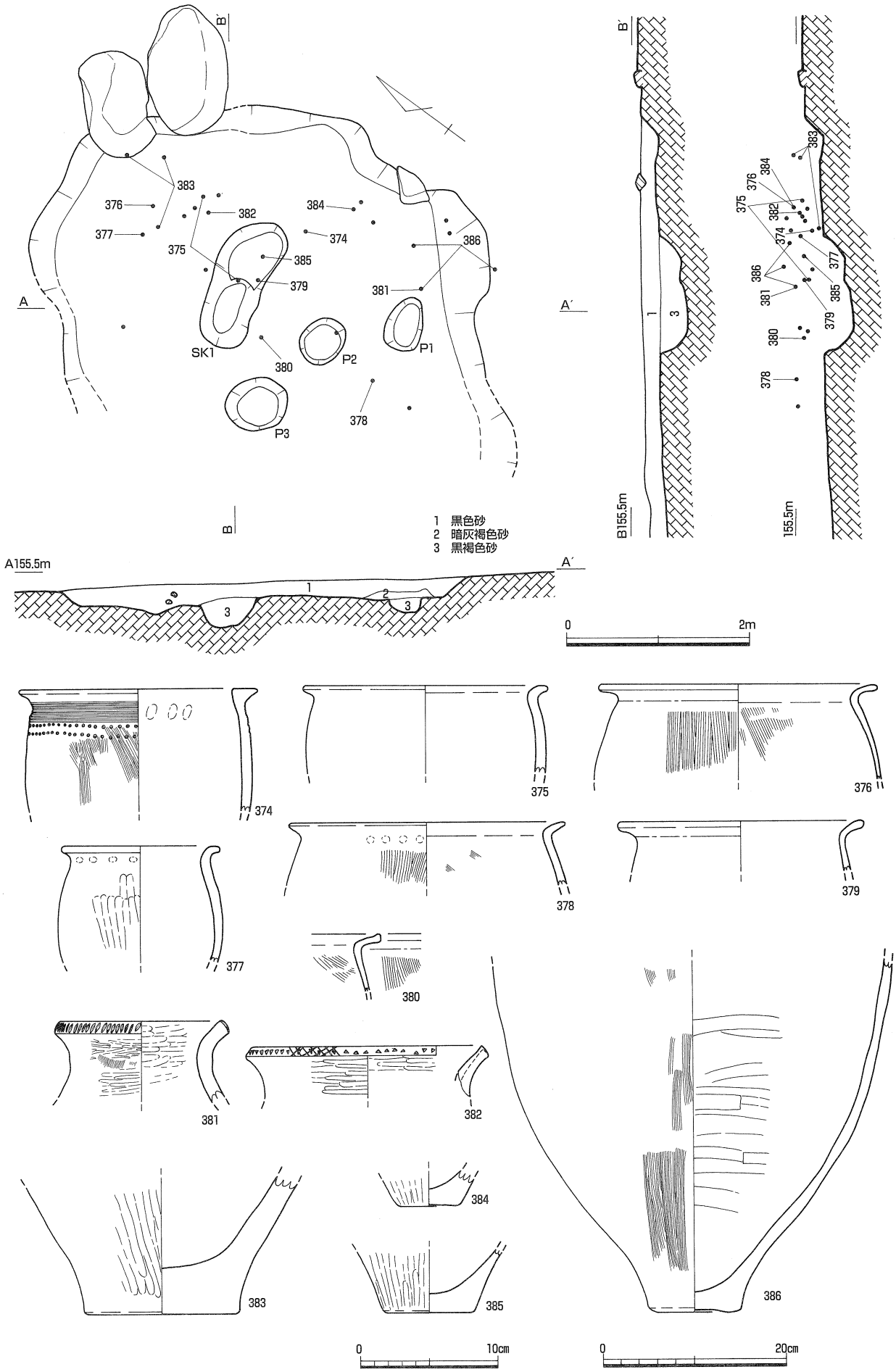
１～３区では、黒色砂１から黄色砂上面にかけて13棟の竪穴住居跡・建物跡が検出された。各遺構の形態と計測値ついては表５・６にまとめた。

SI01（第44図）　M37に位置し、黒色砂１を掘削中に検出した。検出時の状況は以下のとおりである。まず、黒色砂１を掘削していたところ遺物がまとまって出土する部分があり、精査したところ周囲に比べて黒みの強い砂の範囲が認められた。サブトレンチで土層を確認したところ、掘り込みは浅いものの竪穴が確認されたため、竪穴住居跡として調査することとした。西側では全体的に黒色砂１の黒みが強くなっていたため竪穴の掘り込みは認識できなかったが、東側で検出された部分から考えると隅丸方形の竪穴住居跡であったと考えられる。床面の標高は155.25mで、竪穴の深さは現状で0.2mである。ただし、竪穴の東壁側に基盤層に含まれる大形の石があるが、建物を構築する際にはこのような石が露出していると不都合であったと考えられ、本来はこの石が隠れるくらいの高さから竪穴が掘り込まれていたのではないかと思われる。この場合、竪穴の掘り込みは0.5m以上であったと推測される。建物内ではＰ１～３、SK１が検出されたが、これらのうちどれが主柱穴となるのか判断は難しい。Ｐ２・３は床面まで掘り下げた段階では検出できず、黄色砂１上面まで下げた段階で確認できた。

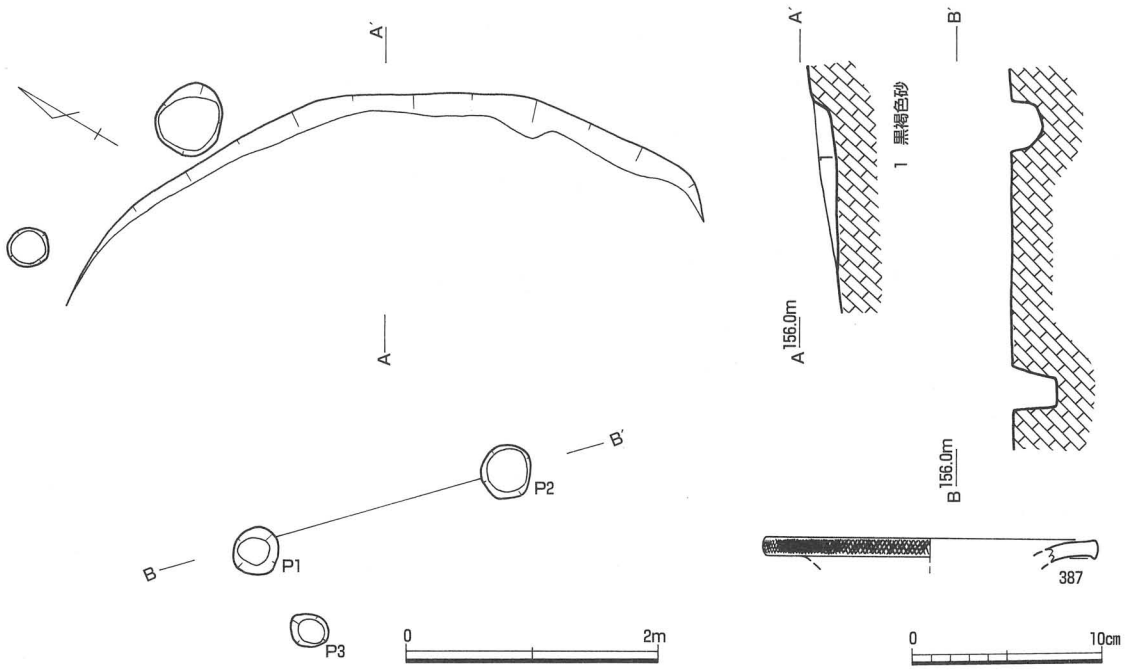
374～386は覆土中から出土した弥生土器である。374は口縁部の断面が三角形の甕で、胴上部は櫛描直線文と先端が円形の二又に分かれた工具による刺突文が施されている。375～380は無文の甕である。375・377は口縁部が体部から緩やかに屈曲し短く外反するのに対し、376・380は口縁部が体部から鋭く屈曲し、長くのびている。378・379は前者と比較して口縁部は長くのびるが、ややシャープさに欠けたつくりに見える。374・375・377はⅡ様式、376・380はⅢ様式、378・379はⅡ～Ⅲ様式に位置づけられよう。381・382はⅡ様式の壷で、381は口縁端面に刻目、382は三角形の刺突や斜格子文が施される。383～386は底部で、383・386は厚手で大きなものであることからⅡ様式まで遡るものと思われる。383には表面が鋭くはがれたような割れが見られることから、焼成時破損土器の可能性が考えられる。これらの遺物からSI01は弥生時代中期前葉～中葉の竪穴住居跡と考えられる。

SI02（第45図）　K38・39の黄色砂１上面で検出された円形の竪穴住居跡である。竪穴は東側のみで検出され、深さは0.15mであるが、本来の竪穴は黒色砂１から掘り込まれていたため発掘時に掘り方の西側は認識できなかったのではないかと思われる。建物内ではＰ１～３が検出されたが、位置関係からＰ１・２が主柱穴になると考えられる。検出された竪穴や主柱穴から本来の床面径は６ｍ前後であったと推測される。387は床面付近から出土した弥生土器の壷で、口縁部が大きく外反して開き、端面に斜格子文をもつものである。Ⅲ-１様式のものと思われる。この遺物から中期中葉の竪穴住居跡と考えられる。

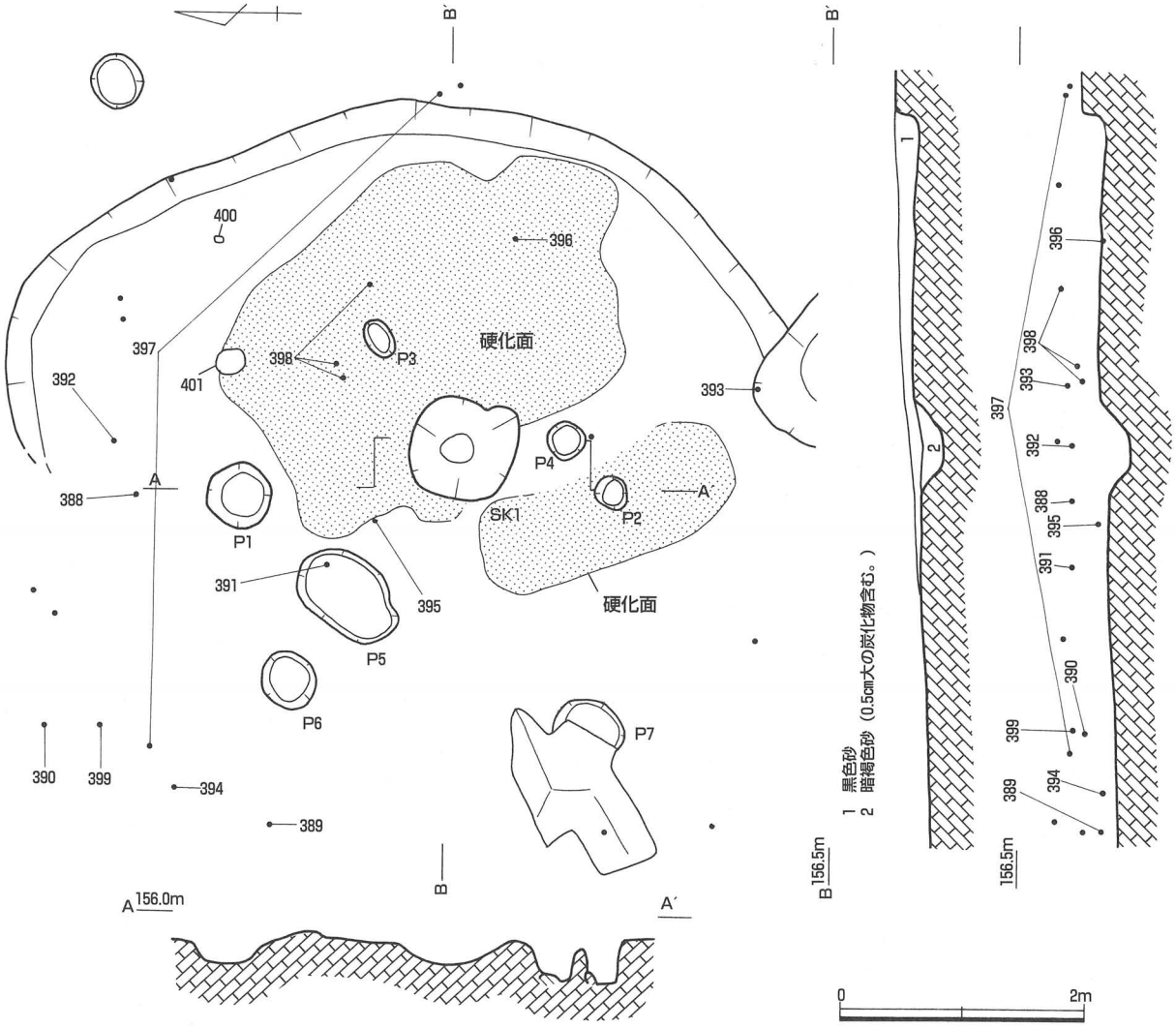
SI03（第46・47図）　Ｉ39・J39の黄色砂１上面で検出された竪穴住居跡で、平面形は円形もしくは多角形であったと思われる。竪穴は東側半分のみ検出され、深さは0.17mであるが、本来の竪穴は黒色砂１から掘り込まれていたため発掘時には認識できなかったのではないかと思われる。建物内ではＰ１～７、SK１が検出されたが、これらのうちＰ１・２が主柱穴、SK１が中央土坑になると考えられる。SK１は、覆土中に0.5㎝大の炭化物粒を多く含んでいたことから、炉跡であった可能



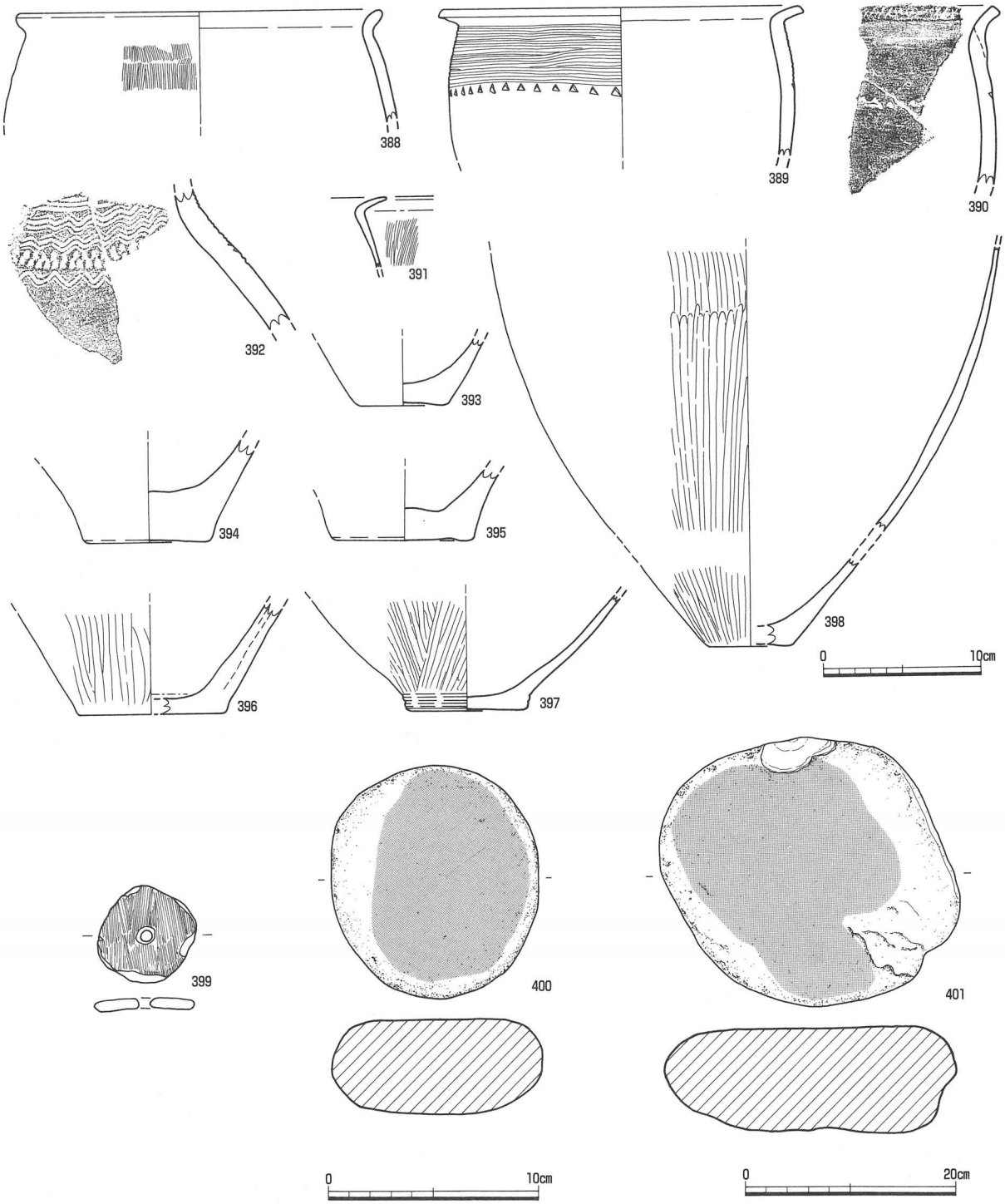
第44図　SI01（S＝1/60）、出土遺物（374～385：S＝1/4、386：S＝1/6）



第45図　SI02（S＝1/60）、出土遺物（S＝1/4）



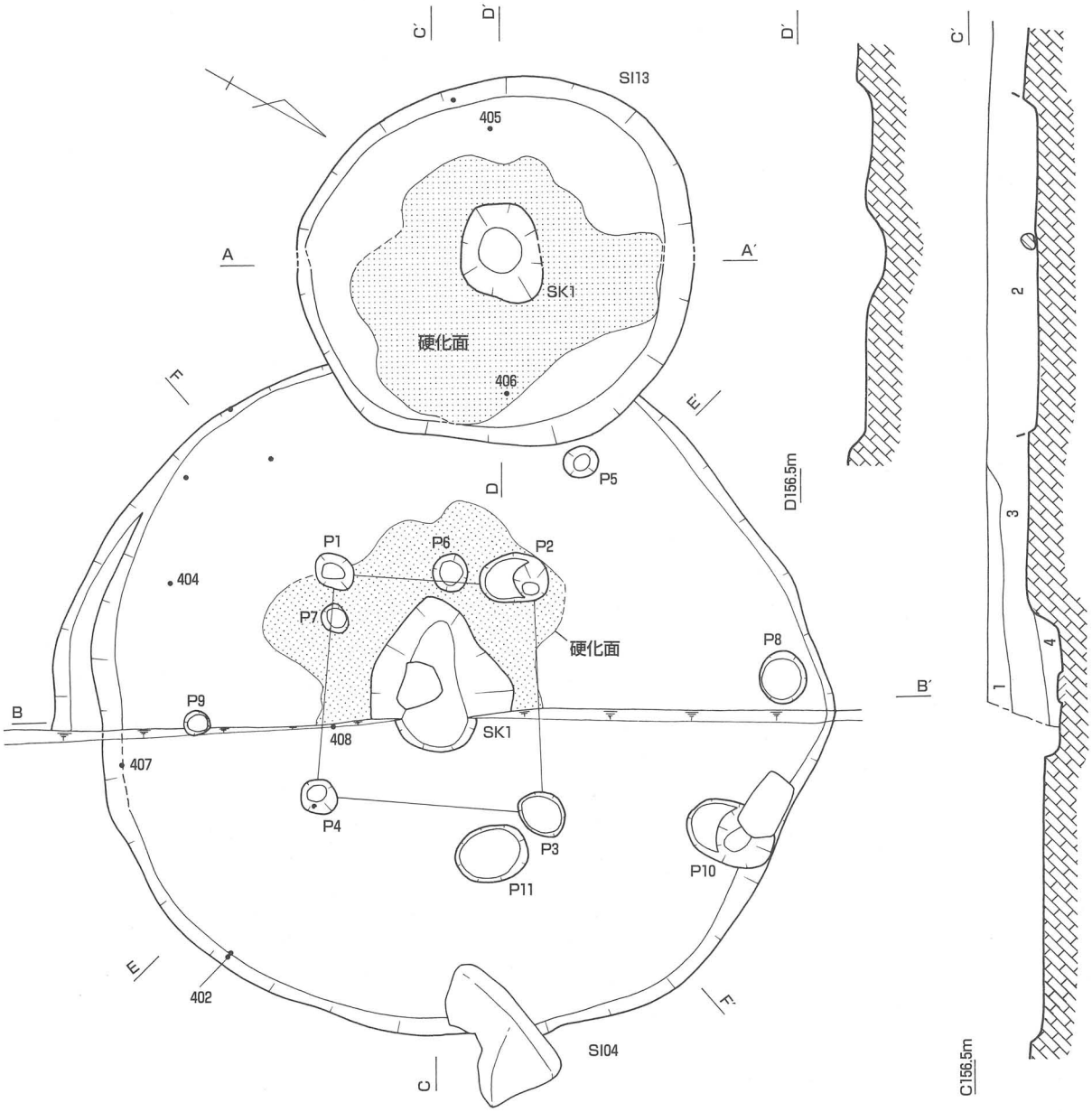
第46図　SI03（S＝1/60）

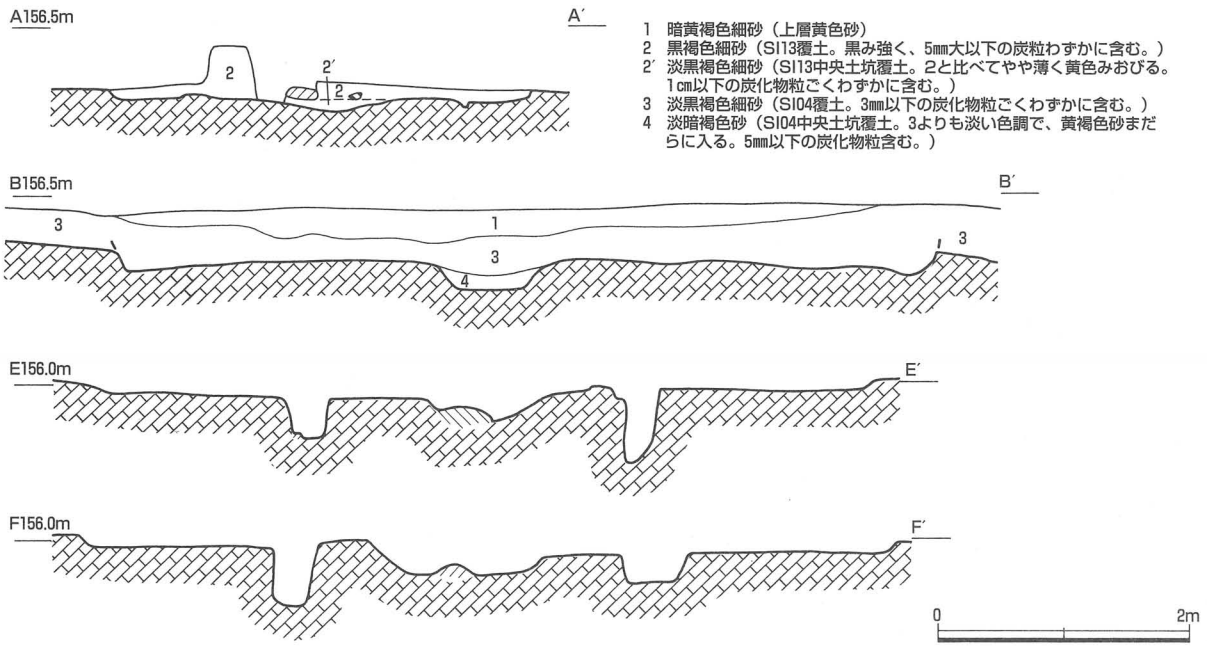


第47図　SI03出土遺物（388～398：S＝1/4、399～400：S＝1/3、401：S＝1/6）

性もある。SK１の東側と南側では固くしまった面が広がっており、この部分で人が活動する頻度が高かったため、床面が固く踏みしめられたと推測される。

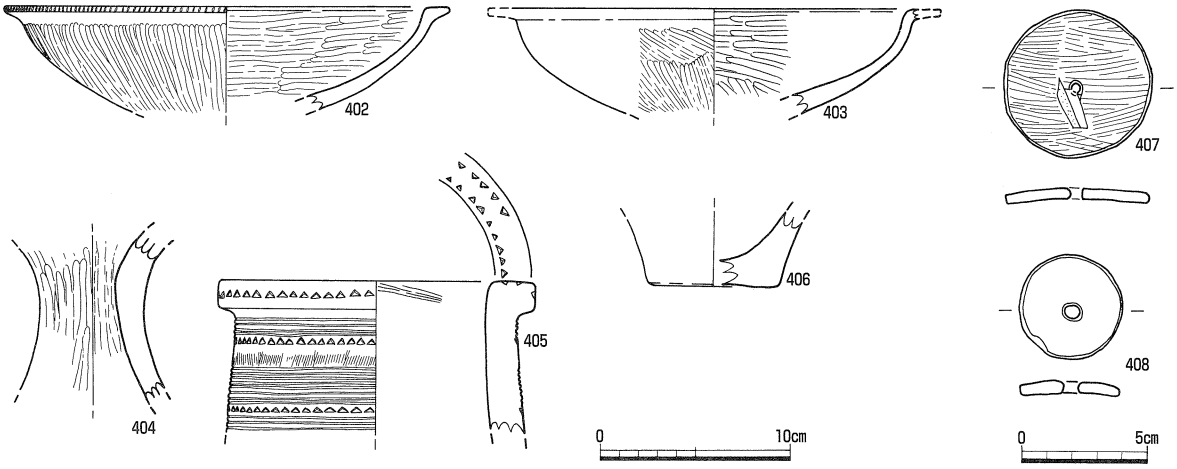
388～401はSI03から出土した遺物で、このうち389・394～396・400・401は床面、もしくは床面に近いレベルから出土したものである。388～390はⅡ様式の甕、391はⅢ様式の甕である。389は胴上部に櫛描直線文、三角形の刺突が施され、390は口縁端部に斜格子文、胴部に三角形の刺突が入る。392はⅡ様式の壷で、肩部に櫛描直線文、櫛描波状文、三角形の刺突文が施される。393～398は弥生土器の底部で、394・395は厚手で大きめのものであることからⅡ様式まで遡るものと思われる。397は凹線文が入るものでⅣ様式のものであろう。399は土器片を転用して作られた土製円盤で、中央は穿孔されている。400は磨石、401は石皿である。床面や床面付近のレベルで出土した遺物か





1　暗黄褐色細砂（上層黄色砂）
2　黒褐色細砂（SI13覆土。黒み強く、5mm大以下の炭粒わずかに含む。）
2′　淡黒褐色細砂（SI13中央土坑覆土。2と比べてやや薄く黄色みおびる。1cm以下の炭化物粒ごくわずかに含む。）
3　淡黒褐色細砂（SI04覆土。3mm以下の炭化物粒ごくわずかに含む。）
4　淡暗褐色砂（SI04中央土坑覆土。3よりも淡い色調で、黄褐色砂まだらに入る。5mm以下の炭化物粒含む。）

第48図　SI04・13（S＝1/60）



第49図　SI04・13出土遺物（402～406：S＝1/4、407・408：S＝1/3）
402～404・407・408はSI04、405・406はSI13より出土

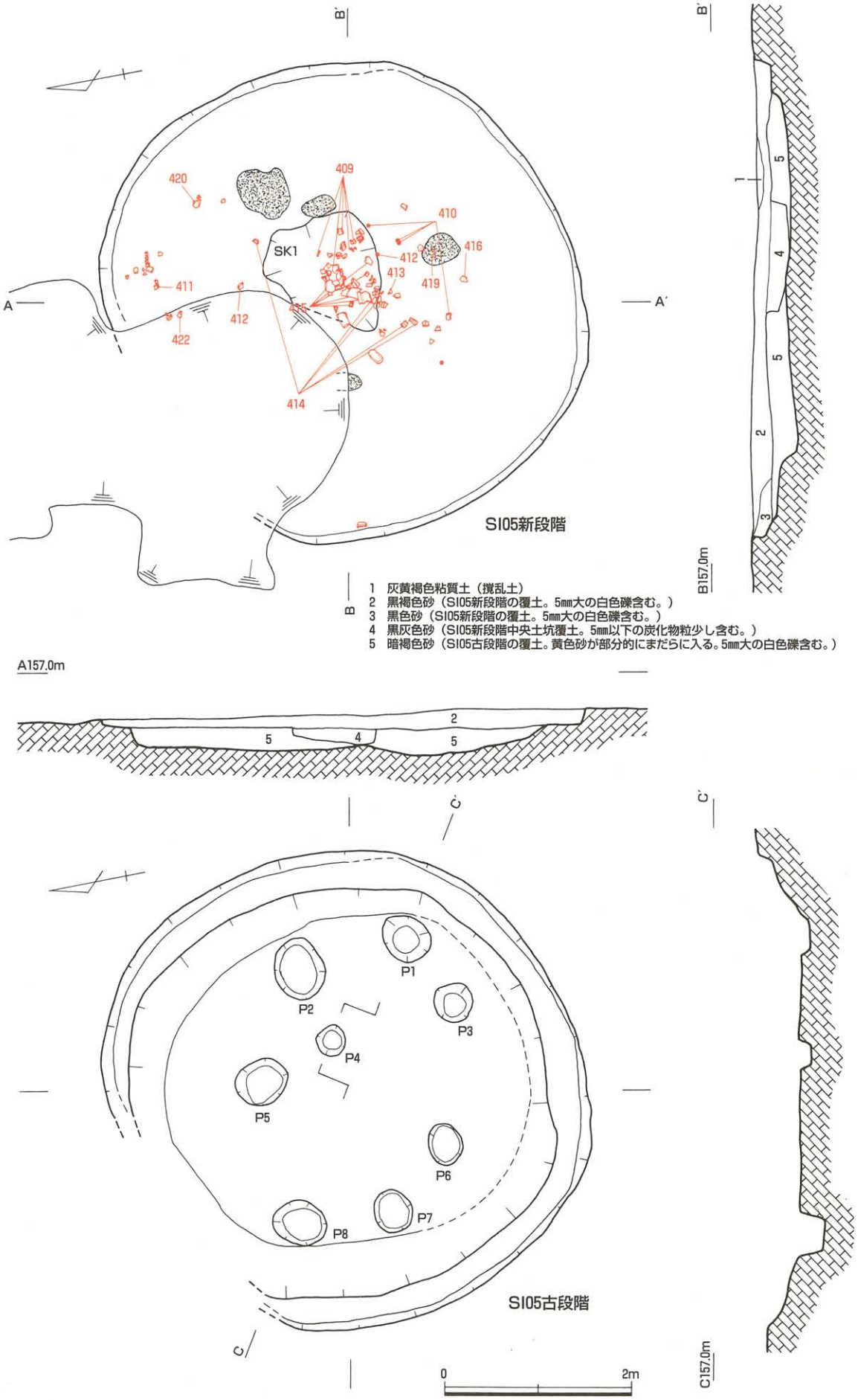
ら、この遺構は中期前葉のもの考えられる。

SI04・13（第48・49図）　SI04はH39の黄色砂１上面で検出された円形の竪穴住居跡である。検出された竪穴の深さは0.14mであるが、第48図B－B′断面では上層黄色砂に相当する１層が凸レンズ状に落ち込んでいることから、本来の竪穴は黒色砂１から掘り込まれ、深さも現状より大きかったことが分かる。建物内ではP１～10、SK１が検出されたが、これらのうちP１～４が主柱穴、SK１が中央土坑になると考えられる。SK１は、覆土中に0.5cm大の炭化物粒を含んでいたことから、炉跡であった可能性もある。SK１の西側では固くしまった面がひろがっており、この部分で人が活動する頻度が高かったため、床面が固く踏みしめられたと推測される。SI04の覆土中から402～404、407・408が出土している。402・403は高坏の坏部である。402は水平口縁のもので、端部に刺突が施される。403は口縁部を欠くが、402と同様に水平口縁のものであったと思われる。404は高坏の脚部である。407・408土器片を転用した土製円盤で、中心は穿孔されており、周囲は削られてきれいに整形されている。402・403からSI04は弥生時代中期中葉の竪穴住居跡と考えられる。

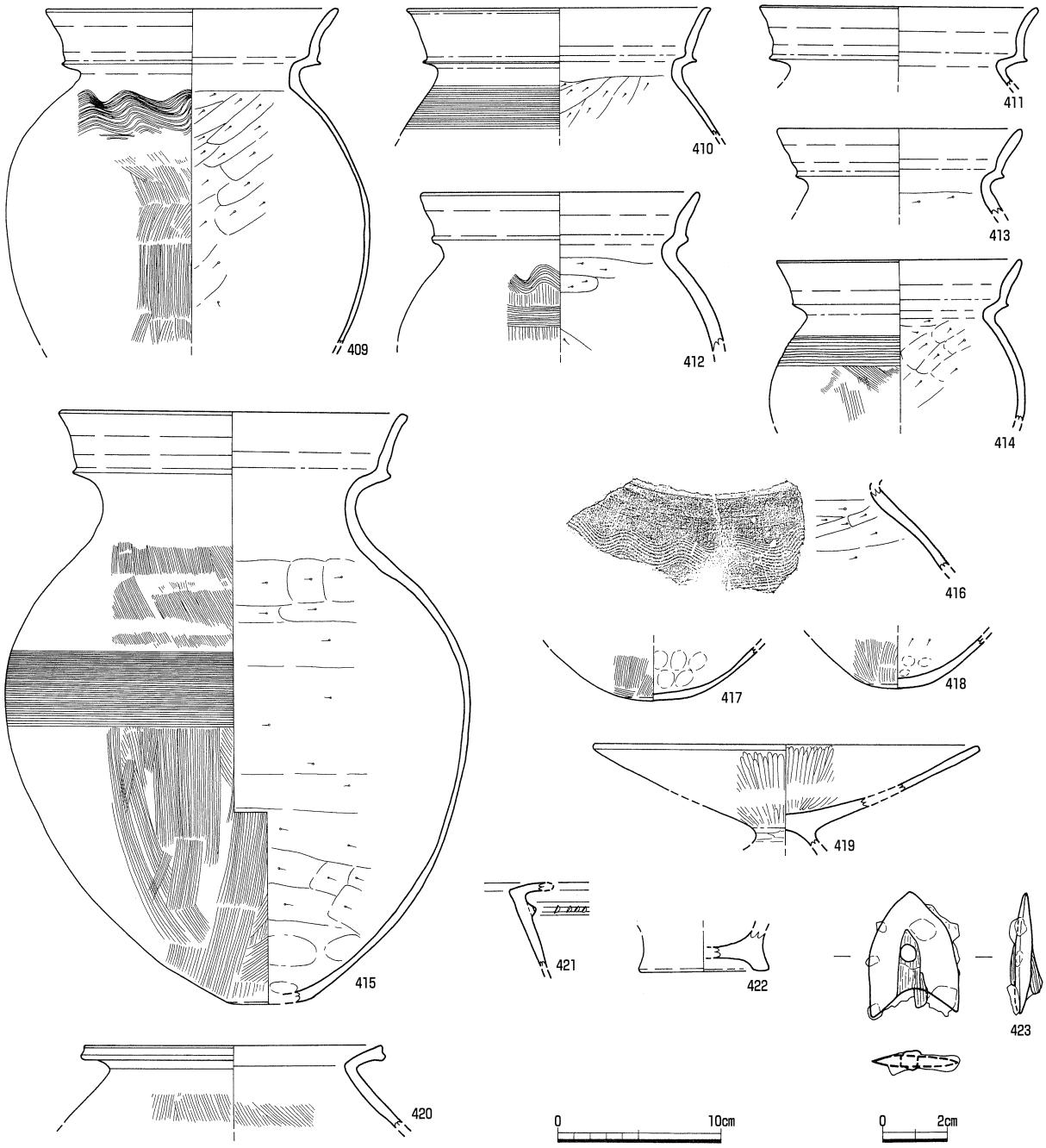
SI13はSI04の西側を切ってつくられた小型で円形の竪穴建物跡である。建物内で検出された遺構は中央土坑となるSK１のみで、柱穴などは確認できなかった。SK１の周辺では固くしまった面が認められ、北側と東側では竪穴の立ち上がりまで広がっている。覆土中から弥生土器片が出土している。405はⅡ様式の壷で、頸部が直立し、そこから口縁部がＬ字状に折れる器形である。口縁部上面や外面に三角形の刺突、頸部に半截竹管による多条の直線文、三角形の刺突が施されている。406は厚手の底部片で、内面に焦げが付着しており、Ⅱ様式の甕と思われる。これらは遺構内に混入したもので、この遺構の時期を示すものではない。SI13は切り合い関係からSI04よりも新しいと考えられるが、その時期を明確に特定することはできない。

SI05（第50・51図）　E41・42の黒色砂１で検出された竪穴住居跡である。覆土中に５mm大の小礫が多く含まれていたことから黒色砂１との違いが認識できた。住居の造り直しがされており、新旧２段階に分けられる。古段階は竪穴の上面径が約4.7mの円形のものである。床面ではＰ１～Ｐ８を検出したが、これらは掘り込みが浅く、覆土も周囲の土と色調が大きく違わないものも含まれており、明らかに柱穴になりそうなものは認められなかった。

新段階は上面径が約5.3mの円形で、古段階の竪穴の下半分を埋め戻しつつ、掘り方を古段階の



第50図　SI05（S＝1/60）



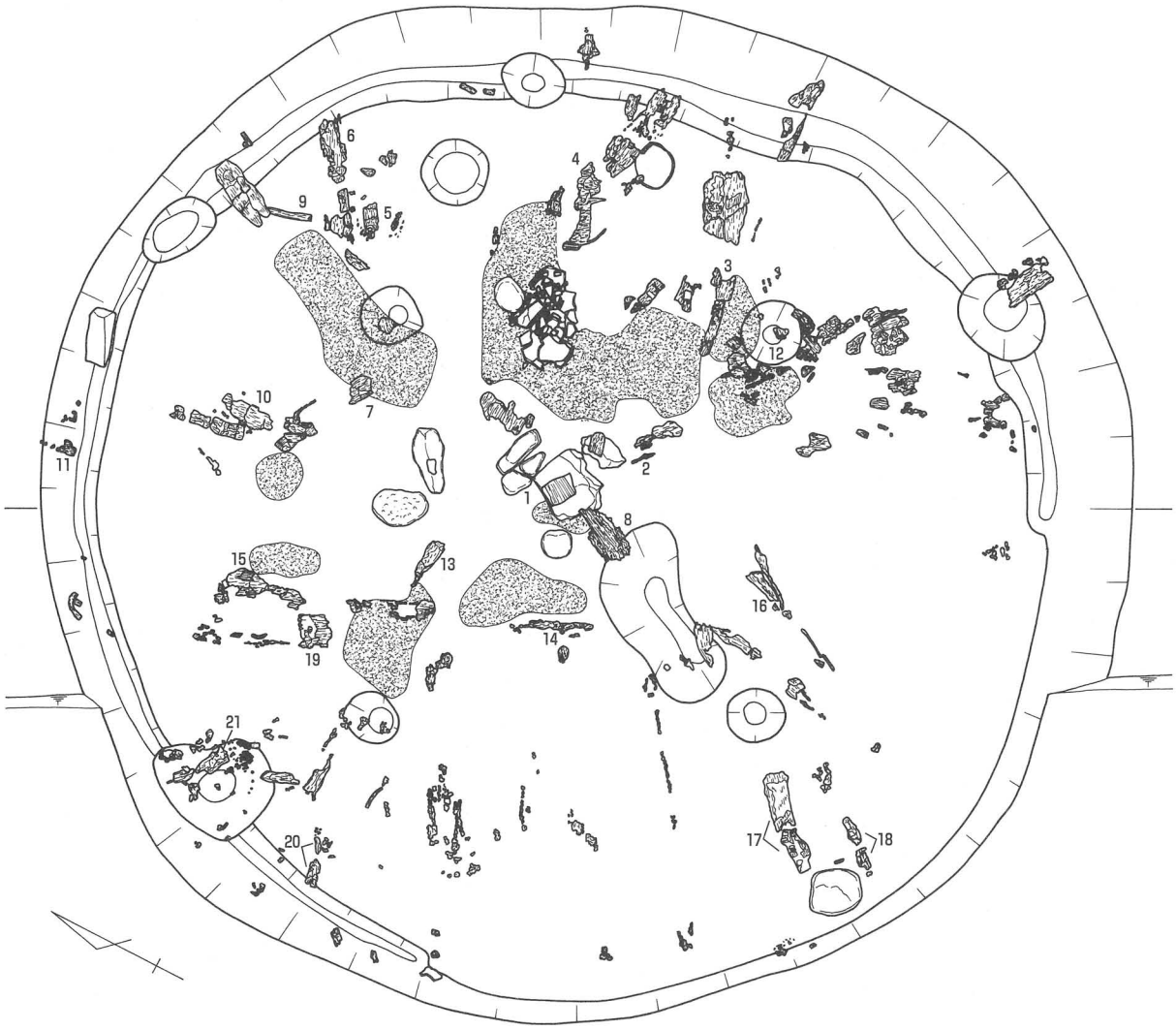
第51図　SI05出土遺物（409～422：S＝1/4、423：S＝1/2）

ものよりも拡張してつくられたものである。床面では中央土坑となるSK１と焼土面が４か所検出されたが、柱穴は確認できなかった。ただし、これは柱穴がなかったためではなく、床面の土層が古段階の竪穴を埋め戻した暗褐色砂であったため、柱穴埋土との違いが認識できなかった可能性も考えられる。

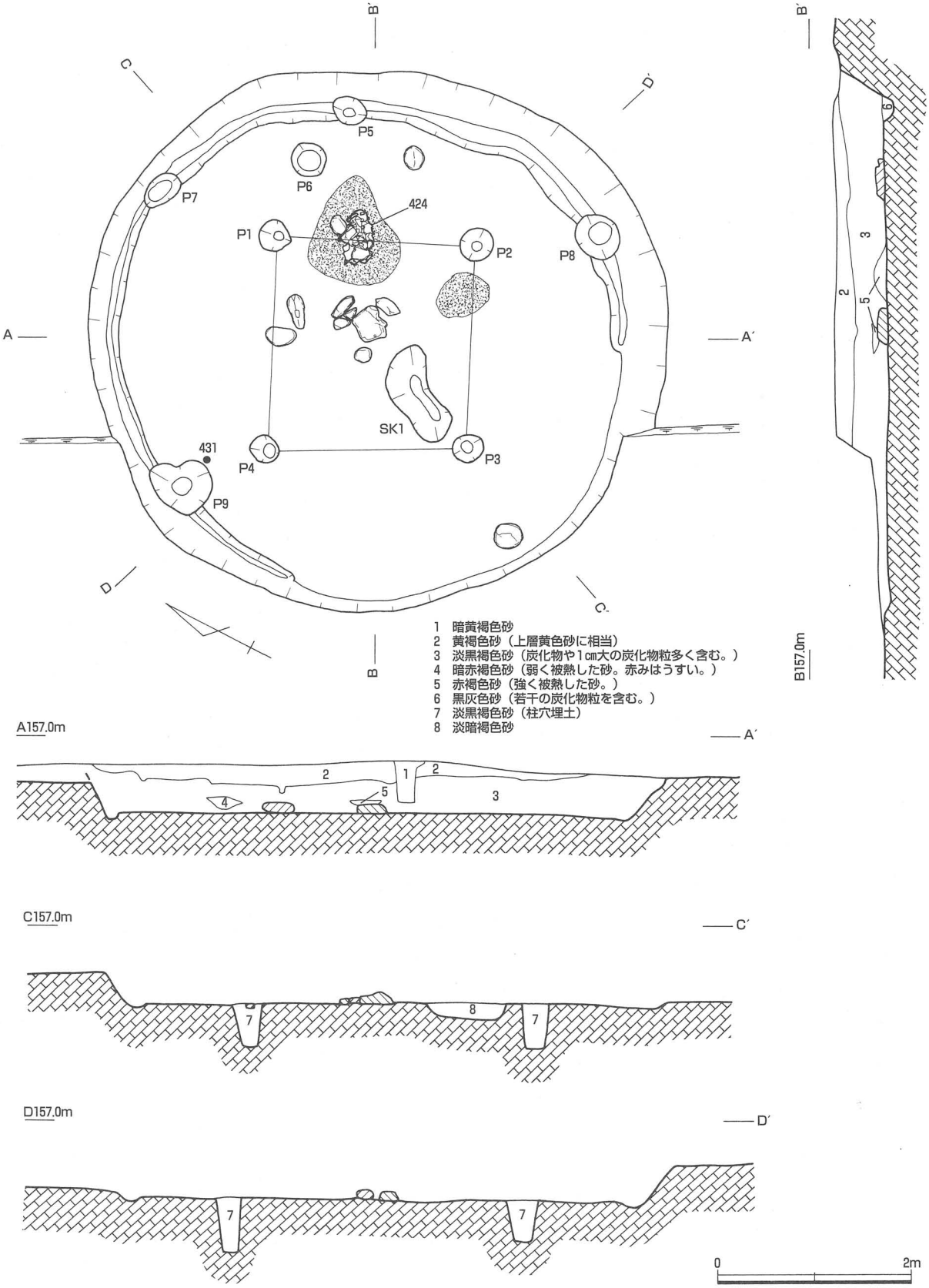
409～423は新段階の床面から覆土にかけて出土した遺物である。409～414・416・417・418は古式土師器の甕である。409・411～413は口縁部端部が丸く、410は口縁端部が肥厚しており、414は端部が面取りされている。肩部の文様は、409には波状文、410・414には直線文、412・416には波状文と直線文が巡る。417・418は底部片で、退化した平底のものである。415は古式土師器の壷で、SK１から出土した。口縁端部は面取りされている。419は古式土師器の低脚坏である。420・421は弥生土器の甕で、420は口縁端部に凹面をもち、421は肩部に刻目をもつ突帯が貼り付けられている。

422は弥生土器の底部で、上げ底になっている。420～422は弥生時代中期のものである。423は平面形が五角形で、Ｖ字状の腸抉が入る鉄鏃である。矢柄の木質や、矢柄を固定するための孔が観察される。出土した遺物からSI05新段階は古墳時代前期初頭のものと考えられる。

SI06（第52～54図）　G41に位置する円形の竪穴住居跡で、焼失住居である。発掘時の状況は以下のとおりである。まず、SI06の西側を黄色砂１上面まで掘り下げたところ、西側１／３のプランが確認でき、この時点で炭化材の一部も検出された。次に、黒色砂1上面でもプランが検出できないか東側を精査したところ、明確な平面プランは確認できなかったが、上層黄色砂に相当する層（第53図２層）が竪穴住居跡が存在すると想定される範囲にまだらに広がっていた。土層ベルトを残し



第52図　SI06炭化材検出状態（Ｓ＝1/40）



第53図　SI06（S＝1/60）

ながら面的に掘り下げ精査すると、竪穴住居跡の範囲は周囲と比べて黒みの強い土色となって検出された。土層断面を観察すると上層黄色砂に対応する砂層は凸レンズ状に落ち込んでいることから、竪穴が埋まりきらないうちに洪水などで一挙に堆積したものと推測される。

竪穴内部を掘り下げると、放射状に焼け落ちた炭化材や、被熱の弱い焼土が認められた。炭化材は竪穴内部の全体に見られたが、西側と比較して中央から東側に大きめの材が多く見られる。炭化材には本来の建築材としての形状が明確にわかるものはなかったが、細い垂木状のものや、板状に見えるもの、厚さが10cm以上ある比較的大きなもの、屋根材として用いられたと見られるカヤ状のものが確認された。なお、これらの炭化材の樹種鑑定についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。鑑定結果については第８章を参照されたい。炭化材の周りの焼土は被熱の弱い砂で、建物の被覆材とするには疑問が残る。火が消えきらないうちに流入した（あるいは埋められた）砂という可能性も考えられる。床面では、Ｐ１～９とSK１、壁体溝、焼土面が検出された。これらのうちＰ１～４が主柱穴となる。壁体溝は竪穴の南東から北西の下端で検出されたが、南西側には巡っていなかった。Ｐ５・７～９は壁体溝に重なって掘り込まれた柱穴である。Ｐ6・SK1についてはSI06に伴う遺構ではないかもしれない。焼土面は建物中央からやや東よりの２か所で検出されたが、これらは炉跡の可能性が考えられる。また、床面中央では長さ15cm～35cmの石がかたまった状態で検出されたが、これらも被熱しているようであり、炉として機能していたのかもしれない。

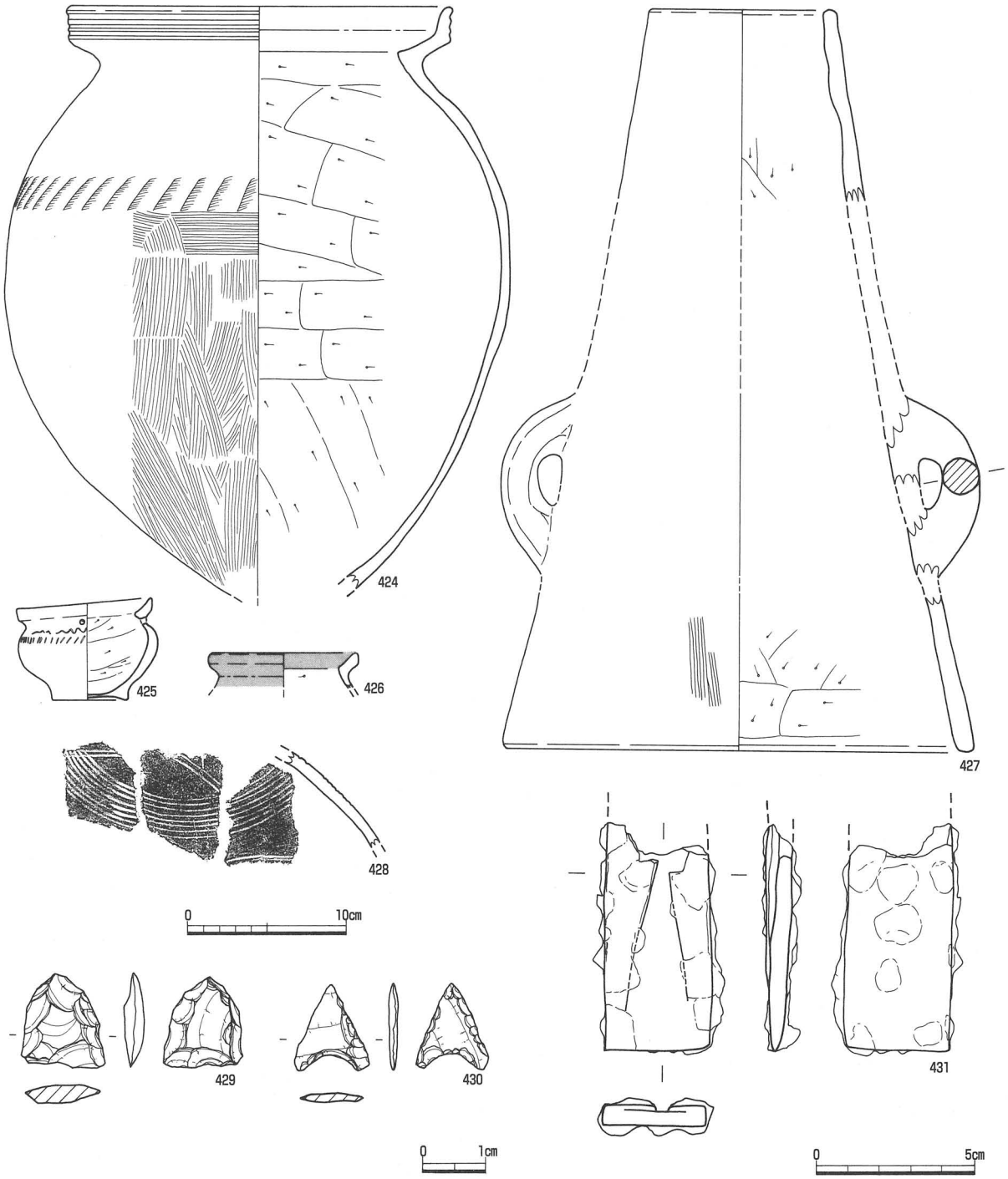
第54図はSI06から出土した遺物である。424は焼土面の上でつぶれた状態で出土した甕である。口縁部には3条の凹線が、胴部には櫛状工具による連続刺突が巡るもので、Ｖ－２様式のものと思われる。ほぼ完形に復元されたが、底部だけは欠損しており、底部を意図的に打ち欠いた状態で遺棄されたと考えられる。425～430は覆土中から出土したものである。425・426は小型の鉢で、425は頸部に穿孔されており、426は外面と口縁部内面が赤色塗彩されている。427は小型の甑形土器である。425～427はＶ－2様式の遺物と考えられる。428はヘラ描の直線文や重弧文が施されたもので、Ｉ様式の壺と思われる。429・430は石鏃で、SI06には直接伴わない混入品かもしれない。431は基部の欠損した袋状鉄斧で、床面から出土したものである。SI06は出土遺物から弥生時代後期中葉の遺構と考えられる。なお、SI06で出土した炭化材の放射性炭素年代測定を株式会社古環境研究所に委託した。測定結果については第７章を参照されたい。

SI07・08・09（第55～57図）　SI07～09は１区の南側に位置する竪穴住居跡で、３棟が列状に切り合ったかたちで確認された。SI08は南西側をSI07に切られ、北東側をSI09に切られることから、この３棟の中では最初に造られたものである。SI07とSI09の前後関係は切り合いからは明らかでない。

SI07はＥ41・42、Ｆ41・42の黄色砂１上面で検出された円形のものである。床面ではＰ１～６、SK１が検出されたが、配置からＰ１・２が主柱穴になると考えられる。このほか床面の中央とやや北西の２か所で焼土面が検出されている。

SI08はF41・42の黄色砂１上面で検出された円形のもので、南東側が舌状に張り出したかたちになっている。床面ではＰ１～10、SK１が検出された。ピットや土坑の配置・規模から、SK１が中央土坑で、Ｐ１～Ｐ5が主柱穴と考えられる。ただし、配置から見ればＰ６－Ｐ９の２つが主柱穴となるか、あるいは補助的な柱穴であった可能性も否定はできない。

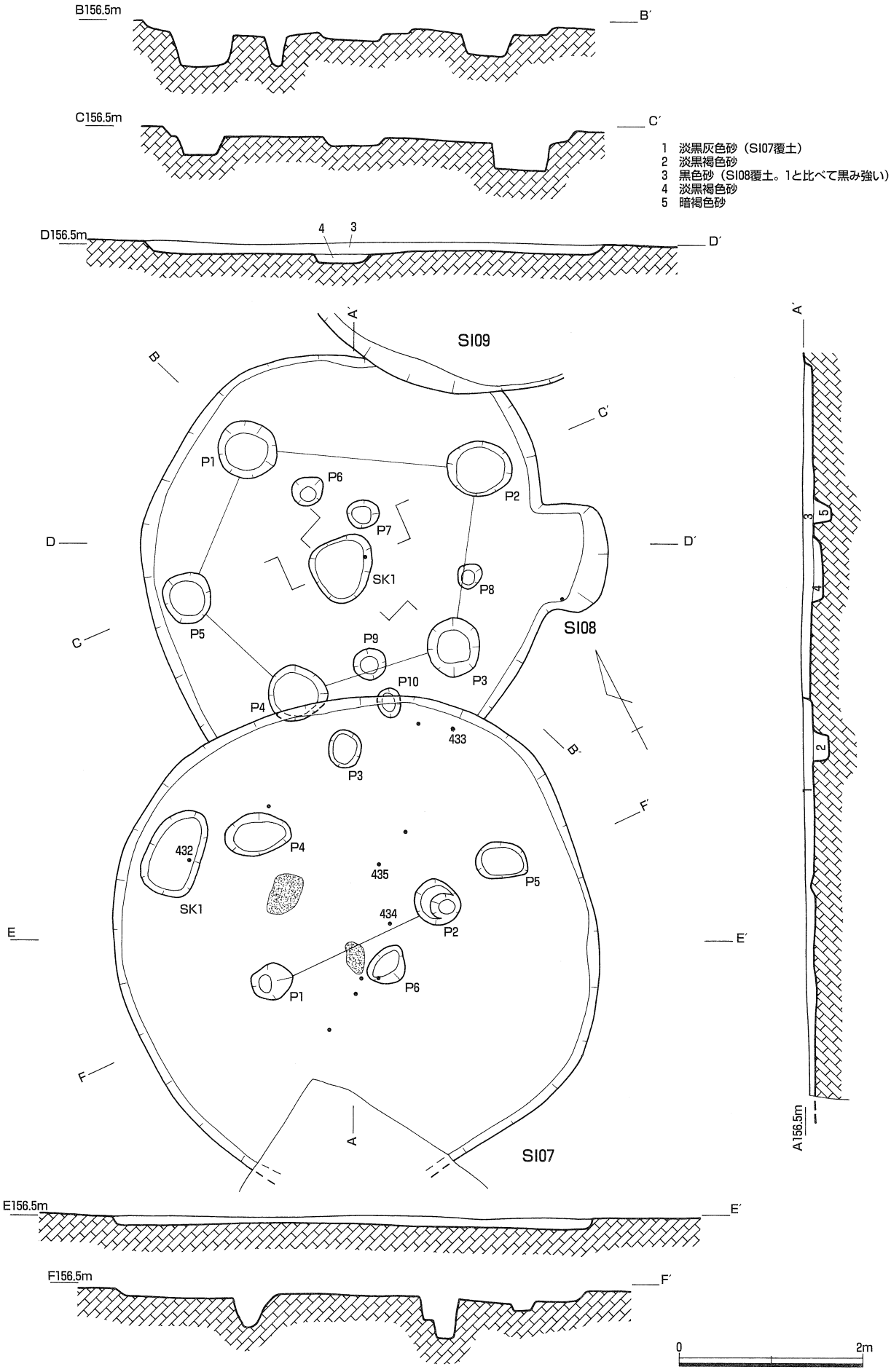
SI09はＦ42の黄色砂１上面で検出された、東西にやや長い楕円形のものである。竪穴内部ではＰ



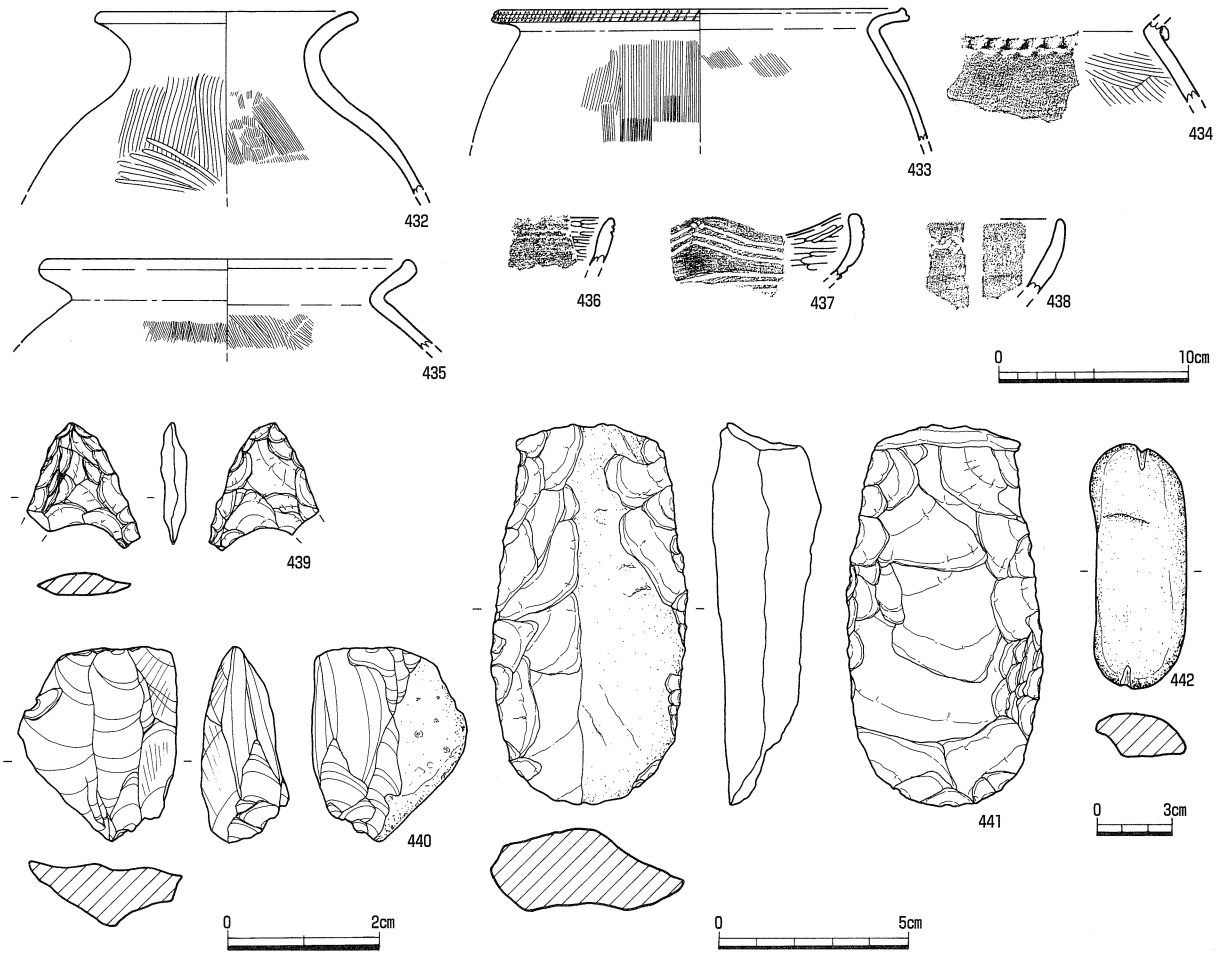
第54図　SI06出土遺物（424～428：S＝1/4、429・430：S＝1/1、431：S＝1/2）

1～3が検出されたが、配置から見てP1・2が主柱穴になると考えられる。床面の広い範囲で固く締まった面が認められた。

432～436、440～442はSI07の覆土中から出土した遺物である。432・435は弥生土器の壺で、432は口縁部が外反するもので、435は口縁部が短く、胴部は倒卵形になるものであろう。433・434は甕で、433は口縁端部に凹面をもち、刻目が施されるもの、434は頸部に刻目をもつ突帯が貼り付けられたものである。432・433・435はⅢ様式、434はⅢ－2～Ⅳ－1様式のものと思われる。436は権現山式古段階のもので、口縁部に刺突を伴う沈線が施されたものである。440は黒曜石製の楔形石器、441は打製石斧、442は両端に切れ目が入れられた石錘である。432～435からSI07は弥生時代中期中葉の遺構と考えられる。



第55図　SI07・08（S＝1/60）

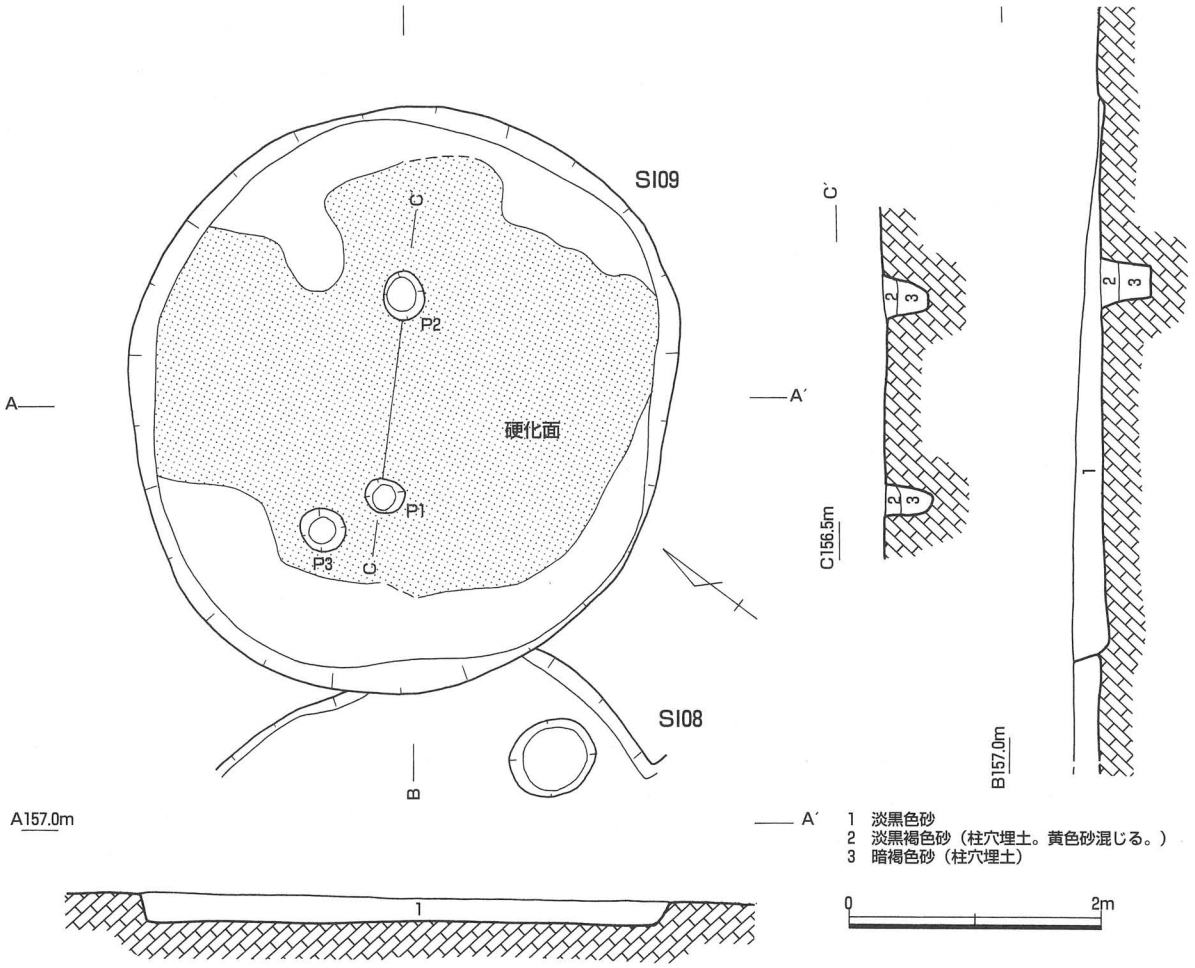


第56図　SI07・08出土遺物（432～438：S＝1/4、439・440：S＝1/1、441：S＝1/2、442：S＝1/3）
432～436、440～442はSI07、437～439はSI08から出土

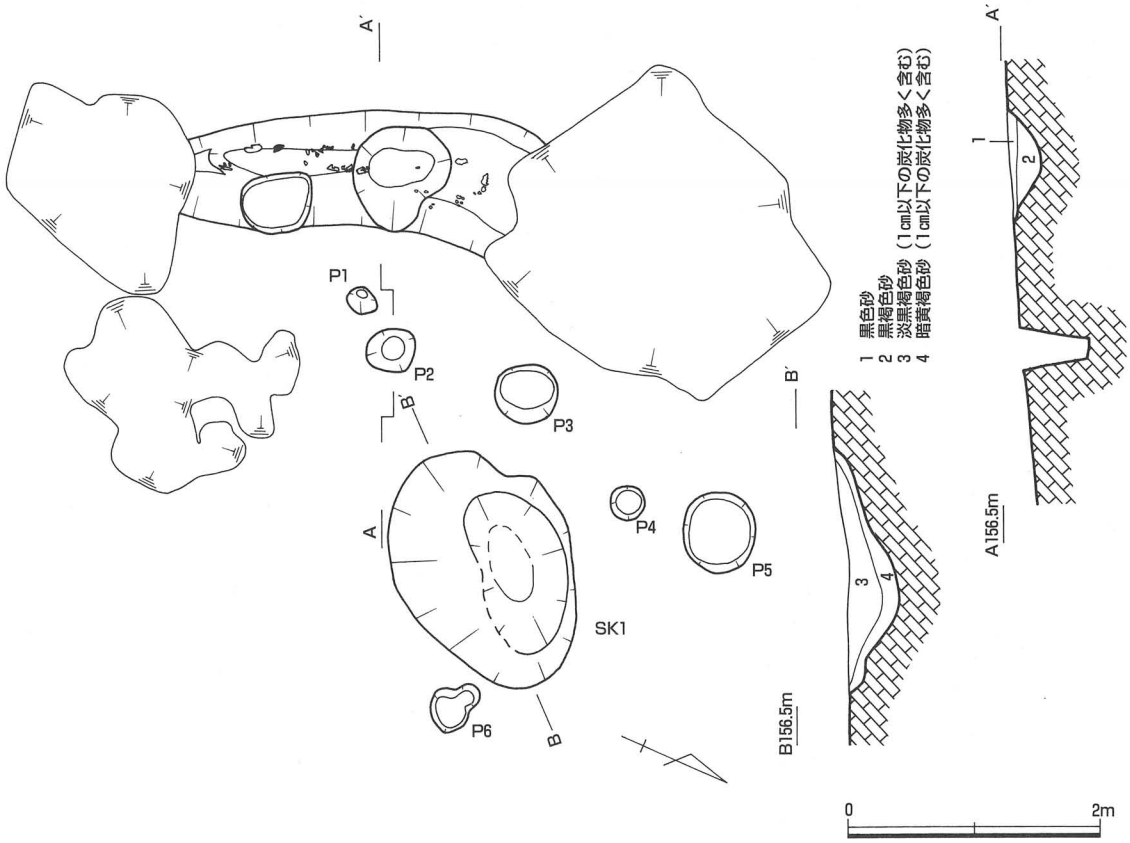
437～439はSI08から出土した遺物である。437は沖丈式、438は権現山式古段階の深鉢で、439は安山岩製の凹基式石鏃だが、いずれも混入品であろう。このほかに図示しなかったが、弥生時代中期のものと思われる土器片が出土していることから、SI08は弥生時代中期の遺構と考えられる。

SI09は、小片のため図示していないが弥生時代中期の土器片が出土しており、弥生時代中期以降に位置づけられよう。

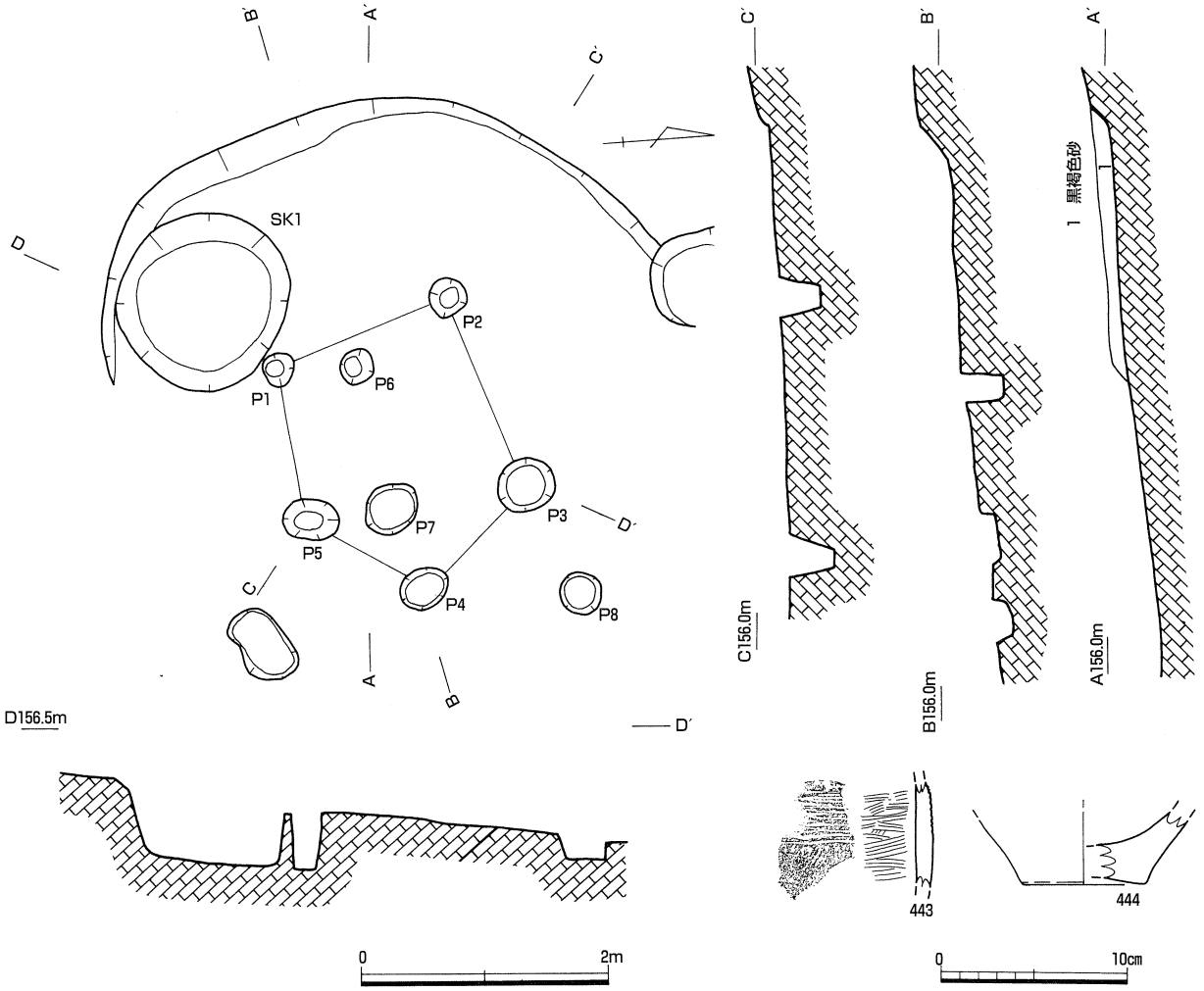
SI10（第58図）　H41・42の黄色砂１上面で検出された竪穴住居跡である。東側は削平を受け、さらに周辺が撹乱を受けていたため、西側の壁体溝の一部しか残存していなかった。壁体溝の平面形はやや弧状になっており、溝内にピット状に落ち込んだ部分が見られる。SI06のようにピットを伴う壁体溝だったのかもしれない。内部には10cm大の炭化材が散在しており、焼失住居であった可能性も考えられる。建物内に収まりそうな部分で検出された遺構はSK1や、P１～６がある。SK1は長さ1.91m、幅1.41mの長楕円形の土坑で、覆土には1cm以下の炭化物を多く含んでいた。壁体溝との位置関係から中央土坑になる可能性が考えられる。建物柱穴についてはどのピットが相当するのか判断できない。遺物は、壁体溝の覆土中から弥生土器の小片が出土しているが、時期を特定することはできない。なお、壁体溝で出土した炭化材について放射性炭素年代を委託したところ、補正14C年代はBP1470±40という結果が得られた（第７章参照）。



第57図　SI09（S＝1/60）



第58図　SI10（S＝1/60）

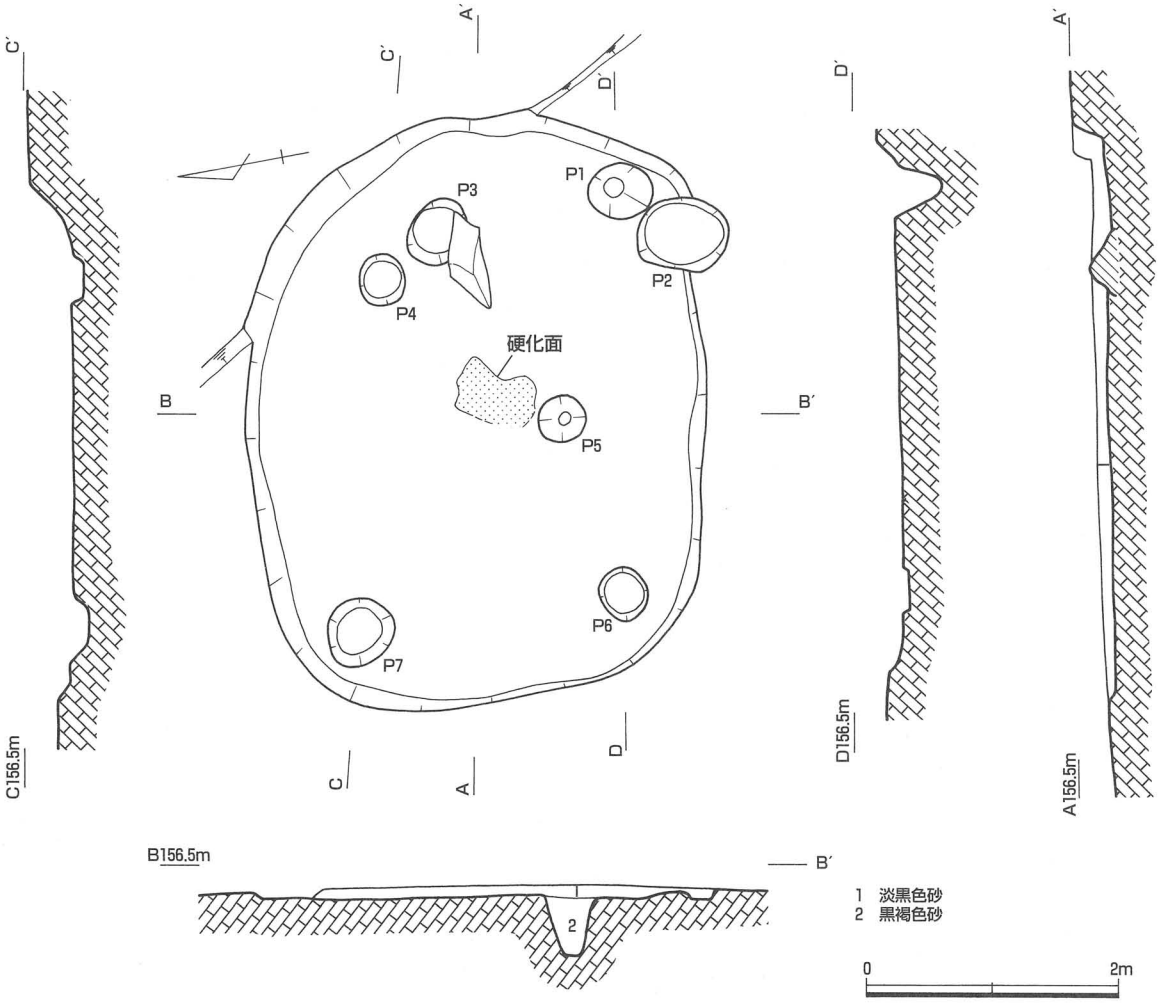


第59図　SI11（S＝1/60）、出土遺物（S＝1/4）

SI11（第59図）　F42・43、G42・43の黄色砂１上面で検出された円形の竪穴住居跡である。竪穴は、東側が流失しており、西側のみ残存している。想定される床面径は約4.6mである。建物内と想定される範囲ではP１～P９、SK1が検出された。ピットの配置からP１～5が主柱穴となる5本柱の建物であったと推測したが、P１－P３、あるいはP６－P７、P２－P５、P2－P7を主柱穴とする2本柱の建物であった可能性も考えられる。SK1は竪穴の南側壁面に接して設けられた、径1.4m、深さ0.6mの円形の土坑である。貯蔵穴などの機能が考えられる。

遺物は、覆土中やSK1から弥生時代中期の土器片が出土している。443は半截竹管により多条の沈線や刺突文が施されたⅡ様式の甕である。444は弥生土器の底部片である。これらからSI11は弥生時代中期前葉以降のものと考えられる。

SI12（第60図）　G40・41の黄色砂１上面で検出された竪穴住居跡で、東西4.62m、南北3.66mの隅丸長方形の平面プランになっている。床面ではP１～７が検出されたが、掘り込みの浅いものや、周囲の土と色調の大きく違わないものもあり、これらは建物の柱穴にはならないのではないかと思われる。床面中央では固くしまった面が見られるが、人が活動する頻度が高く、踏みしめられたことを示している。SI12では時期を特定できるような遺物は出土しておらず、その所属時期は不明である。



第60図　SI12（S＝1/60）

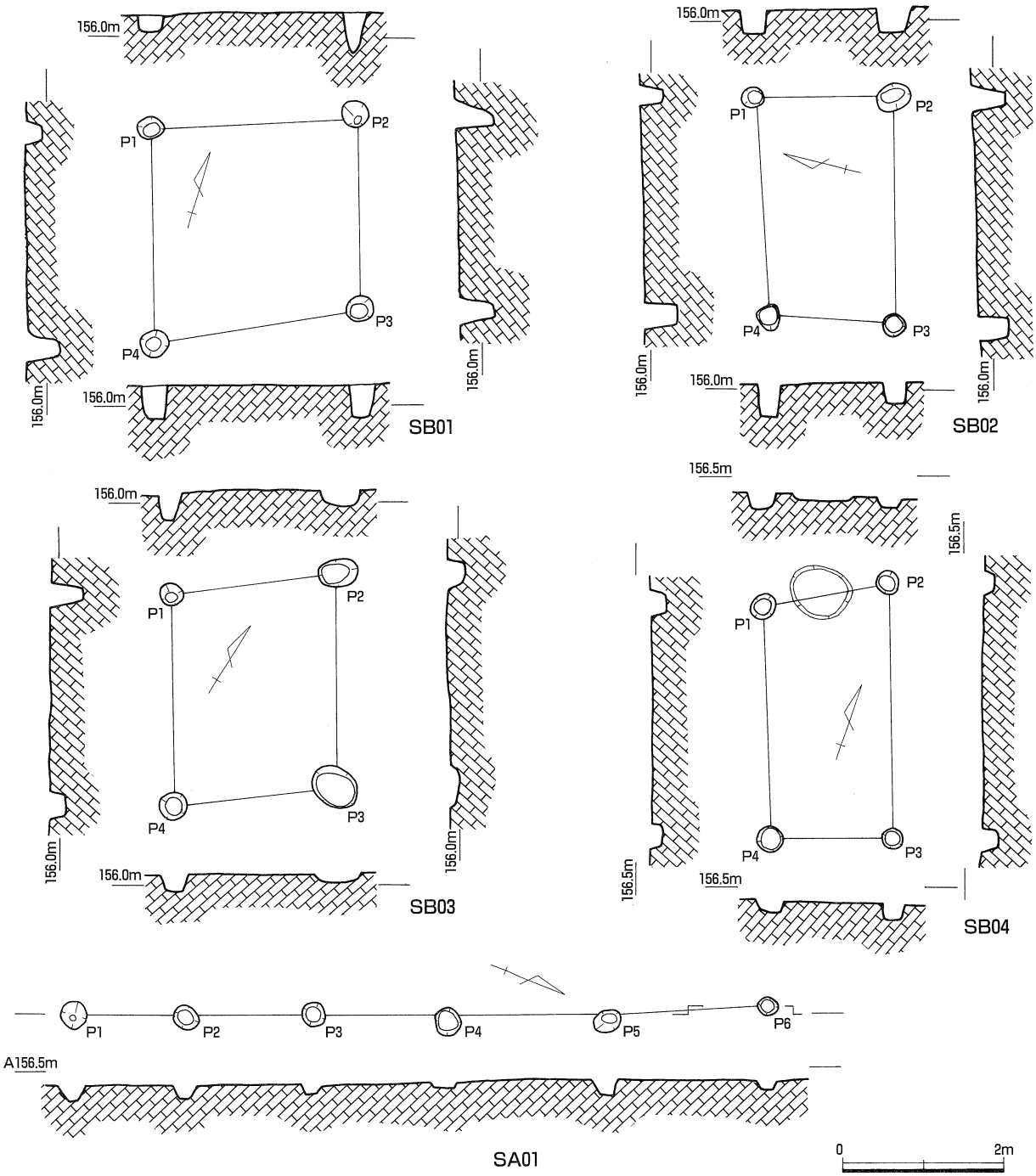
（２）掘立柱建物跡（第61図）

黄色砂１上面ではSB01～04の４棟の掘立柱建物跡を検出した。これらはいずれも1間×1間の簡易な構造のものである。形状、計測値について第６表にまとめている。

SB01はH40・41、Ｉ40・41に、SB02はＩ39･40、SB03はH40・Ｉ40に、SB04はＩ39・40に位置する。SB01は梁行きと桁行きがほぼ等しい方形で、SB03は桁行きがやや長い長方形、SB02・04は桁行きの長さが梁行きの長さに対して1.6以上の長い長方形のものである。主軸方向は、SB01とSB04がN22°Wと同じで、これらと若干ずれるもののSB03もN34°Wで北西－南東方向に主軸をとる。これに対し、SB02はN78°Eでほぼ東西方向の主軸になっている。これらの遺構に伴う遺物は、SB02－P4から出土した弥生時代中期前葉の甕胴部小片1点のみで、遺構の時期を特定することはできないが、柱穴の埋土が他の縄文時代から古墳時代初頭の遺構と類似していることや、建物の構造、竪穴住居跡との位置関係から弥生時代～古墳時代初頭のものである可能性が考えられる。

（３）柵列跡（第61図）

SA01はSI06の東側に位置し、N21°W方向へ直線的にのびている。Ｐ１～Ｐ６の６基の柱穴からなり、全体の長さは8.7mになる。柱間距離はＰ１－Ｐ２が1.4m、Ｐ２－Ｐ３が1.6m、Ｐ３－Ｐ４が1.7m、Ｐ４－Ｐ５、Ｐ５－Ｐ６が２mと、北側の方が広くなっており、一連の遺構とするべき



第61図　SB01～04、SA01（S＝1/80）

か疑問もあるが、ピットが直線的に並んでいることから、ここでは柵列跡として報告することとした。時期は不明だが、柱穴の埋土は他の縄文時代から古墳時代初頭の遺構と類似している。位置関係からSI06に付属する施設と考えることもできよう。

（3）加工段（第62図）

加工段1はD43・44、E43・44の黄色砂1上面で検出されたが、東側の調査区外にも広がるようである。また、南側は1区調査時の排土処理のために穴が掘られた際に壊されている。河岸段丘上面から斐伊川に向かって下る斜面の上端部を削り出して平坦面が設けられており、その規模は確認

できた範囲で南北約13m、東西約12mになる。加工段の掘削法面の下端に沿って最大幅1.6mの溝が巡っているが、南側で収束している。平坦面上ではピットが３つ検出されたものの、建物などに関連するような遺構は確認できなかった。加工段の覆土は、上部に上層黄色砂に相当する淡黄褐色から赤褐色の砂層が、下部に黒色砂１に相当する黒褐色～黒色砂層が堆積しており、下層でまとまって古式土師器が出土した。

445～470は加工段１の覆土中や溝から出土した遺物である。445～454は古式土師器の甕である。口縁部の形態は、448は端部が小さくすぼまり、段部の稜は斜め下方に突出するのに対し、445・446・449～452は端部が丸く収まり、段部の稜は横方向に突出し、453・454は端部が面をもち、段部の稜はやや丸みをもち横方向に突出する。肩部の文様は、445・449・454はヘラ状工具による刺突、448は横方向のハケ目の後、小さなヘラ状工具による上下２列の刺突、446・447は櫛状工具による平行沈線、450は波状文が施される。455～457古式土師器の壺である。455は口縁端部が肥厚するもので、頸部の付け根付近に上下２段のハケ状工具による刺突が施され、肩部に平行沈線や波状文が巡る。456は口縁端部が面取りされ、肩部には波状文や平行沈線が見られ、平底の底部をもつ。457は胴部に3段の平行沈線が巡り、その間にヘラ状工具による刺突文が施されたもので、注口がつく器形になるかもしれない。458～464は古式土師器の高坏である。458・459は坏部が大きく開く器形で、459は坏部の底に刺突痕のある円盤が充填されている。458・459ともススの付着が認められることから、煮沸具、あるいはその蓋として使用された可能性も考えられる。460は底部に充填された円盤で、刺突痕が見られる。円盤の径から459よりも小型のものであったと推測される。461～463は脚部の破片である。464は坏部の底から脚上部にかけて残存するもので、坏部の底には刺突痕が見られず、円盤充填技法とは異なる方法で製作されたと思われる。458～463とは器形が異なり、坏部が小型で脚部が屈曲して開くものになるのではないかと考えられる。465～467は古式土師器の鼓形器台で、466の台部には櫛状工具もしくは貝殻により平行沈線が施されているが、全周していない。468は胴部下半が大きく張り、口縁部に向かってすぼまる器形で、古式土師器の脚付鉢である。469・470は弥生土器で、混入したものであろう。469は加工段１の溝から出土したもので、Ⅲ－１様式の甕である。470は無文で厚みのある有段の口縁部をもつ甕で、Ⅴ－２～３様式のものと思われる。以上の遺物から加工段１は古墳時代初頭の遺構と考えられる。

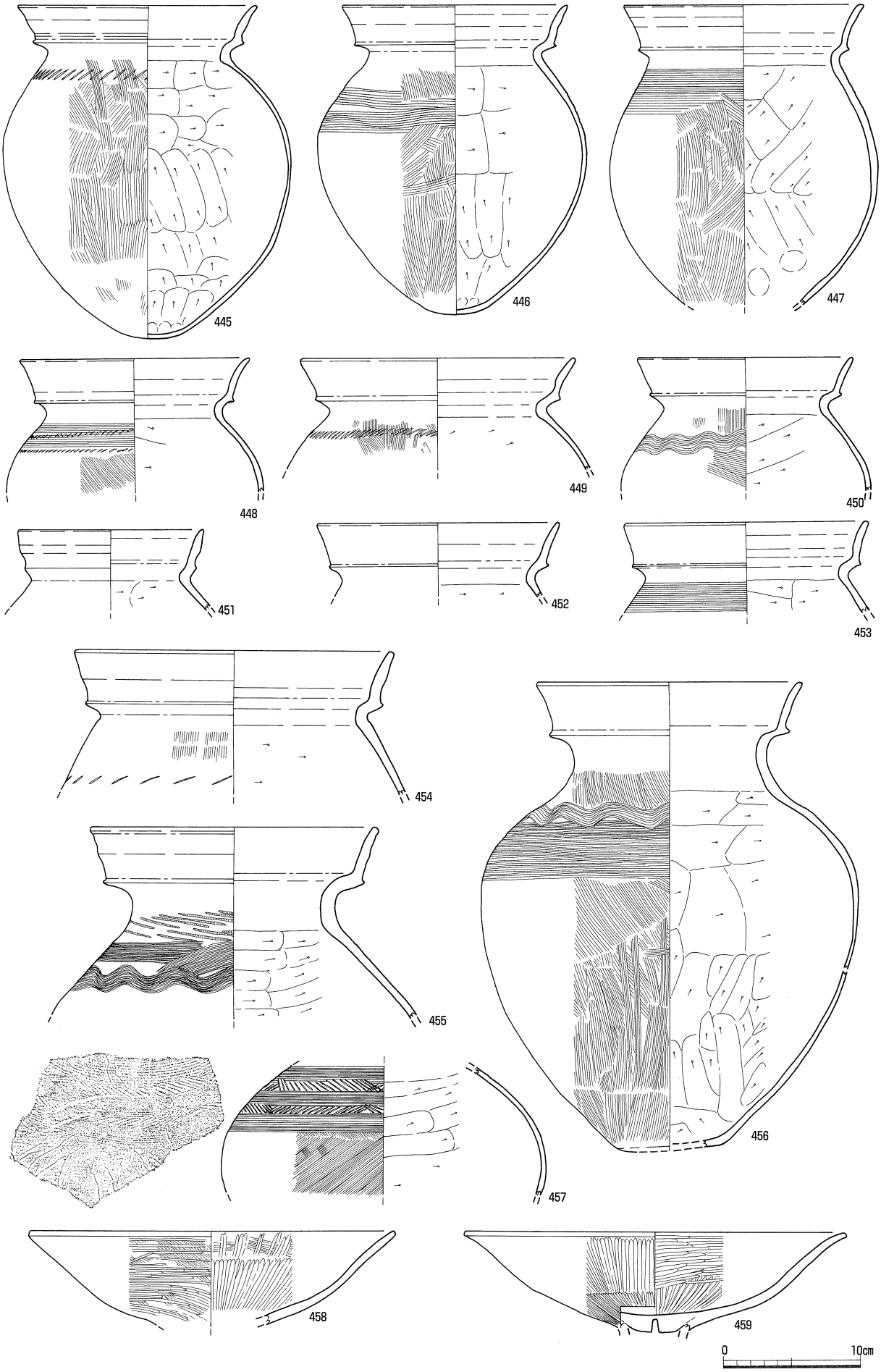
（４）溝（第65図）

SD01は、N39、０39で北西－南東方向に弧状にのびる長さ約８mの溝である。北西端が二又に分かれ、また溝の中央からやや南東よりでも分かれて東側にのびる部分があるが、調査区外になるためその続きがどのようになっているのか分からない。SD02はM39、N39で南北方向にのびる長さ約15mの溝で、北端付近で二又に分かれている。SD02では小片のため図示していないが弥生時代中期前葉の壺胴部片が出土している。

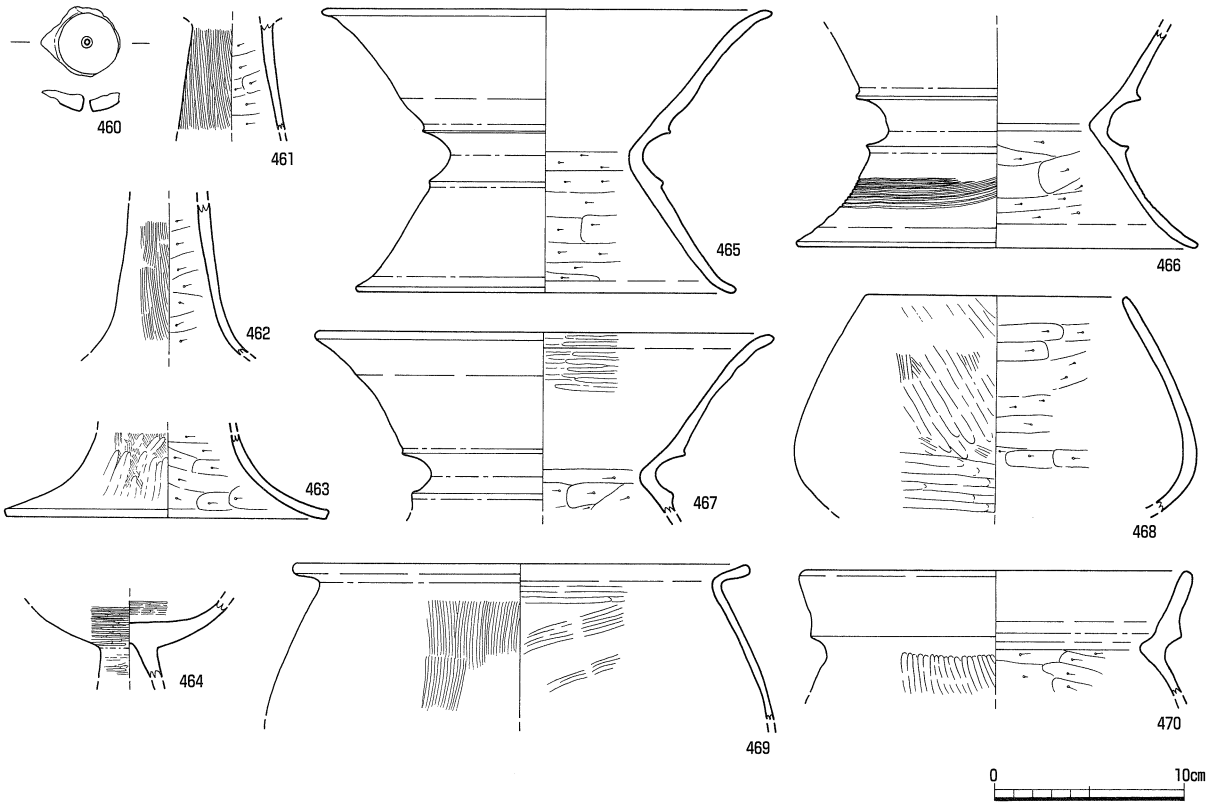
SD03はＩ40に位置し、長さ3.7m、幅0.35mの南東－北西方向に直線的にのびる溝である。小片のため図示していないが、覆土中から弥生時代中期中葉の土器片が出土していることから、中期中葉以降の溝と考えられる。

SD04は２区のＣ42・43、D43の黒色砂１上面で検出された。南西－北東方向に弧状にのびる溝で、南西側は１区の排土処理のために掘られた穴のために壊されており、どのようにのびていたのか分からない。覆土中から古式土師器の甕が出土している。471は口縁端部が丸みをもち、肩部が

第62図　加工段１（Ｓ＝1/80）



第63図　加工段１出土遺物（１）（S＝1/4）



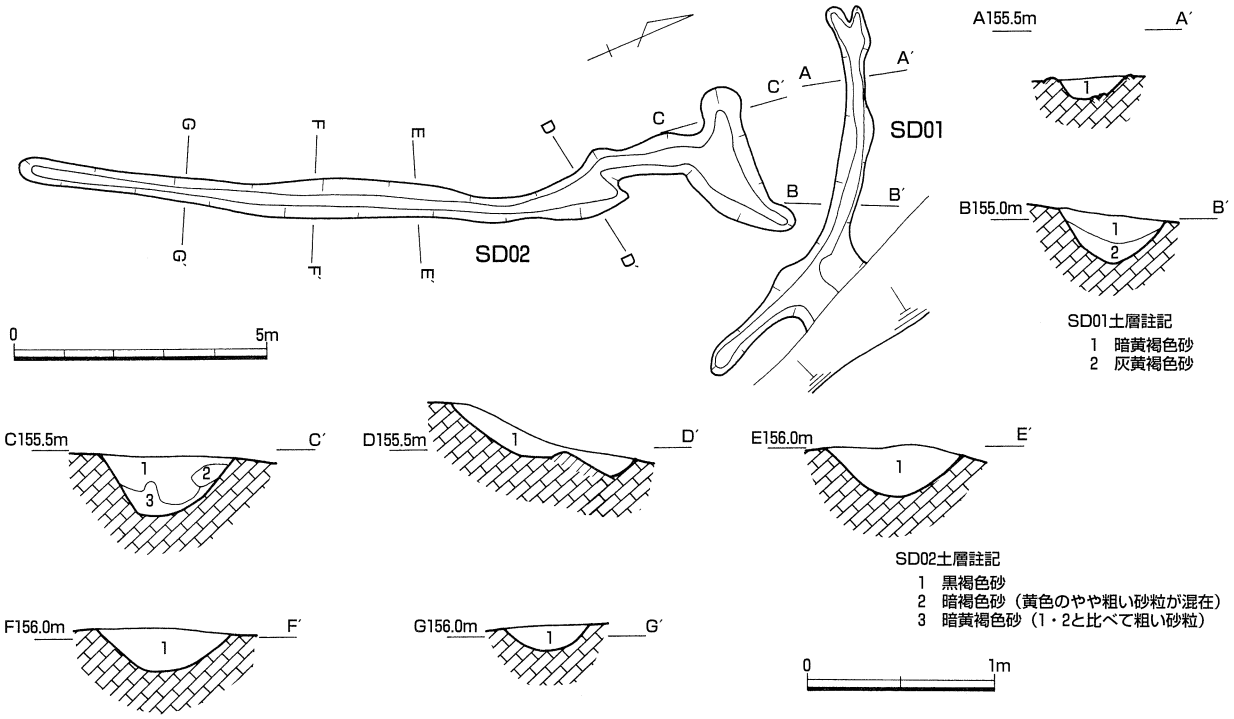
第64図　加工段１出土遺物（２）（S＝1/4）

ヘラ状工具で刺突されたもの、472は口縁端部が面取りされたもの、473は口縁端部が小さくすぼまるものである。474は肩部にハケ状工具による平行沈線が見られる。これらの遺物から古墳時代初頭の遺構と考えられる。

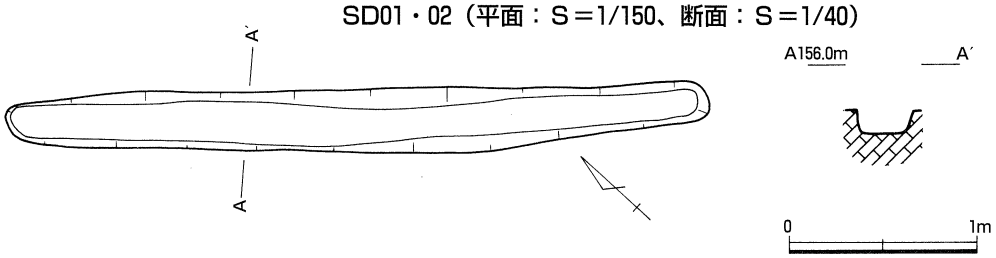
（５）土坑（第66～67図）

SK19～30はいずれも黄色砂１上面で検出された土坑である。これらについての形状・計測値は第７表にまとめている。

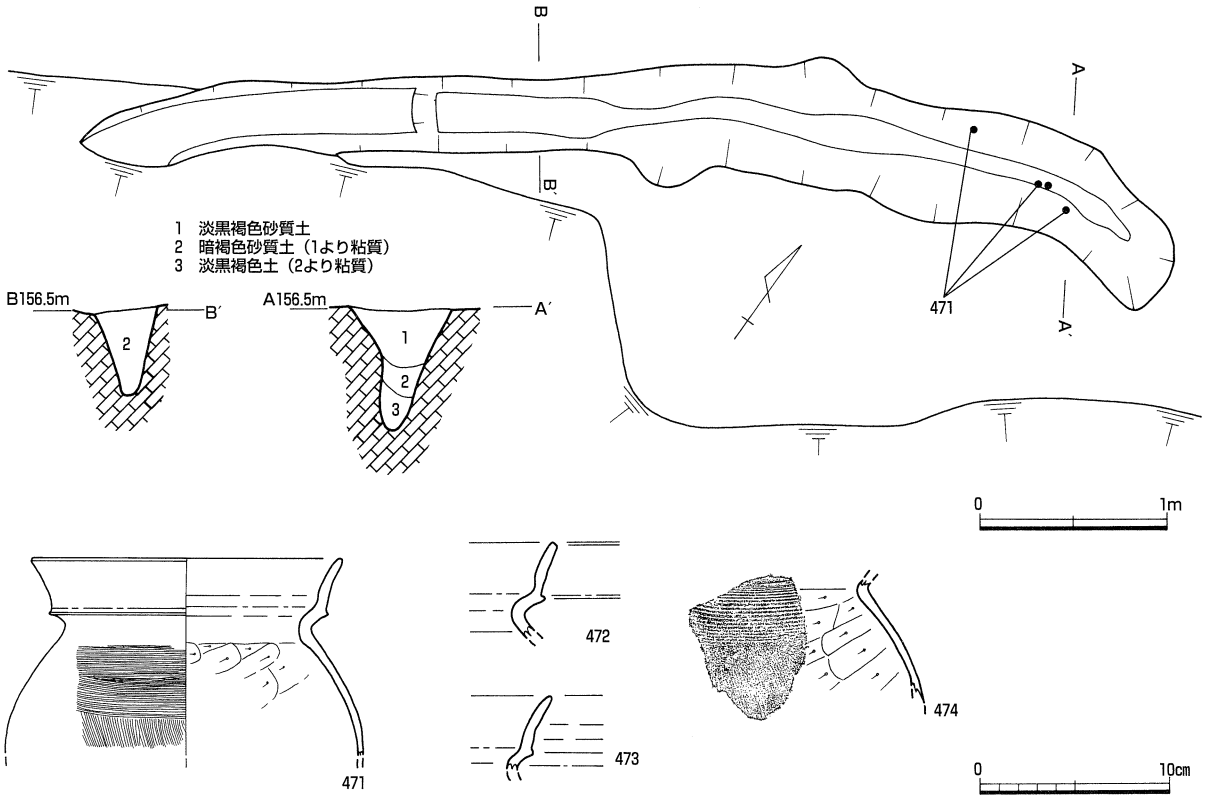
SK19～24は弥生土器片が出土していることから、弥生時代もしくはそれ以降の土坑と考えられる。SK19・20・22は長径が２ｍを超える大形の楕円形、もしくは不整長楕円形の土坑である。SK22はSI03と切り合っているが前後関係は確認できなかった。西側が１段深くなっているが、土層断面から２基の土坑が切り合っている可能性も考えられる。SK21・24は楕円形の土坑である。SK21からは483・484が出土している。483はⅡ様式の無頸壺で、先端が二又に分かれた工具により３列の列点文が施されている。484はⅣ様式の無頸壺で口縁部に３条の凹線が巡り、胴部は櫛状工具により刺突される。このほかにⅣ様式の壺口縁部片も出土しており、SK21は中期後葉の遺構と考えられる。SK24は、小片のため図示していないがⅢ様式の甕口縁部片が出土しており、中期中葉以降の土坑と考えられる。SK23は不整円形の土坑で、弥生土器などがまとまって出土した。475は土器片転用円盤で、中心に穿孔途中の孔が見られる。476・477はⅡ様式の甕で、胴上部に半截竹管の刺突・回転による円形の刺突文や、三角形の刺突文が施される。478・479はⅡ様式の壺である。478は頸部と肩部に半截竹管による多条の平行沈線や、半截竹管による「∩」形の刺突文を巡らせている。479は口縁部に2段の三角形の刺突が入る。480～482は底部片で厚めのものである。これらからSK23は中期前葉に位置づけられよう。



SD01・02（平面：S＝1/150、断面：S＝1/40）

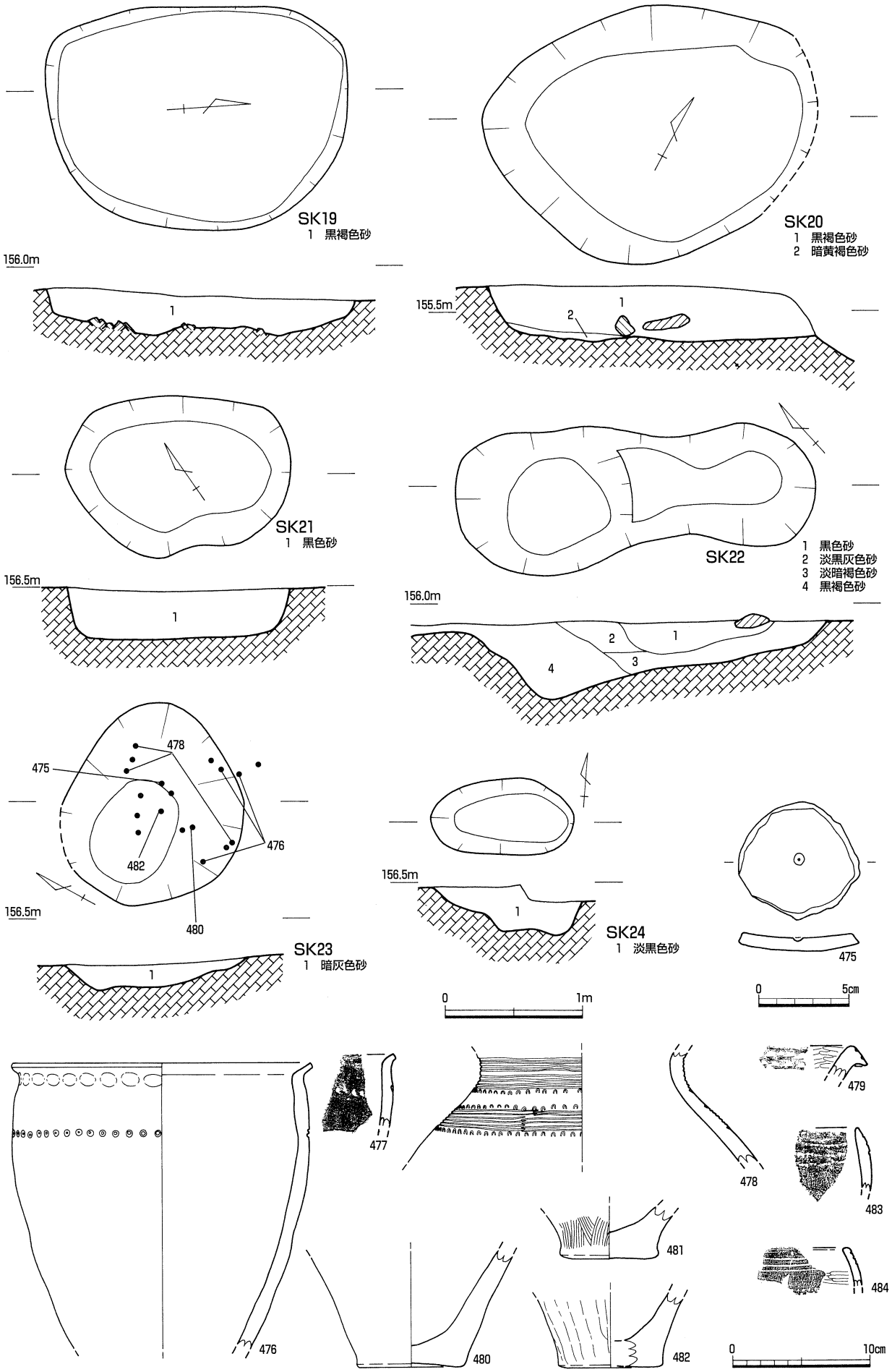


SD03（S＝1/40）

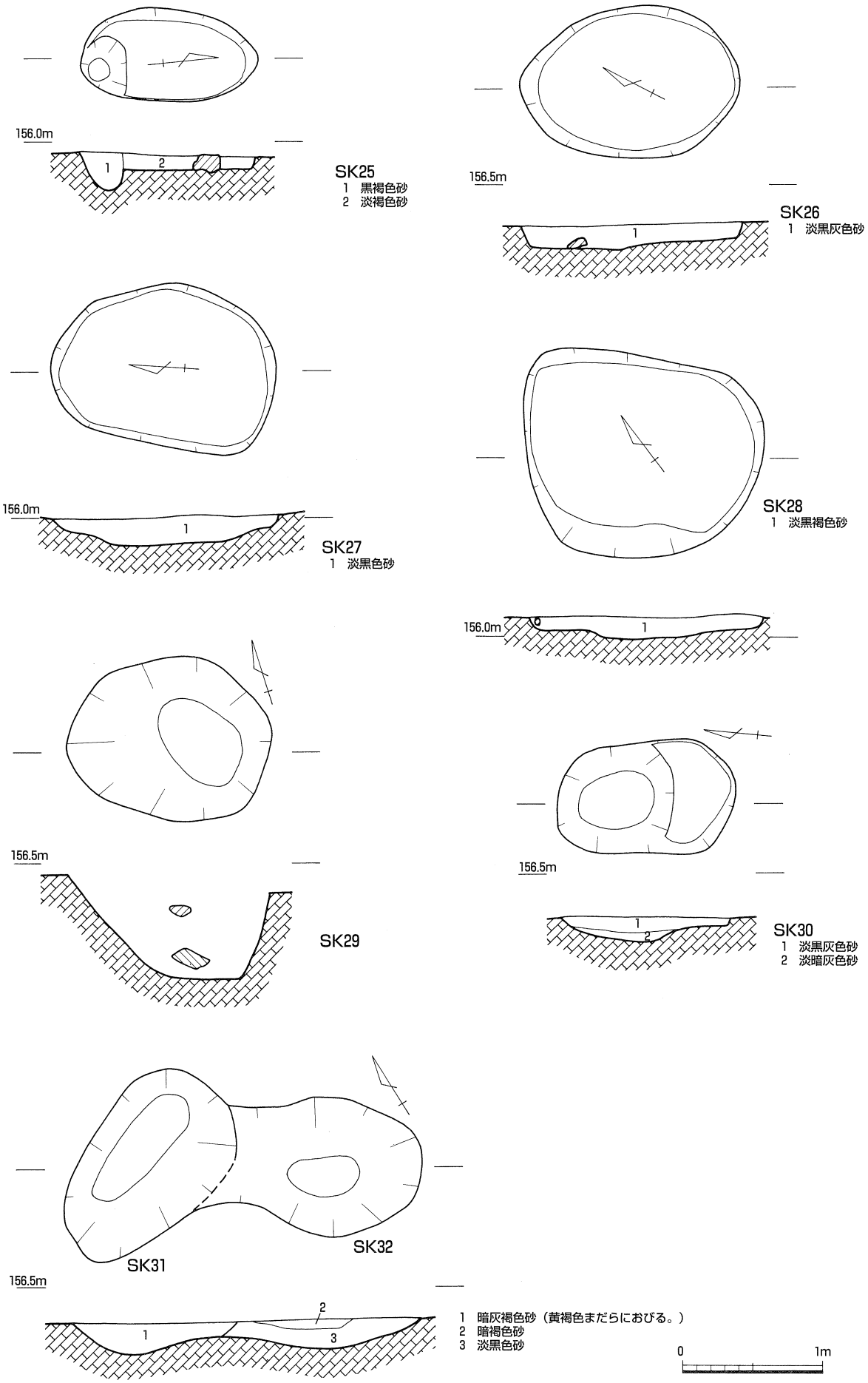


SD04（遺構：S＝1/40、遺物：S＝1/4）

第65図　SD01～04、出土遺物



第66図　SK19～24（S＝1/40）、出土遺物（S＝1/4）
475～482はSK23、483・484はSK21より出土



第67図　SK25～32（S＝1/40）

SK25～SK30については遺物が出土していないため時期は特定できないが、埋土は他の縄文時代から古墳時代初頭の遺構のものと似ているため、縄文時代晩期～古墳時代初頭の間におさまるものと思われる。SK31・32は切り合っており、SK32が先に掘られたことが分かる。

（６）弥生土器・古式土師器（第68図485～73図651）

485～651は表土から黒色砂１にかけて出土した遺物である。以下に時期ごとに記述する。

Ⅰ様式の土器（485～496）　485～490は甕で、485・486は胴部に段をもち、488は３条のヘラ描沈線を巡らせ、沈線間に三角形の刺突が入れられている。489・490は多条のヘラ描直線文が巡り、その下に三角形や楕円形の刺突文が施されている。491～496は壺である。491は頸部に段もしくは沈線が入る。492・493は削り出し突帯をもつ肩部と胴部の破片で、同一個体と思われる。494は無軸の木葉文、495はヘラ描重弧文が施される。496は９条のヘラ描直線文の下に貝殻による羽状文が施される。

Ⅱ様式の土器（497～533）　497～515は甕で、口縁部は体部から短く屈曲し外反するものが多いが、短くほぼ直角に屈曲するもの（503・504・511・515）や、断面三角形のもの（500）もある。497～500は無文のもの、501・506は口縁部に刻目が施され、胴部は無文である。502～505、507～510は胴部の文様が刺突文のみのものである。三角形の刺突が多いが、504のように半截竹管で刺突されたものもある。509･510は口縁部がやや長くのび、刺突の位置がやや低くなっている。511・512・515は胴部に半截竹管による多条の直線文が巡るもので、511には口縁端部に刺突文が、512には直線文の上や口縁部内面に三角形の刺突文が、517は直線文の下に半截竹管による刺突が施される。513・514は櫛描の直線文・波状文をもつものである。516～530は壺である。器形の分かるものは少ないが、口縁部が緩やかに外反するもの（515・518・519・523）、口縁部が逆Ｌ字状で、口縁部上面に平坦な面をもつもの（516・520・521）、口縁部が短く「く」の字に屈曲するもの（522）が見られる。523は口縁部の３か所に穿孔が見られる。壷の文様はバリエーションが豊富であるが、半截竹管状の工具によって施文されたものが多く見られる点は特徴的である。頸部から胴部にかけては、半截竹管や櫛状工具による直線文・波状文が施されたものが多く、これに円形や半截竹管などによる刺突が伴うものも見られる。520・528は波状文に合わせて波状に刺突が入れられている。また、斜格子文（521）、指頭圧痕の入る貼り付け突帯（529）、先端が二又に分かれた工具による直線状や重弧状の列点文（522）が施されたものもある。口縁端部の文様には半截竹管による直線文や複合鋸歯文・刺突文、三角形の刺突文などが見られる。このほか、口縁部上面や内面に施文されたものもある。531～533は鉢である。531は２本のヘラ描の沈線が縦横に入り、その区画内にヘラ描による弧状の沈線が施されるもので、Ⅰ様式にさかのぼる可能性もある。

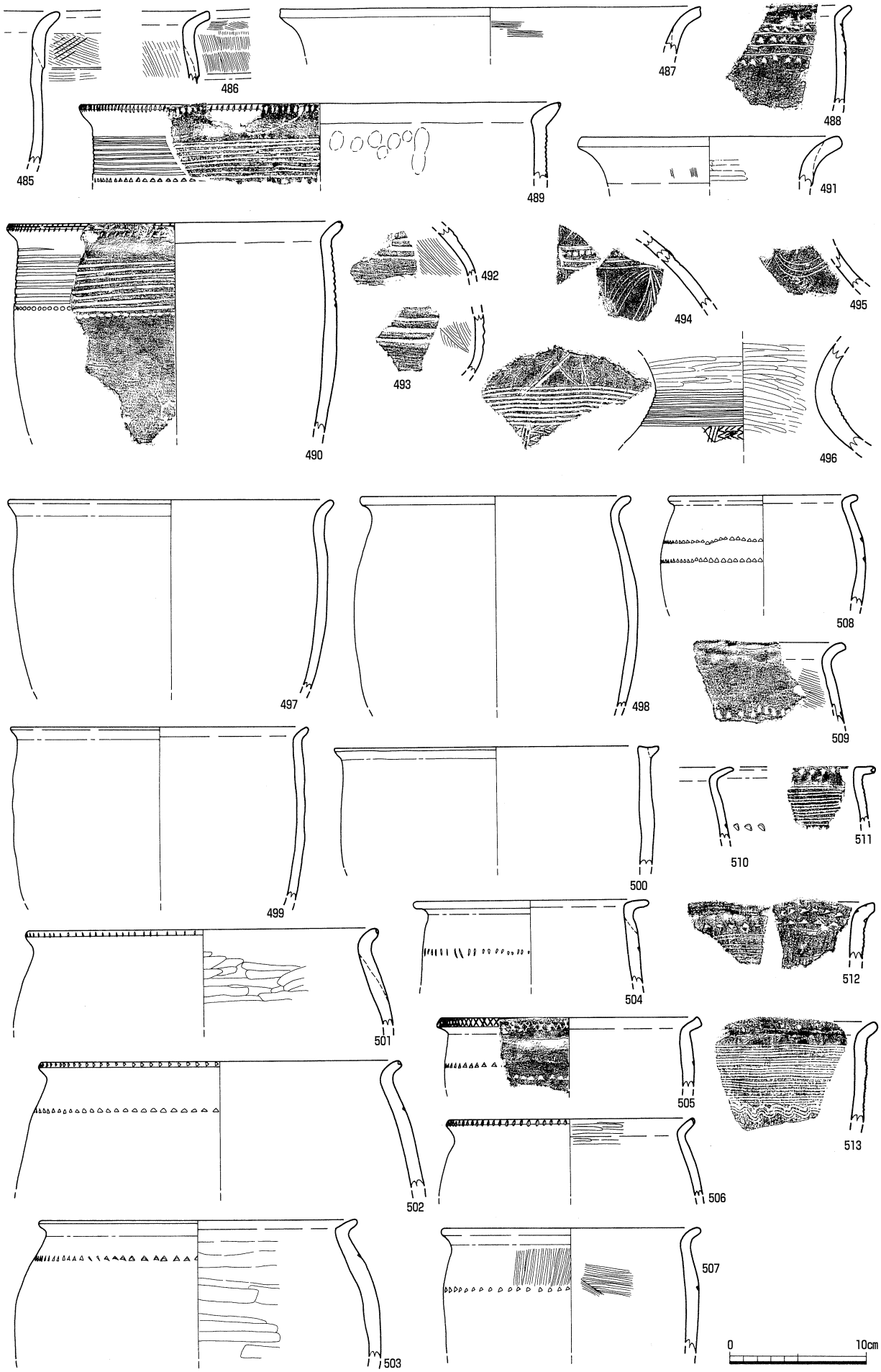
Ⅲ様式の土器（534～567）　534～542は甕で、頸部の屈曲はⅡ様式のものよりも鋭くなっている。534・535は口縁端部に小さく面をもち、539・540・542は口縁端部に凹面をもつものである。541・542は肩部に刻目をもつ突帯が貼り付けられている。胴部中位にはハケ目原体や、先端が楕円形の棒状工具、櫛状工具で刺突されたものも見られる。543～554は壺である。543は長頸壺もしくは直口壺の口縁部で、端部外側に刻目をもつ。544～548は広口壺で、544は口縁部内面に櫛状工具による斜格子文と刺突文、口縁端面に櫛描の斜線文をもつものである。545・546には口縁端面に斜格子文が施される。544・547～551・554には頸部に断面三角形の突帯が貼り付けられており、突帯に刻目や指頭圧痕が入れられたものもある。552・553は直線文と直線文との間に斜格子文や複合鋸歯文

が施されたものである。552は半截竹管状の工具で施文されていることからⅡ様式までさかのぼる可能性も考えられる。554は櫛描直線文の間に櫛描波状文が入れられている。556は短頸壺、557・558は貼り付け突帯をもつ無頸壺である。559・560は椀形の鉢で、555は口径10cmの小型のもので、「く」の字状口縁の鉢と思われる。561は大型の鉢で、口縁部と指頭圧痕をもつ突帯が貼り付けてつくられている。562～567は高坏である。口縁部の形状はいずれも上面が平坦になるものであるが、562は外側に長く張り出すのに対し、563～565は内外面に肥厚する。565は口縁上面に円形浮文をもつ。567は坏部と脚部の境に刻目突帯が貼り付けられている。

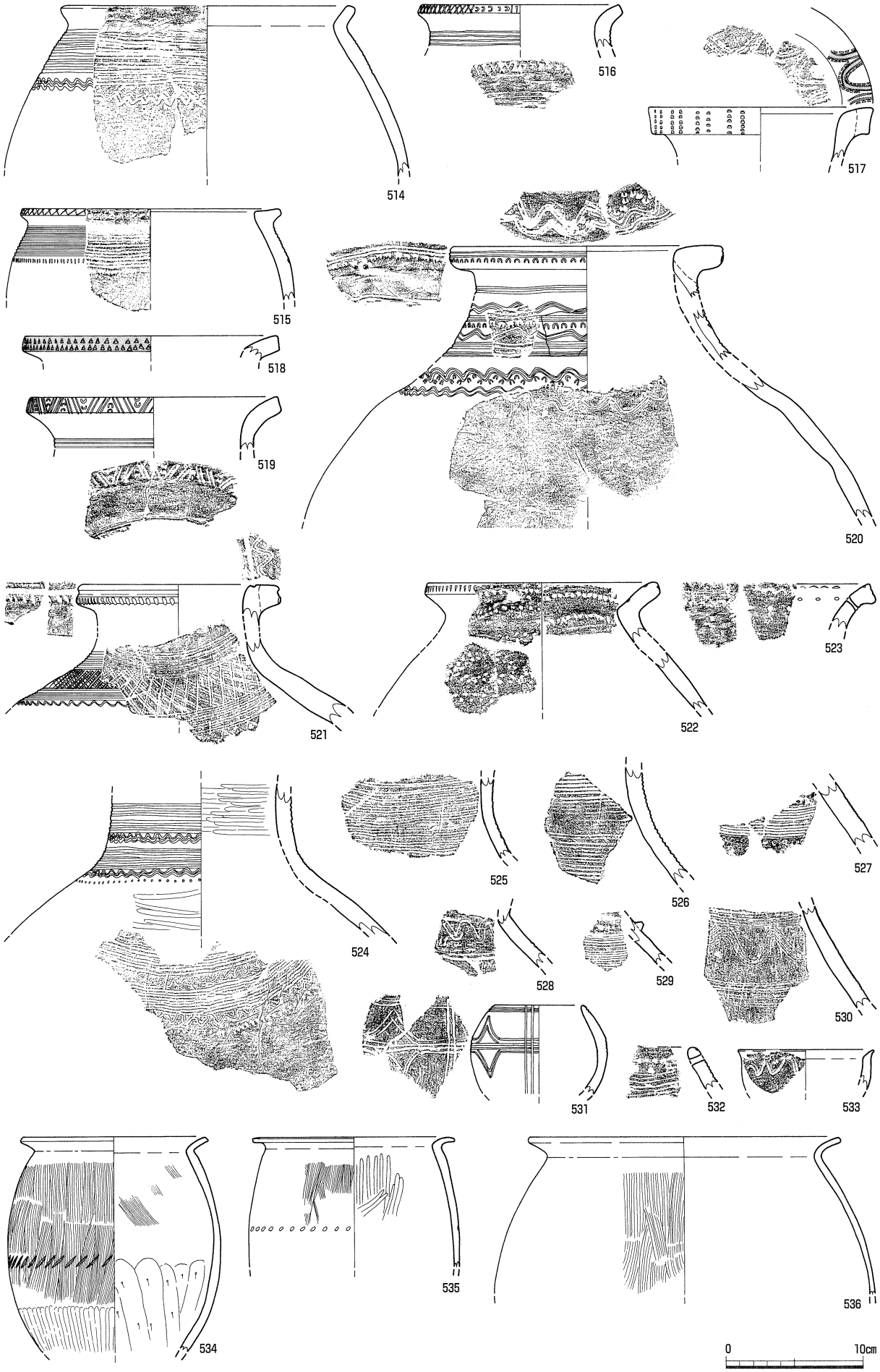
Ⅳ様式の土器（568～608）　568～583は甕である。口縁部は２～４条の凹線が施されており、568には凹線ののちに刻目が入れられている。579～583は口縁部が上下に拡張されている。581はⅤ－1様式まで下るものかもしれない。576・577は頸部に指頭圧痕が入る突帯をもつもので、578も同様のものであったと思われる。これらに対し、579は頸部に刻目のみ施されたもので、退化した形態と考えられる。583は肩部に３条の凹線が施されたのちヘラ状工具で刺突されたもので、１～3区で出土した中で「塩町系土器」といえるものはこれのみであった。584～589は広口壺の口縁部である。584～588は、口縁部がほぼ水平な平坦面をもつもので、この面に斜格子文や斜線文、羽状文、波状文、円形浮文が施され、口縁部外面には凹線が巡る。589は口縁端面と内面に凹線が入る。590～592は横方向の突帯や櫛描直線文で区画し、その中にヘラ状工具により斜線文が施されたものである。591は直線文をはさんだ上下で斜線文の向きが異なり、有軸羽状文となっている。593～595は直線文と、波状文や山形文が巡る。595の下側の直線文は凹線で描かれている。596～598は胴部が横方向に大きく張り出す器形で、台付壺になるかもしれない。597には注口もしくは把手が欠損したと思われる部分が見られる。596・597の胴部上半には有軸羽状文が巡り、597の胴部中央には突帯が貼り付けられている。599は無頸壺で、口縁部に凹線文、胴部に櫛状工具による刺突が施される。600～608は高坏である。600～602は口縁部外面に、603～605には口縁部外面と口縁端部に凹線文が巡る。608は脚柱部に部分的に凹線文が入るのに対し、605は密に凹線文が入る。607は脚端部が肥厚し、凹線文や刺突が施されている。

Ⅴ様式の土器（609～632）　609～613、615～617はⅤ－1様式の甕である。609～613は口縁部が内傾するのに対し、615～617は口縁部が短く外反しており、やや新しい様相を示す。610は肩部にヘラ状工具による２段の刺突が巡り、616はヘラ状工具による刺突と、その下に１条の沈線が施される。618は頸部に退化した刻目突帯、肩部にヘラ状工具による刺突をもつものである。619はⅤ－１～２様式の鉢で、頸部は穿孔され、肩部に有軸羽状文が巡る。620～623は小型の甕、もしくは鉢で、これらもⅤ－１～２様式のものであろう。624はⅤ－１様式の高坏で、外面は赤色顔料が塗布されている。625はⅤ－2様式の壺で、肩部にヘラ状工具による刺突が巡る。614・626・627はⅤ－２様式の甕である。614と比べ、627は口縁部が外傾し、平行沈線も多いことからやや新しく位置づけられよう。626は口縁部が無文で、厚手のものである。628は鼓形器台で、Ⅴ－２様式のものと思われる。629はⅤ－３様式の甕、630は口縁部の平行沈線が部分的にナデ消されており、Ⅴ－３～４様式のものと思われる。１～３区ではⅤ－３様式の土器は極めて少ない。631は甕の肩部で、大きな波状文が２段に巡る。632は高坏の脚部で、Ⅴ－２～３様式のものか。

古式土師器（633～638）　633・634は甕の口縁部で、端部は丸く収まり、段部の稜は下方へ突出する。635は壺の肩部と思われるもので、貝殻による平行沈線と右下がりの斜線が見られる。636は頸



第68図　1～3区弥生土器（1）（S＝1/4）



第69図　1～3区弥生土器（2）（S＝1/4）